

いつものまさ子ならさう思ふ筈であつた。併し彼女は享造の言葉に對して、さういふ咎めだてをする餘裕をもつてゐなかつた。享造の言葉は強い力となつて彼女の胸に迫つてきた。彼女はそれに抵抗する事が出来ないやうな氣持がした。

ふと其時、彼女は女學生時代に受取つた幾つかの男からの手紙を思ひ出した。其一つは白山の方から神田の方へ通學してゐる中學生からであつた。他の一つは傳通院の裏のあたりに下宿してゐる高等商業の學生からであつた。更に今一つは小石川の通りで折々すれ違つた醫科大學の學生であつた。

まさ子は其當時の中學生の可憐な様子を思ひ出す事が出来た。その學生は背の餘り高くない色の白い細面の少年であつた。殆ど毎朝のやうに彼女と彼女の學校の近くで出會つた。まさ子は初めその學生を氣にとめてゐなかつた。ところが或る時その學生からだと言つて、彼女の下級の者が一枚の手紙のやうな物を彼女の所へ持つてきた。まさ子は何氣なくそれを受けとつて見た。それには詩のやうなものが書いてあつた。その次の朝、彼女は興味をもつてじつとその學生を見た。すると其學生は顔を赧くして、下を向いて、急ぎ足に通り過ぎてしまつた。それから彼女はその學生を二度ほど同じ通りで見かけたに過ぎなかつた。

まさ子は間もなくその學生の事を忘れてしまつた。そして相變らず元氣よく程近い學校と自宅との間を往復してゐた。

T——といふ醫科大學の學生から、執念深い追跡を受けたのは、まさ子が十六の秋から十七の春へかけてであつた。初め彼女はその學生と小石川の電車通りで折々行きあつた。初めのうちはそれが折折に過ぎなかつたが、暫らくの後には殆ど毎日のやうになつた。その時間も、行きあふ場所も、殆ど同じになつた。その學生は矢張り小石川の久堅町の方からやつて來た。まさ子はその學生といつても巢鴨三田線の電車通りを越えた横町で行きあつた。

「今日もあの人がかかるかしら。」まさ子は其邊で折々そんな事を思ふ事さへあつた。それはまさ子がその學生に何かしら興味を寄せてゐるためではなかつた。毎朝學校へ行きがけに門の郵便受を見る事になつてゐるまさ子は、どんな朝でも、家の玄関を出ると先づその郵便受に眼をやるのが習慣であつた。まさ子の學生に對する心持もそれと同じやうなものであつた。さうして眼をあげて前の方を見ると、必ずそこへ其學生が歩んで來た。かうして毎朝その學生と行きあふうちはまだ無事であつた。暫らくするとまさ子はその學生といろいろな場所に出あふやうになつた。まさ子は或る時學校の歸りに、白山の方から追分の方を廻つて歸つた事があつた。さうすると其途中で彼女は又その學生に行きあつた。或る日曜の午後に、彼女は日比谷の音楽をきゝに行つた事があつた。その時

も彼女は日比谷の群集の中にその大學生の顔を見た。まさ子は或る時みのもと二人で祖母のお伴をして池の端の博覽會へ行つた事があつた。すると其時も彼女はその會場に同じ學生の制帽姿を發見した。その學生はいつも黒い羅紗の制服をきてゐたが、その襟にMといふローマ字がついてゐるので、彼女はそれが醫科大學の學生である事を知つた。

白山の方からくる中學生から詩のやうな手紙を受けとつた頃にくらべると、ずつと大人になつてゐたまさ子は、その大學生の態度を少しをかしいなと感付いた。それから間もなくの事であつた。彼女は自分の家の郵便受から彼女に宛てたその學生の手紙を受けとつた。その手紙には「福井まさ子様」と彼女の名前が正しく書いてあつたので、まさ子は初めそれをさうした手紙だとは思はなかつた。併し彼女はそれを讀んで見てびつくりした。それは其學生が長い間彼女を思つてゐた事が書いてあつた。その手紙によると……彼は長い前からまさ子を見てゐた。彼はその夏大森の海水浴で初めてまさ子を見た。その時のまさ子の大膽な水泳ぶりはひどく彼に興味を起こさせた。それから彼は秋になつて小石川の電車通りに彼女を見てびつくりした。薄い海水着に海水帽をかぶつた彼女は紫色の制服姿にかはつて居た。併し大森で見た彼女は矢張彼女であつた。自分はメスを持つて人間のからだに對する事を研究してゐるから、自分の思想は兎角すべてのものを物質視するやうになつ

てゐるが、併し美しい小さな靈をもつてゐる彼女に對しては、自分の心は矢張、それを戀する事に向つてあこがれる。——そんなふうの意味が、その學生の最初の手紙に書いてあつた。

まさ子はその日一日、學校に於ける教師の講義を十分に落ちついて聽いてゐる事が出来なかつた。まさ子はその手紙の處置に困じ果てた。その擧句にとり／＼それをすたく／＼に破つて、便所へ投げすてゝしまつた。併しそれだけでは其學生に對する解決はつかかなかつた。それから殆ど毎日のやうにT——から彼女にあてゝ手紙が來た。それには彼女の知らないやうな珍らしい文句が書いてあつた。「私はザツヘル・マゾツホの徒である。私はあなたに踏まれたい。私はあなたの其小さな靴で踏まれたい。」などゝ書いてあるのがあつた。まさ子は其意味を解する事が出来なかつた。併しまさ子が其意味を解すると否にかゝはらず、T——からの手紙は次第に多くなつて來た。

或る日みのは、まさ子の本箱の抽斗からT——からの手紙を一つ二つ見つけ出した。それから福井家に初めての大きな問題が起つた。その手紙の内容が、最初に祖母の前に披露されたのは言ふまでもない事であつた。

「本當に私驚いちやつたわ。けれど私、先達からまあちゃんの様子がをかしいと思つてゐたのよ。」みのはさう言ひながら、出来るだけ誇張した言葉を使つて、その手紙の内容をこま／＼と祖母

に告げたのであつた。

「あの子はまあ、もうそんな事をしてるのかねえ。」

それが祖母の最初に言ひ放つた言葉であつた。まさ子はその日學校から歸つてくると、早速祖母とみのるの前へ呼び出された。さうして醫科大學生との關係を詰問された。併し彼女の返辭には少しも悪びれたところが無かつた。彼女は少しも隠すところなく、其の最初からの經過を話した。それが爲に祖母とみのるは彼女を責める事が出来なくなつた。

「兎に角その手紙を隠してゐるのが悪いわ。」

とう／＼みのるがさう言つた。さうして、いづれにしてもその事を、まさ子の父の耳にまで入れて置く必要があると主張した。其晩英之輔は祖母のまぢ子から出したT——の手紙を見て、にこ／＼しながらまさ子を顧みて言つた。

「馬鹿者は放つとけ。」

まさ子はその言葉をきいてほつと授けられたやうに思つた。T——の問題は、併しそれでもまだ解決がつかなかつた。まさ子はそれから毎日學校の往復にT——にあはなければならなかつた。

その手紙は相變らずまさ子の家の郵便受を訪づれた。やがてT——はまさ子の方へ近づいて話しか

けるやうにさへなつた。さういふ事からしてまさ子は次第に苦痛を感じるやうになつた。彼女は初めて大學生から心の扉を叩かれたのであるが、それが喜ばしい春の泉となつて流れ出さないうちに、今度は反對に重くるしい壓迫を感じるやうになつたのであつた。まさ子の心がさういふ具合に變化してゐる一方に於て、徳川末期のサムラヒの家に教養を受けた祖母のまぢ子は、英之輔のその問題に對する態度を餘りに放任に過ぎると言ひ出すやうになつた。その結果として英之輔はとう／＼その大學生に對して一本の手紙を書かねばならなかつた。その手紙の内容がどういふものであつたかは何人も知らなかつたが、不思議な事にはそれからT——の手紙がばつたりと跡を斷つてしまつた。まさ子も又その大學生を通學の道筋に見受けなくなつた。

それ程の事件であつたから、まさ子はその事から何等かの深い印象を受けてゐなければならぬ筈であつた。然るに彼女はそれが過ぎ去つてしまふと、間もなくそれを忘れてしまつた。彼女は相變らず元氣よく學校へ通學して、よい健康と、明るい心持とをもつて、學課にいそしんだ。さうしてやがて彼女は學校を卒業した。

(あの頃の心持にくらべると今度はどうしたんだらう?) まさ子は搖椅子に身をもたせたまゝ、さう思はざるを得なかつた。

享造の強い言葉と強い態度とが、また彼女の記憶に浮んで来た。それは彼女に幾らかの反感を起させるけれども、一方ではその言葉は、彼女に一種の命令でももあるやうな權威を以て迫つて来た。彼女はその命令に従はねばならぬやうな氣持さへした。

(大きな事實が私の前に迫つて来た!) まさ子は漠然とさう意識せずにはゐられなかつた。彼女は再び自分の手に持つてゐる紙片を開いて見た。

「僕は今日あなたにオツプアーする事があつてお訪ねしたいです。」

フアーバーの軟らかい鉛筆の文字が、恰も酔つて踊つてゐるやうにそこに飛躍してゐた。勝手な方へ向いて飛躍してゐるその文字を見ると、まさ子はそれを書いた人と著しい對照をなしてゐるところの玉蟲を思ひ出さないのであるなかつた。

その二人は現に今の先きまでその部屋に向ひあつてゐた。その時の二人の對照も著しいものであつた。併しまさ子の頭に映つてゐる個々別々の二人の對照は一層著しいものであつた。まさ子は初めて玉蟲を知つた頃の印象をはつきり思ひ出す事は出来ないが、學生時代のその人と、今のその人との間に大なる變化を見出す事は出来なかつた。まさ子の眼に映つた玉蟲は、初めから、靜かな、落ちついた、大人めいた人であつた。併しそれかと言つて、普通の意味に於ての謹嚴であるわけ

もなければ、道德家めいてゐるわけでもなかつた。玉蟲はまさ子やみのるに對して、享造のやうに初めからむづかしい議論をしかけるやうな事はなかつた。それかと言つて、まさ子やみのるをさういふ事が解らないからと見くびつてゐるふうもなかつた。まさ子の眼に映つた玉蟲は、靜かな、優しい、さうして理解のある心を湛へてゐる青年であつた。

さう思ふと、まさ子は急にその人を懐かしく思はざるを得なかつた。その懐かしい氣持は、享造の申し出によつて一層煽られたかの感があつた。まさ子はその時ふいとT博士の翻譯で讀んだハムレットの言葉を思ひ出した。それはハムレットが其母を強諫する時の言葉であつた。其の言葉の中に、ハムレットが毒殺された父の額を褒めた白があつた。まさ子はその白と、玉蟲の額を結びつけて考へたのであつた。玉蟲の額はそれほど知識的に廣く秀でゝゐた。其眼は澄んで深く落ちついてゐた。その頬は希臘の彫刻に見るアレキサンダー大王のやうな線を持つてゐた。まさ子は懐かしい氣持で暫らくその顔を心に描いてゐた。

併し玉蟲はどこかに人に許さない處を持つてゐた。それは世間でいふ人に弱味を見せないとか、人の心を信じないとか、さういふ意味のものではなかつた。自己を警戒し、他人を近づけない——さういふ普通の意味に於ける人に許さない處ではなかつた。彼の人に許さない部分は、彼の内部の

確く自己を把握してゐる精神からでも發してゐるらしく思はれた。まさ子は玉蟲がさういふ人の踏み込む事の出来ぬ部分を持つてゐる事を感じる事が出来た。それを思ふとまさ子の玉蟲の方へ近づいて行く心はたと行き留つた。彼女のマインドは玉蟲の方へ慕ひ寄つたが、そのハートはどうしてもそちらへ近寄る事を承知しなかつた。

それに較べると、まさ子の心は容易に享造の方へ接近する事が出来た。彼女は享造に對して幾分の反感を持つた。不快をさへ感ずる事があつた。その壓迫するやうな態度に對しては、むら／＼と反抗したいやうな氣分になる事もあつた。併し享造のいふ事は何となく彼女の心に喰ひ込んで來た。まさ子は玉蟲に對すると、黙つてその言ふところを聽いてゐなければならぬやうな氣持がしたが、享造に對しては、場合によつては自分の心持を投げつけてやる事が出来るやうな氣持がした。(私の心は矢張あの人の方に傾いてゐるのかも知れない。)まさ子は漠然とさう思つた。さう思つてびつくりした。

まさ子は靜かに搖椅子から立ち上つた。さうしてそれまで手に持つてゐた享造からの紙片を、このテーブルの上の灰皿の上にのせた。そして彼女はその傍にあるマッチを取り上げた。まさ子はやがて其マッチを磨つて、それを灰皿の上の紙片につけた。

眞白な紙片は音もなく靜かに燃えて行つた。そして間もなく小さな黒い灰屑となつてしまつた。「あら、何を燃やしたの？」

いつの間に二階へ昇つて來たのか、みのるはさう言ひながら、まさ子の方へ近づいて來た。彼女はこれから外出でもするつもりと見えて、その少し前まで着てゐた羽織を、一寸した折の外出着に着かへ、其手に駱駝製の襟巻と手袋とを持つてゐた。

まさ子は暫らくみのるの顔を眺めてゐた。彼女の心はそれまで考へてゐた考へを離れなかつたのであつた。併し一寸の間に化粧をなほしたらしいみのるの白い顔を見ると、彼女は急にみのるから懸けられた言葉を思ひ出した。

「茲に紙片が落ちてたから燃やして見たのよ。」

まさ子はさう答へた。みのるは怪訝さうな顔をして灰皿の上の黒い燃え屑を見てゐたが、やがて、

「まあちゃんはさつきからずつと茲にゐたの？ 玉蟲さんなどが歸つてから——」

「えい。」

「まあちゃんは此頃よく茲へ來ちや何か考へ込んでるのね。何をそんなに考へる事があるの？」
「私は何も考へてやしないわ。」

まさ子は反射的にかう答へた。併し彼女の顔には被ひがたい狼狽の色があらはれた。勿論みのはそれを見逃さなかつた。

「でもまあちゃんの顔にちゃんとそれが書いてあるわ。」

とみのは言つた。その言葉はまさ子の急所に觸れたやうであつた。彼女はさつと顔を赧くした。併しまさはそれでみのは降参しようとは思はなかつた。彼女は渾身の努力をもつて心の狼狽を打ち消さうと試みた。さうして言つた。

「みのはさんはこれから何處へお出かけになるの？」

みのは、まさ子の話題をかへやうとする手に、わざと乗つたやうな顔をして言つた。

「一寸杜田さんの處まで行つてこようと思ふのよ。」

「さう、御年始？」

「いゝえ、一寸御相談したい事があつて行くのよ。……それはさうとね、」と言つてみのは急に眞面目な顔をした。さうして靜かに、如何にも重々しさうに勿體をつけて言つた。「あの本多さんていふ人ね、まあちゃんはあの人に氣をつけないといけないわ。」

まさ子はその言葉によつて、みのはの心の中にどういふ考へが起つてゐるのかを推測する事が出

來た。併し彼女は黙つてみのはの顔を見つめてゐた。

「私は杜田さんから聞いたんですけどね、……あれは大森の音楽會から間もない事だつたわ。杜田さんに會つた時にその話をする、あの方はよく本多さんて方を知つてゐたわ。そこでよく杜田さんにきいて見ると、あの方は何でも信用の置けない方だつて言つたわ。だからまあちゃんもあの人には少し警戒した方がいゝでせう。」

まさ子は今の先き、みのはの前では其の問題に觸れまいと思つてゐた。併しみのはにさう言はれて見ると、それに就て何とか言はなければならなかつた。

「さう、どんな點で信用が置けないんでせう。」

「何でも品行が餘り良くないさうだわ。尤も美術家なんてものは、みんな其の點ではひどいものだつてお話しだけど——」

みのはさう言つて、杜田からきいた話しても思ひ出したらしく、にこくと其の顔に變な笑ひを浮べてゐた。

まさ子はそれに對して何とも答へようとは思はなかつた。そこで彼女はみのはが其の次に何を言ひ出すかを待つてゐた。

「一體繪かきなんでものは、西洋でも随分亂暴な生活をしてるんですつてね。」

其時まさ子は急にみのもるの方へ向きなほつて言つた。

「私はこの頃少し考へてる事があるのよ。今日はそれを一つみのもるさんに聽いて頂きませうか。」

みのもるは其言葉の調子から、何となく抑へつけられるやうな氣持を感じた。それが爲に彼女は杜田からきいた巴里の放縱な美術家生活に關する智識をそこへ披露する事が出来なくなつた。併しみのるは其代りに、まさ子から面白い告白を聽く事が出来ると思つた。彼女は心の中で、まさ子が享造に關する何事かを告白するに相違ないと思つた。

「私が近頃何か考へ込んでゐるつてのは事實よ。」とまさ子は語り出した。「いつだつたかも茲でみのるさんとお話しした事だけど、私は近頃人間の本當の生活つてのは、どういふ事かと思つてるのよ。それに就て私はみのもるさんのお考へをききたいと思ふわ。」

みのもるは、まさ子が餘りに豫期してゐた事と違つてゐる事を言ひ出したので、暫らく呆然とせざるを得なかつた。

「私は近頃その問題で胸が一杯になつてゐるので、何をすることも出来ないわ。」

とまさ子は再び言つた。

「何だか大問題らしいのねえ。人間の本當の生活つて……まあちやんの言ふ意味はどういふことなの。」

「例へばみのもるさんのよくいふ美術家の生活だとか、藝術家の生活だとかいふものね。さういふ人達の生活と、あたり前の人の生活と、どつちが本當の生活でせう。先づその點から解決をつけて行つてもいいわ。」

「そりや私に言はせたら何でも無いわ。あたり前の人はたゞ生きて行くだけでせう。たゞ生きて行くだけなら、獸でも蟲でもしてゐることだわ。」

「さう簡単にすべての人の生活を解釋してしまへば何でも無いわ。併し私にはすべての人の終局の目的が、藝術家になるにあると考へる事は出来ないわ。多くの人がいろ／＼な天分と資質とを與へられてゐるやうに、あらゆる人は其與へられた稟性の方向に進むのが本當ぢやないかと思ふわ。女性が人の妻とならなければならぬやうに、さうして子供の親とならなければならぬやうに……」

「其最後の點が傳習的な間違つた考へだと思ふわ。」

とみのもるは、急にまさ子の言葉を遮りとゞめるやうに言つた。

まさ子は思はずその顔に微笑を浮かべながら言った。

「まあちゃんの考へは傳統と習慣に固著してしまつたのね。それぢやいつまで話しあつたつて同じだわ。」

「さうでもないわ。あなたと私の考への相違は、主としてあなたと私の性格の相違から出てゐるんだわ。併しこの問題はもう已めませうよ。私は今少し精しく考へた事があるけれど、みのるさんはこれから、杜田さんの處へ行かうつてところだから、此上お引留しちやお氣の毒だわ。」

「ぢやあ私これから出かけるわ。いづれ私もそのうちまあちゃんにお話ししなければならぬ事が出来るかも知れないわ。」

さう言つて、みのるは二階から下へおりて行つた。まさ子は顔に微笑を浮かべながら其後ろ姿を見送つた。併しみのるが玄關から出て行く物音をきくと、彼女はまた搖椅子にからだをもたせてじつと考へ込んだ。

一三

「先程はお電話で失禮。」

さう言ひながら、みのるは杜田はつ子の借りてゐる「婦人文學」の編輯室へ這入つて行つた。それは日比谷の高架線に近い裏通りの粗末な貸事務所の三階の一室であつた。杜田はその小さな部屋を「婦人文學」の編輯室兼事務室に宛てゐた。杜田の言ふところによれば、其部屋は八疊程の廣さに過ぎぬが、それでも室代は三十圓に近かつた。その代りに、そこには貸事務所附の電話があつてそれを自分の物のやうに使ふ事が出来るし、其上食べものはいつでも自由に近所の料理屋から運ばせる事が出来るし、留守にする時は部屋の戸に鍵をかけて置きさへすれば安全であるし、杜田のやうに一人ですべての事をする者にとつては極めて便利であつた。

「三十圓出せば山の手なら住まひにも事務所にもなる相當な家が一軒借りられてよ。」

杜田は折々みのるに向つてさう言つた。

「そんなら、あなた引つ越すといふわ。さうして自分の家を事務所にして置けば、いろんな點で便利でもあり經濟でもあるでせう。」

或る時みのるは言つた。

「でもこゝの方が場所がいゝわ。第一、日比谷つて言へば景氣がいゝぢやないの。それに印刷所へ行くにしても、廣告をとるにしても、どうせこちらへ出てこなきやならないんですから。」

それが杜田の日比谷を動かさない理由でもあり、且つ誇りとしてゐるところでもあつた。その部屋へみのるは今、新しい年を迎へてから初めて這入つて行つたのであつた。

杜田はテーブルに向つて頻にペンを動かしてゐた。其前にはいろ／＼な雑誌の新年號が堆高く積まれてあつた。多くは婦人物や演藝物であるらしく、赤や黄や青の華やかな色が、古い、くすんだテーブルや文房具などに、明るい對照をなしてゐた。

「随分お忙しさうね。」

みのるは杜田のテーブルの側へ歩み寄りながら言つた。

「さあ、ま、お懸けなさいよ、そこに椅子があるから。」杜田はさう言つて立ち上がつて、幾らか改まつたやうに、「どうぞことしも相變らず。」

「私こそ、どうも申しおくれまして……」とみのるはふさけたやうに頭をさげたが、急に馴々しく、「私、もつと早くお伺ひしようと思つたんですけどね、お客様が見えたものですから出られなかつ

たのよ。」

「さう、あなたのお家へはお正月に澤山お客様があつて？」

「いゝえ、そんなに澤山も來ませんわ。今日のお客様は玉蟲さんにそれからこなひだ……もう去年ねえ、あなたにお話しした本多さん、あの方がお出でになつたのよ。」

「本多さん？」と杜田はびつくりしたやうな顔をして、「あの人はもうあなたの處へ出入りしてゐるの？」

「あなたの處へつて、私の處へぢやないわ。」

「さう、ではあなたのお宅へ？」

「いゝえ、まあぢやんの處へ來たのよ。」とみのるは幾分かをかしさうな顔をして言つた。

「あなたのお宅はそんなに自由なの？」杜田も驚いたやうな顔をして言つたが、更にまたそれに附け加へて、「前から珍らしい家庭だとは思つてゐたが、それぢやまるで放任主義ね。それで何の危険も無いでせうか。」

「あるかも知れないわ。」とみのるは笑ひながら言つた。「けれどもまあそんな事どうでもいゝわ。それよりも私今日は少しお話しがあつて來たのよ。……あなた何だかお忙しさうね。」

「忙しくない事もないわ。今月はいろんな計畫があるから、もうそろそろ二月號の原稿も締切って置かうかと思ふのよ。けれどもいゝわ、あなたの用事つてのをお話しなさいな。」

「どんな計畫があつて？ 矢張雑誌の方のこと？」

「みのは自分の用事といふのを、すぐさまそこで言ひ出さうとしなかつた。」

「いつだつたか、あなたにお話しした事があつたわね。私の方で音楽會をしたいつて事、あれをどうにかして近いうちに開きたいと思ふのよ。」

「まあさう、そりや面白い計畫ね。私も出来るだけの事はお手傳ひするわ。それで、もう大體其準備は出来て？」

「いゝえ、それがまだ出来ないのよ。何しろ暮からお正月へかけてすつかり遊んでしまつたでせう。そこへもつてつて、今頼みに行つてもなか／＼話が捗らないのよ。どこへ行つてもまだお正月気分が抜けないものですから、私にしてもいつもの調子でお話しをすんすん進めることは出来ないのよ。」

「何にしても早く開くやうにするといゝわね。大森の音楽會はそりやなか／＼面白かつたわ。」

「私ねあゝいふ風な音楽會とは少し毛色の違つたものにしようと思ふのよ。西洋樂ばかりぢや面白

くないつて人もあるから、長唄や三曲の合奏も入れようかと思つてるの。先達てA——さんに會つたところがね——あの有名なA——さんよ、あの人に會つたところが、あの方が御自分で出てもいつて仰有るのよ。あの方、あれで義太夫がお上手なんですつて。」

「何だか振つてる音楽會ね。そんなにいろんな方面の人を集めるんぢや大變でせう。」

「だから轉手古舞をしてるのよ。それに雑誌の方の廣告も取らないぢやならないでせう。まだ二月號の廣告を一つも取つてないのよ。尤も御園の方と、H——さんの方は、行きさへすれば頂ける事になつてるのですけど。」

「私も一つお手傳ひしませうか、あんまりお忙しさうだから。」

「ほんとうにお手傳ひして頂きたいわ。」と杜田は顔を擧めながら言つたが、急に思ひ出したやうに、「さう／＼、あなた先刻、玉蟲さんがお宅へ入らしたつて仰しやつたのね。その方で一つ私にお手傳ひして頂戴よ。そら去年の秋あなたと一緒にそのカフェーであの方にお目にかゝつたでせう。あの時お願ひした原稿をまだ書いて下さらないのよ。あれから幾度も手紙や葉書でお願ひしたんですけど、ですからあなたの方で一つあの方の原稿をとつて下さらない。なんならいつかあなたと御一緒に、あの方のお宅へお伺ひしてもいゝわ。」

「そんなに熱心になる程あの方の書くものはいゝのでせうか。」

みのるは疑ひを挿んだ調子で言つた。

「そりやいゝに相違ないわ。その方面の雑誌では随分評判がいゝんですもの。それにさういふ方面の講話を出すつて事は、私の雑誌としても得策よ。」

「私はあの人何だか嫌ひよ。何だかいやに落ちついてゐて、皮肉家らしいんですもの。」

「さういふ事で私のお願ひを拒けちや困るわ。今のさきお手傳ひして下さるつて仰しつやたばかりぢやないの。」

杜田はみのるが玉蟲を非難するのを、更に非難するやうな顔をして言つた。

「あなたの仰しやる事をお拒りしたわけぢやないわ。そりやあなたの意思を玉蟲さんにお傳へしてもいゝわ、けれども……」

さう言つて みのるは急に口をつぐんでしまつた。みのるが急に絶句したので、杜田はそこに何か隠れたる意味があるのでは無いかと思つた。さうしてそれに就てみのるの言ひ出す言葉を待つてゐた。併しみのるはそれぎり何も言はなかつた。

「あなたは玉蟲さんと親くしてらつしやるわけぢやないの？」とうゝ杜田はさう言ひ出した。

「えゝ私はあの人とあんまりおつきあひした事は無いわ。」

「それぢや、あの人も矢張まさ子さんと同しくしてらつしやるの？」

「さうでもないわ。あの方、もとゝゝ叔父の處へ入らしつたのよ。大學へ行つてる頃はそりやあよく入らしつたわ。何でも一週間に一度か二週間に一度はきつと入らしつたのよ。その頃から今のやうに落ちついてゐて、いやあに取りすましてゐたわ。私達に對してもまるで子供にでも對するやうな態度だつたわ。」

みのるは杜田に向つて、その頃の不平でも訴へるやうな調子で言つた。

「あゝいふ風な人はよくさういふ態度をするものよ。」

杜田は玉蟲の心をすつかり諒解してゐるやうな調子で言つた。

「そりやどうか知らないが、あの方はその頃から本當に大人ぶつてゐたわ。さうして又本當に大人のやうに見えたわ。叔父とかう對等の態度で坐り込んで、何だか變にむづかしさうな事を言ひ出すのでせう。よく希臘の哲學だとか歴史だとかいふお話しをしてゐたわ。その様子つたらまるで叔父に説法でもしてゐるやうよ。叔父がまたあの調子でふむふむ聽いてるでせう。そりやあ面白い對照だつたわ。」

「さういふ人が本當に物を書き出すと面白いんだわ。そりやあきつと深い蘊蓄をもつてるでせう。」
 「いつだつたか、叔父があの人を批評して言つたわ……あゝいふ人は結局空論の人で、實際家では無いつて、現代の日本はまだまだあゝいふ人に澤山出られちや困るつて、さう言つてたわ。」
 「あなたの叔父さんも、もう全く舊時代の人ですからねえ。」

杜田は如何にも考へ深さうな様子で言つた。それはみのるの思惑とは全く違つてゐた。みのるは自分の言葉をさういふ風にとられて、そしてさういふ風に感嘆されようとは思つてゐなかつた。そこでみのるは幾らか不平さうな顔をして又言つた。

「それから玉蟲さんは滅多に家へ來なくなつたわ。尤も其うちに大學を卒業したんですけれど……私は何よりもあの人の陰氣臭いところが嫌ひよ。若いくせにばつとしたところが無くつて、笑うにしてもいつでもやゝ笑ふばかりでせう。あゝいふ調子はどうも私の性に合はないわ。」

「あなたはなか／＼猛烈な批評家ね。併し哲學者を一概にそんな風に言ふものぢやないわ。あゝいふ地味な學問はさういふ風な人でなけりや研究して行けないでせう。美術家や音樂家をあゝいふ人と比較して見るのは間違つてゐるわ。」

「そりや私もさう思ふけれど、何しろ私の性質に合はないんだから仕方がないわ。」

「はい／＼、それではもう申上げますまい。」

と杜田はふざけたやうな顔をして言つたが、急にまた眞面目な顔をして附け加へた。

「あなたは華やかな方面の人が好きなんだから、きつと飛行將校ならお氣に入るでせう。今度B——さんが來たら一つ御紹介しませうよ。」

「飛行將校。」と言つてみのるは眼を見はつた。「あなたはさういふ人にも御存知の方があつた。」

「えゝ知つてるわ。B——さんときたらそりや大茶目よ。」と杜田は事もなげに言つてのけた。

みのるは杜田の交遊が益々ひろがつて行くのに驚いた。暫らく會はないでゐると、其間に彼女はきつと一人や二人は新しい知己をこしらへてゐた。その知己がまたいつも思ひもよらぬ方面の人であつた。さういふ事をみのるはよく知つてゐたが、それでも杜田が飛行將校まで友達にしてゐるといふに至つては、驚かざるを得なかつた。

みのるの知つてゐるばかりでも、杜田はいろ／＼な方面の人を知りあひに持つてゐた。文學者といふ文學者は——さうみのるの眼には映つた——大抵杜田の友達であつた。流行の新聞記者も亦大方知りあひであつた。彼女はまた世間にきこえてゐる大きな化粧品問屋の主人を澤山知つてゐた。彼女の友達は又演藝界の方面にも少くなかつた。××屋とか、何の何右衛門とか呼ばれて、世間に

きこえてゐる俳優を、杜田はみのるの聴いた事もない苗字で呼んだりした。或る時は彼女は有名な實業家から晩餐に呼ばれたなど、言つてゐた。音楽者、畫家、活動寫眞方面の關係者、或る種の料理屋の主人、貸席の女將、さういふ方面にも杜田の知己は少なくなかつた。

(この人のどこにさういふ手腕が潜んでゐるのかしら?)とみのるは驚かざるを得なかつた。言ふまでもなく彼女の驚きには、羨ましいといふ心持が伴つてゐた。

「S——さんて、近頃佛蘭西から歸つた人でせう。」

みのるは好奇心に眼を輝かしながら言つた。

「え、さうよ。あのね、そりやあをかした人なんです。顔はあんな蠻カラだけど、心持は巴里仕込だけあつてそりやハイカラなんです。それでゐて茶目で、ふさける事が好きで、騒ぎ出したらそりやまるで子供のやうよ。」さう言つては杜田は笑ひ出した。「先達て、と言つてももう去年の事ですけど、」と杜田はまた話し出した。「私、電報を打つてS——さんを所澤から呼び出したのよ、Y——新聞のM——さんね、あの人と謀し合せて、一つS——さんを擔いでやらうつてわけよ。そこでA——さんが是非あなたに合ひたいと言つてるから——S——さんはあれでA——さんを崇拜してるのよ——今度の日曜には是非出京してくれといふ手紙を前からやつて置いて、それから當日

に電報で催促したのよ。私とM——さんと新宿のステーションへ行つてると、S——さんはきめた時間にやつて來たわ、あのきよとんとした顔を汽車の窓に見出した時はそりや本當にかしかつたわ。けれども笑ふところぢやないから、眞面目な顔をして、私はS——さんにM——さんを紹介したのよ、これはA——さんの奥様ですつて。するとS——さん大眞面目な顔をして丁寧に挨拶するでせう。それから停車場を出ても頻りにM——さんに話かけるのよ。きつと佛蘭西ふうによつたんですわね。私とう／＼吹き出しちやつたわ。それから化粧の皮があらはれて、とう／＼私達が何か御馳走しなきやならないつてわけよ。本當にあの時は面白かつたわ。あなたは陰氣な人が嫌ひだつてのだから、あゝいふ人ならきつと性質にあつてよ。今度一つ機會をつくつて是非御紹介ませう。」

「どうぞ。」
と言つて、みのるは軽く首をさげた。彼女は杜田の雄辯にまくし立てられて、その場合それ以上を言ふ事が出来なかつた。

「さう／＼、それには今度の音樂會の時がいゝわ。どうせ其時はS——さんもお呼びするつもりでゐたのだから、その時あなたを御紹介する事にしませうよ。……併しそれには早く其準備をしなきやならないわ。会場は大抵いつもの處が借りられるでせうけど、出演者の方がまだ殆どきままらない

んだから、あゝ忙しい〜。」

杜田はすべての事を一人で承知して、みのるのそれに對する答へなどには頓着せず、いつまでも勝手なことを喋つてゐた。

「私ね杜田さん、實はけふお願ひがあつて上がったのよ。」

とう／＼みのるは眞面目な顔をして言ひ出した。その眞面目な顔が杜田には一寸不思議であつた。併し彼女はそれが爲に、有頂天になつてゐる自分の心持から醒めなければならなかつた。

「さう／＼、あなたの御用事をお伺ひする筈だつたわね。」と杜田は言つた。「それで御用事つてどんなお話し？」

「先達て一寸御相談した事ね、私は愈々あれをやつて見ようと決心しましたのよ。それで是非あなたに御紹介を願ひたいと思ふのよ。」

みのるは一層眞面目になつて、いつもに似ない低い聲で言つた。

「先達て御相談した事？……あゝあの事ですか、あなた本當にさういふおつもりになつて？」

と杜田は言つた。

「私もいろ／＼考へて見たのよ。併し考へれば考へる程、自分自身で本當に生きて行かうとすれば

どうしても私としてはそこへ行くより外に道が無いと思ふのよ。それでいよ／＼さうと決心して、あなたから先達てのお話しの方へ——山田さんへ紹介して頂きたいと思つて上りましたのよ。」

「さういふ決心なら御紹介してもいいわ。併しあなたの叔父さんがそれをお許しになるでせうか。」

「そりやどうか解りませせんわ。けれども叔父はあゝいふ放任主義者ですから、私の決心さへ堅ければ、さして干渉するやうな事はないだらうと思ひますわ。それに私だつていつ迄もあの家のハウスキーパーぢや可哀相ですわ。」

「それもさうね。けれどもお婆さんの方はどう？」

「お婆さんは私次第よ。どうせ初めから賛成する筈はないけれども、どこまでも徹底的に反對するつて事は出来やしないわ。」

「そりやまあさうですわね。もう子供ぢやないんですから……。併し茲に一寸考へて置かなきゃならない事があるのよ。あの新劇會つてのは、御存知の通りまだ出来たてのほや／＼でせう。山田さんのお話しによると財政的基礎などはまだ無いんですつて。それにあなたも這入る早々から報酬を頂くつてわけにも行かないでせうから、すれば若しあなたの家族の方があなたに反對なすつて、萬一あなたをお宅に置かないとでもいふやうな事になると大變ですわ。」

「さうなれば私は喜んで家を出るわ。私一人位の口はどうにでもして過ごせるでせう。私は人の裁縫でもなんでもしますわ。その時こそあなたの方の仕事で私を援けて下さつてもいいでせう。」

みのるは一生懸命になつてかう言つたが、其眼にはいつの間にか涙が光つてゐた。

「さういふ御覺悟なら私喜んでお世話するわ。」と杜田はあわてゝ言つた。「元々このお話しは私から言ひ出したんですものね。それに私としても、あなたがさういふ方面へ進んで行かれるつて事は嬉しい事ですわ。」

「では是非お世話をお願い致しますわ。」

と言つて、みのるは丁寧に頭をさげた。

「そんなら今日これから新劇會へ行つて見る事にしませうか。其前に一寸廣告の用事で××へ寄りたいと思ひますから、あなた厭でもそこまでつきあつて頂戴な。」

「えゝゝ、お伴しますわ。」みのるは急に晴々した顔をして言つた。

「新劇會では今度××俱樂部を借りてヴェーデキントの試演をする事になつてるのよ。先達てから練習をしてるつて事だから、ことによると今夜あたり其稽古を見る事が出来るかも知れないわ。」

「さういふ都合なら尙更結構ですわ。私是非さういふ處を見て置きたいと思ひますわ。」とみのる

は熱心に言つた。

「そんなら、そろゝ出かけませうか。」

杜田はさう言つて、椅子から立上つた。そしてテーブルの上を片づけ始めた。

みのもと杜田が、牛込の××俱樂部へ辿りついた時には、もう一月の短かい日はとつぷりと暮れてゐた。

Y——町の細い通りは暗かつた。その暗い、狭い、見すばらしい通りを、豆腐屋の小僧や、人を乗せた俵や、雜貨商の荷車などが、互に人をさけながら、のろ／＼と通つてゐた。みのもと杜田はさういふ人ごみの間を縫うて、間もなく××俱樂部の暗い門前に立つた。みのもと杜田は其時何となく自分の心の上に或る重いものゝ乗りかゝつてくるのを感じた。

みのもと杜田は嘗てそこでトルストイの「闇の力」の試演を見た事があつた。それは××俱樂部の持主であるM——といふ女優を中心とした一座によつて演ぜられたのであつた。其時は××俱樂部がもつと明るく彼女の眼に映つた。その門は八文字に開かれてあつた。俱樂部の玄關には電燈が明るく輝いてゐた。そして、それよりも彼女を驚かした事は、その演技が素晴らしい出来であつた事であつた。みよりの頭脳には其の晩の光景が断片的にひら／＼と浮んで來た。——それはニキタといふ青年の贖罪的告白の芝居であつた。人間生活の本當の姿を見せた芝居であつた。そこには物質的

の慾望と、邪惡と、精神生活の覺醒とがあつた。それらのものを現はすところの俳優の技藝は、本當に息もつけないほどであつた。其時のM子の惡黨らしい、意地張りらしい顔つきが、ひし／＼とみよりの心に迫つて來た……。

突然、其時みよりの頭の中へ別の光景が映つて來た。それは矢張M子が演じたものであつた。有名な女優になつた某といふ女が、ずつと以前に無理な結婚を強ひられて逃げ出した故郷へ歸つて來たといふ芝居であつた。その女主人公の、美しい、思ひあがつたやうな、さうして限りなき悩みを胸に貯へてゐるやうな様子が、みよりの頭の中へはつきり浮んで來た。それは濃い海老色の着物の長い裳を引いた女優であつた。その着物には澤山の寶石がきら／＼光つてゐた。頭には美しい黄金の櫛をさしてゐた。手には長い絹の手袋をはめてゐた。胸には細い紐で長い柄のついた眼鏡をぶらさげてゐた。その女優は以前彼女を虐げた人々を塵埃のやうに取扱つた。彼女は、虚禮と、舊慣と、世間の思惑とに、戦々兢兢々として生きてゐる人達を嘲笑つた。さうして自分の信ずる道へずん／＼歩んで行かうとした。——その眼醒ましい態度が、みよりの心には忘れられなかつた。それよりも其華やかな様子が一層忘れられなかつた。

それらの事を頭に描き出して見ると、××俱樂部の暗い建物——暗いあたりの光景は、一層みの

るの心持を暗くした。併しその事を思ふと、彼女の心持はまた明るくなつて來た。

僅の時間にみのがこんな事を思つてゐる時、杜田は如何にも馴れきつたやうに、すん／＼其建物の玄關へ近づいて行つた。さうしてそこで案内を乞うた。

併し倶楽部のなかからは何の返辭もなかつた。玄關の入口には見すばらしい下駄が四五足脱ぎちらしてあつて、其中には黒と赤との鼻緒のすげである女下駄もまじつてゐた。其建物のどこかに人のゐる事は明かであつた。併し全體の建物はしんと静まり返つてゐて、杜田の痾高な訪なひに答へる何の聲も起らなかつた。

「構はず這入つて見ませうよ。きつと二階にゐるに相違ないわ。さつき電燈が見えたから。」

さう言ひながら、杜田は下駄を脱いで、そこにある上草履を突つかけた。そして先に立つてすんずん階段を上つて行つた。みのもさうなつてはもうどうする事も出来なかつた。そこでそこにある上草履をはいて杜田のあとに従つた。

何の興行も無い時に、さういふ劇場のやうな建物の内部へ這入つて行く事は、可なりみのもにとつては珍らしい事であつた。従つて彼女は好奇心を以て、その邊の人のゐない部屋や、シンとしてゐる廊下や、青い塗料で塗つた觀覽席への扉などを眺めやつた。殊に彼女はこれから身を托さうとする

新劇會がその建物の一部に陣取つてゐることを考へたり、その建物のどこにか有名なM子の部屋があることを考へたりすると、自分の今踏んでゐる一足にも重大な意味があるやうな氣持がした。さう思ひながら彼女は二階への階段を上つた。

其時急に上からその階段をかけおりてくる者があつた。それは髪を普通の束髪に結つた、色の白い、小柄な、眼の縁に特徴のある女であつた。

「あら、入らつしやい。」

その女は杜田を知つてゐると見えて、さう挨拶して、そのまゝ下へかけ降りて行つた。みのもは其女が夜のやうな黒い帯をしめてゐる事を見てとつた。殊に其帯の上にした帯止めが眞紅な紐であるために、それが明らかな快い對照をなしてゐる事を見てとつた。併しその女の顔を美しいと思ふ事は出来なかつた。その女の顔は、みもの眼には、若いのか年をとつてゐるのか解らなかつた。階子段を上りきつた時に、杜田はみもの耳に囁いた。

「今の人ね、三澤千鶴子つて女優よ。今度の芝居にはきつとヒロインになるんでせう。」

「三澤千鶴子？」とみのは言つた。彼女はその名をきいた事があるやうに思ふが、併しはつきりそれを思ひ出す事は出来なかつた。「矢張新劇會の人なんですか。」さうみのは附けたした。

「さあそこはどうですかねえ。今までは重にお伽芝居ばかり出てゐたんですよ。」

其時二人は二階の電燈のついてゐる部屋の入口に達した。そこからは、杜田の豫想した通りに、幾人かの若い人達の話し聲がもれて來た。

杜田はその部屋の入口へ行つて戸を叩いた。併し内部から「お這入りなさい。」と言ふ者が無かつた。そこで杜田は再びその戸をコツコツと叩いた。それでも誰も何とも應ずる者が無かつた。杜田は思ひきつて其部屋の扉をあけた。

そこには五六人の人が一團になつてゐた。そのうちの一人か二人が杜田とみのろの方へふり向いたが、併し二人に何等の言葉をかけやうともしなかつた。其かはりにこの無作法な闖入者を咎め立ててもせず、其まゝ再び一團の方へ向いてしまつた。

其一團の中央には、汚れたテーブルを前にして、一人の小がらな外國人が坐つてゐた。その外國人の前には、新劇會の主事なる山田章一が坐つてゐた。章一の左右には、或は立つて、或は椅子に腰をかけて、或は他の人の肩越しにのぞき込んで、四五人の若い男が集まつてゐた。顔の恐ろしく長い、眼に不思議な光のある、外國語學校の制服をつけた男が、その外國人の横に坐つてゐた。その男は流暢な獨逸語を操つてゐた。さうして外國人と章一等の間の通譯を勤めてゐた。杜田もみのろも其

場の光景を一目見て、そこにゐる人達が、今度上演する脚本の研究をしてゐる事を知つた。併し二人は黙つてそこに立つてゐるわけには行かなかつた。そこで杜田はその一團の人達の方へ進んで行つた。

「山田さんどうも暫らく。私、一寸あなたにお目にかゝりたい事があつてお伺ひしたのですが……。」

さう杜田は言つた。山田はびつくりしたやうに大きな眼をあげたが、

「やあ、よく入らつしやいました。今一寸こゝんところを調べてみますから、どうか暫らくそこでお待ち下さい。」

さう山田は快活に言つた。それと同時に一同の頭は又そのテーブルの方へ向いた。そして一同の眼は再び其上に置かれた一冊の獨逸書の上に注がれた。

みのろはひどく閑却されたやうな氣持を覺えた。「どうか暫らくここでお待ち下さい。」と章一は言つたが、そこには腰をかけて待つに足るやうなベンチさへなかつた。それに、暗い、錆い電燈の光で見てさへ分るほど、その部屋は取り散らしてあつた。床の上には煙草の吸殻や紙屑などが落ちてゐた。隅の方には白くなつた塵がつもつてゐた。壁にはインキをふりかけたやうな痕がついてゐ

た。どこにも二人を歓迎するやうな色彩は整へられてゐなかつた。(新劇壇の事務所といふものはかういふものか知ら。)とみのるは思つた。尤もみのるはそれより前に杜田から、新劇會にはまだきまつた事務所の無いといふ事をきいてゐた。或る時は其事務所は萬世橋に近い或る西洋料理屋の二階にあつた。或る時は又其仕事に同情のある或る官吏の家にあつた。××俱樂部は新劇會が一時稽古所兼臨時事務所に借りたのであつて、そこに設備の整つた新劇會の事務所を求めるのは無理であつた。さういふ事は承知してゐるが、併しそれでもみのるは其場の荒れ果てたやうな、物寂しい光景を情けない事に思つた。殊に彼女の心の中に、其の一座に加はらうといふ考へがあるだけに、一層その光景を見て心細く思つた。

その上に今一つみのるの心を情けなく感じさせたものがあつた。それはそこに集まつてゐる俳優の見すばらしい服装であつた。

みのるはさういふ新しい劇團の人達に、華やかな、立派な、最新流行の服装を期待してはゐなかつた。併し何と言つても俳優であるから、少くとも普通の服装はしてゐる事と思つてゐた。ところがそこに集まつてゐる人達を見ると、それはまるで貧乏な書生の服装であつた。或る者は襟垢の光る、黒い釦のついてゐる、立襟の洋服を着てゐた。或る者は背廣の上着の胸をはだけて、其下から

汚れて黒くなつたシャツのやうなものを——みのるはそれがルパンユカといふ物であるといふ事を後になつてから知つた——見せてゐた。或る者は長い縞の着物を着流しにして、其の上に古びた日本の外套を羽織つてゐた。顔色の青い者、無精髯の生えた者、頬骨の出ばつてゐる者……一寸見たところでは、かういふ人達が本當に新しい劇の爲に盡さうとしてゐるのだらうか、と疑はれるやうな人ばかりであつた。さう思つてみのるの心は暗くなつた。

併しみのるはその人達の研究してゐる事は一寸面白いと思つた。それは研究といふ程の事ではないが、その人達のいろ／＼な質問に對して、そこにゐる西洋人がいろ／＼な形をして返辭をする……其くり／＼してゐる瞳の廻轉、その自由な手や足の動作、それらのものを見てゐるだけでも、何ともいふ事の出来ない興味があつた。章一等の質問は主として獨逸の習慣に關するものであつた。向ふのギムナジウムの學生の服装、其制帽(といふやうな物があるとすれば)普通服と日曜服との區別、懺悔服なるものゝ意義、それから其上演に際して、向ふでは舞臺装置をどういふ風に取扱つたかといふ事、それ等の事を、こちらが翻譯書によつて訊ねると、外國語學校の學生がそれを通譯して、それから今度はその西洋人が原書を繰りひろげて、そして一々説明を與へた。その説明をまた外國語學校の學生が一々通譯した。

「そりや何ですよ、向ふには、あちらには、獨逸には、ギムナジウムの學生などには、制帽だの制服だのいふものはありませんよ。學校へ行くには、みんなふだんのまゝの服装ですよ。」

こんなふうには、外國語學校の學生は、早口に、それでゐてつかへく通譯した。

其學生の言葉使ひと、それからその日本語に較べて遙かに流暢な獨逸語と、それに一々返辭を與へる若い西洋人の態度と、それらのものをみるのは興味ある眼にて眺めてゐた。そのうちに大體の質問は終つた様子であつた。

「やあどうもお待ちせしました。」山田はやがて其大きなからだを、みのもと杜田の方へ運んで來た。「何しろ借家住居なもんですからね、お茶を一つ出す仕度が出来ない始末です。どうぞこちらへ來ておかけ下さい。」

山田はさう言つて、杜田とみのるを、今まで西洋人や俳優などの懸けてゐた椅子の方へ導いた。そして自分から先にその椅子の一つに腰をおろした。

「おい青野君」その時、山田はまた不意に大きな聲で呶鳴つた。「それぢやあ、これからすぐ一の三と二の七をする仕度をしてくれ玉へ。」

それから山田は再び靜かに杜田の方へ向きなほつた。

「どうもごたく／＼してゐて失禮しました。」

「いゝえ、私どもこそ、お忙しいところをお邪魔ぢやございませんかしら。」

「いや、いつもこの通りですから何でもありません。おいやでなかつたらいつでもお遊びに入らつしやう。」

「有難うございます。それで今度の芝居はもう大方稽古が済みまして？」

「えゝもう大體済みしました。何しろ今度は皆が非常な勉強でしたよ。正月も殆ど休まずに稽古をつづけました。」

「まあ大變に御熱心なんですね。それで上演はいつからでしたかしら。」

「あさつて、いや、やのあさつてからです。」

と山田は言つた。さう言ひながら、彼は話の間にもみのるに注意する事を怠らなかつた。

「突然のお話しなんですが。」と其時杜田は幾分か改まつて言ひ出した。「この方は村岡さんて仰有つて、私の親友なんですよ。前から女優になる事を希望してゐらして——尤もこれまでは重に文學の方を研究しておいでになつたのですが、今度愈々決心して、どうしても劇によつて身を立たいといふ事になりましたの。それに就ては是非新劇會へ加へて戴きたいといふのでござい

ますが、どうでせう。あなたの方でお引受け下さるわけには参りますまいか。」

「はあ、はあ、」と言つて聽いてゐた山田は、其時改めてみのろの方へ眼をやつた。みのろは其大きな眼に射すくめられるやうな氣持がした。併し彼女はそれではならぬと思つたので、勇氣を出してじつと山田の顔を見迎へた。

「さうですねえ。」と山田は言つた。「今私の方では秩序的に俳優の養成をやつては居ないが、何しろ適當な女優が無いには困つてゐるのです。今度の芝居でも、實はわきから三澤や青柳を借りて來た始末なんですから、私の方の専屬になつてくれる女優の志望者があるのは甚だ心強いわけです。併しさういふわけで、養成機關が缺けてゐるから、一緒になつて仕事をしてゐるうちに、追々一人前になつて頂くといいやうな條件でよければ、私の方では大いに歓迎する次第です。」

「村岡さんどう？ それでよかなくて？」と杜田はみのろの方へ向いて言つた。

「えゝ結構ですわ。それではさういふ事にして頂いて、どうぞよろしく願ひ致します。」

みのろは椅子から立ち上つて、半分は杜田に、あとの半分は山田に言つて、丁寧に辭儀をした。

「それぢや精しい打合せは明日こゝでする事にしませう。今夜これから一寸舞臺稽古の眞似をする

事になつてますから……、何なら少し見ていらつしやい。」

山田はさう言つて椅子から立ち上つた。

「えゝ是非拜見させて頂きますわ。」

杜田とみのろは、嬉しさうに、そはくしながら、山田の後に従つて其部屋を出た。

みのもと杜田は、山田章一と會見した部屋から廊下一つを隔てた二階の薄暗い觀覽席へ這入つた。それはみのが嘗て「闇の力」を見物した席であつた。そしてそこにはもう一人二人の人影が動いてゐた。

二階から見おろすと、がらんとした××倶樂部の舞臺と、ベンチを片づけてしまつた階下の見物席とが、如何にも汚ならしく、佗しさうに荒れ果てゝ見えた。塵埃だらけの舞臺には、今度の上演に使ふらしい背景のカンヴァスが横たはつてゐて、それには五六月頃の林らしい木立が描いてあつた。その背景を今しも二三人の青年が、かけ聲をしながら、わきの方へ持ち運ぶところであつた。背景が持ち去られると、そこに稍々廣い餘地が出来たが、その後には、新劇會のものではなくて、××倶樂部そのものゝ所有品らしい背景幕がぶらさがつてゐた。その幕には丸太で組んだ家と、眞白な雪の野と、素裸かになつた四五本の枯木とが書いてあつた。それはシベリヤの冬景色であるらしかつた。杜田もみのも其幕を見た時に、期せずしてトルストイの「復活」を思ひ出した。それと同時に女優のM子によつて、日本の津々浦々にまで行き渡つた、平俗な、そしてセンケンタルな調子

の歌をも。併しみのも杜田もその事は口に出さなかつた。そして一心に舞臺と見物席とに動いてゐる人の動作を眺めてゐた。

「おい／＼、もう其の位でいゝぢやないか。早く始めないとまた遅くなつてしまふぞ。」

山田の太い聲が階下の見物席から聴こえた。

「あすこにゐるでせう。あれが新劇會のマネージャの青野さんていふ人よ。」

杜田は舞臺に立つてゐる、髪をかけた、背の高い、事務服のやうな物を纏うてゐる青年を指さして、みもの耳にさゝやいた。その青年は木立の背景を運んで行つた一人であつた。そして其の手は繪かきのやうに塗料でよごれてゐた。

「それぢや一つやつて見るかね。」

青野はさう言ひながら、舞臺から見物席へおりて來た。

「おい、みんな仕度は出來てるのか。」

「え。」

と二三人の若い女の聲が、舞臺の左手の見えない處から答へた。みのは興味のある事に思つて一心にそちらの方へ眼をやつた。

マネー ज्याの青野は、左の手に時計を持つて、やがて高く呼子の笛を吹いた。

「ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、」

急に快活な歌聲が舞臺の左手から起つた。それと同時に三人の少女がそこから舞臺にあらはれて來た。いづれも十四五の少女の扮装であつた。一人は白い着物をきて、一人は赤い格子縞の着物をきて、他の一人は水色の白いレースの縁をとつた着物を着てゐた。それらの着物はいづれも膝頭までしかなくて、その下からは長い靴下の足があらはれてゐた。赤い靴や、白い靴や、黒い靴が、小さな鹿の子のやうに軽く動いた。

「駄目々々！ いま一度出なほして！」

不意に青野が嗚つた。三人の少女は——女優達はびつくりしたやうな顔を見合せたが、やがてすごとく以前のところへ引つ込んで行つた。

再びマネー ज्याの口から呼子の笛が鳴つた。

「ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、」

さう歌ひながら三人の少女はまた舞臺へあらはれて來た。

「まあ靴の中へ水が浸み込んでくるわねえ！」と一人の少女が言つた。

「まあ頬へ風がぶつ突かつてくるわねえ？」と白い着物を着た少女が言つた。

「まあ胸がどき／＼してくるわねえ！」と第三の少女が言つた。

白い着物をきてゐる少女は、みのが杜田と二人で二階へ上らうとした時、その階段で行きあつた女——三澤千鶴子であつた。そしてそれが劇のヒロインたるヴェンドラであつた。

ヴェントラと、マルタと、テヤの三人の少女は、マネー ज्याの青野から幾度も幾度も「駄目、駄目！」を浴せかけられた。そしてその度に従順に、始めから根氣よくやりなほした。

みのは同じ科と白の繰返しをみて怠屈を覺えるといふよりも、それを幾度でも繰返してする女優達の忍耐強いのに驚いた。そして自分もそれをいつか繰返してしなければならぬと思つた時に、何ともいふ事の出來ない重苦しい心持を覺えた。それと同時に彼女の心の中に、青野に對する強い反感が湧き起つた。

(何といふ冷酷な男だらう?) さうみのは思つた。(あれで澤山ぢやないか。立派な出來ぢやないか。)

併し青野は平氣で、自分の思ふやうに出來るまで、幾度でも女優たちに始めから同じ事を繰返させた。それがために、その短かい一場の稽古さへ容易に進まなかつた。

「私いつもさう思つてよ。上べはさうでもないけれど、心の中ちやお父さんや母さんだつて私たちと同じなんだものね。」

マルタがさう言つた時には、それでも舞臺の調子が幾分か整つて來た。そして三人の少女の會話がそれからそれへと進んで行つた。

「——私に子供が出來たらうちのお庭の雜草みたいに育て、やらうと思ふわ。だあれも構つてやる者はなくて、ひとりでに伸びてすん／＼肥つて行くわ。——それにまあ寢室の薔薇をどらんない。一と夏／＼いぢけた花になつちまふぢやありませんか。」

「私に子供が出來たら、私はすつかり薔薇色の眞紅な着物をきせてやるわ。眞紅な帽子、眞紅なきもの、眞紅な靴。靴下だけは——靴下だけは夜のやうな黒い色にするの！ それから散歩に出る時は私の前を歩かせるわ。——今度はヴェンドラよ。」

「だつて、どつちが出來るつて事が分つて？」と言つたのはヴェンドラであつた。

「でもどつちか出來ない筈はないでせう？」

「叔母さんのオイフェミヤにはそれでも一人もなくつてよ。」

「馬鹿ねえ！——オイフェミヤはまだ結婚しないんだもの。」

「私もよ、女の子が出來るなら、男の子が二十人出來たつて平氣だわ。」

と言つたのはマルタであつた。みのはそれをきいて——其大膽な言ひ草と、それを言ふ女優の香氣さうな言葉使ひとに、笑はずにはゐられなかつた。

「女の子はいやになつちまふのね！」とテヤは言つた。

「生れ變つたら、この次は私女にはならないわ。」

「だつてマルタ、それは好き／＼の問題よ！ 私なんぞ女に生れたのを毎日喜んでるわ。ほんとうに私王様の息子とだつて取り替へつこしないことよ。——私が男の子がいと／＼と言つたのもそんなわけだからよ！」

少女達の會話が次第に進んで行つた時に、そこへ一人のギムナジウムの生徒があらはれた。そして三人の少女等に會釋して其前を通つて行つた。少女達の會話は一しきりその青年の噂で賑つた。そしてやがて幕になつた。

「どうもまだいかんね。ヴェンドラは歩き廻る時に、もう少し快活な足つきをしなさいかんね。」さう言つて、青野は舞臺の上にかたまつてゐる三人の女優の方へ眼をやつた。

みのはその三人が、情ないやうな顔をして、せい／＼息をきつてゐるのを見た。三人とも胸を

はだけで、ハンケチでそこを煽いでゐた。殊にヴェンドラの額からは汗が流れ出して、それが赤ちやけた電燈に光つてゐた。

(女優になるのも大へんだ!) みるは心のうちでさう思つた。

「今の處一寸面白い場面ね。けれどもあの三澤つて人、どうしてあんなに白を覺えないんでせう。」
杜田はそつとみるの耳にさゝやいた。

「さうねえ、あんなに聞へるのをきいてるのは何だか苦しいものね。でもテキストをみんな語記するのは随分むづかしい仕事でせう。私、よくそれでもみんなあれまで覺えたもんだと思つて感心したわ。」とみるは小聲で言つた。

「そりや當り前ぢやありませんか。役者が白を覺えなかつた日にや芝居が出来やしませんわ。」

「私女學校にゐる頃、學藝會で對話をした事があるのよ。その時容易にテキストを覺えられないで困つた事があるわ。私さつきからその時の事を思ひ出してゐますの。」

「女學校の對話は遊戲ですけど、こちらは本職ですもの。本氣になれば白を覺えるなんか容易の事だと思ふわ……職業にもいろ／＼あるけど、役者は記憶が悪くちや全く駄目ねえ。記憶がわるければ科だつて自然鈍くなるだらうと思ふわ。」

杜田の言葉は烈しくみるの胸に衝き當つた。何となれば、みるも丁度その事を考へてゐたからであつた。而もみるはそれを第三者の場合に於けるものとしてではなく、自分自身がこれから其道へ這入らうとしてゐるだけに、いつかはそれが自分自身の上になる問題として考へてゐるのであつた。従つて杜田の言葉は彼女の胸に、一つの強い壓迫となつて被ひかゝつて來た。みるは黙つて舞臺の方を眺めてゐた。

「あのヴェンドラね。」と杜田はまた言ひ出した。「あれだけの會話でも、この芝居の中で重要な役目を持つてゐるつて事が分るわね。」

「私、まだあの脚本を讀んだ事が無いのよ。」

「さう、そんならいつでも私の處から持つてくといゝわ。そりや随分思ひきつたところがあるのよ。けれども自分達の昔の事を考へて見ると、全く眞理だと思ふ點が少くないわ。」

「では二三日のうちに拜借にあがるわ。」

みるはさう言つて、再び舞臺面から下の見物席の方へ眼をやつた。そこには山田や、青野や、今の先、三人の少女の前を通つて行つたギムナジウムの學生や、その外二三の青年などが集つて、何事か相談でもするやうに話しあつてゐた。其中には先刻の若い西洋人も混つてゐた。

「大丈夫、大丈夫、あさつてまでにはきつと物になる。」と山田は不意に高い聲で言つた。そしてあたりをきよろ／＼見廻してゐたが、「青柳さんはどうした？ 兎に角第二幕の方をやつて見ると爲ようぢやないか。」

青柳春子といふ女優はやがて舞臺の上へ現はれて來た。彼女は背の低い、圓顔の、色の白い女であつた。髪を引つための束髪に結んで、黒つぼい帯をしめて、粗末な上草履をはいてゐた。

「私コスチウムを脱いぢやつたのよ、寒いんですもの。このなりでいゝでせう。」

青柳はさう言つてにこ／＼笑つた。その時みのは青柳の金齒が電燈の光にちら／＼光るのを認めた。

「どうも困るな。」とマネー ज्याの青野はぶす／＼言つたが、「まあ今夜は仕方が無いさ。」

そこで第二幕第七場の稽古が始まる事になつた。それはモーリッツといふ絶望して自殺しようとする少年と、イルゼといふ不良性を帯びた少女との會合する場合であつた。青柳春子はそのイルゼに扮したつもりで舞臺に立つたのであつた。

自殺しようとする少年モーリッツに扮装した俳優が、舞臺の上を俯むきながらあちらこちらと歩いてゐた。重くるしい白がその口からとぎれ／＼にもれて出た。人間の生れ出る事に就ての疑ひ、

子供の時に聞いた首の無い女王へのあこがれ……。そのこと／＼と舞臺を踏む靴の音が、如何にも陰氣に、如何にも鈍く、静かな俱樂部の建物のうちに響き渡つた。

其時イルゼの春子は不意に舞臺の右手から現はれて來て、俯いてゐるモーリッツの肩をうしろからぎゆつと掴んだ。

「何を失くしたの？」

本式に扮装してゐるモーリッツに對して、日本服のイルゼは如何にも不調和な對照であつた。併しみのるはイルゼの聲をきいた時にびつくりした。それは濡ひのある、華やかな、幾分かお轉婆らしい、さうして流れるやうな快い聲であつた。

「イルゼ？」とモーリッツはびつくりして、併し少しも反射的活力の無い聲で言つた。

「こんな處で何を探してるの？」

「なんだつてそんなに人をおどかさなんだい？」

イルゼの春子はぐる／＼と其邊を歩きまはつた。その裾の長い着物は足にからまつて、とても彼女の白にいふところの舞踏靴をはいてるやうには思はれぬが、併し彼女の流暢な、そして爽やかな言葉は、何となく彼女の足が輕快に動いてゐるやうに感ぜしめた。

「——私なんざ二日酔の味つてものを知らないね。此前の謝肉祭の時なんざ、二日三晩も打ち通しに寢床へも這入らねば、帯も解かなかつたわ。それ舞踏會だ、それカフェーだ、お晝はベラバイスタ、宵の口はテイングル・タングル、夜中になると舞踏會。レナもゐれば、肥つちよのヴァイオラも居たつけ、……三日目の晩にとう／＼ハインリツヒに目つかちやつた。」

イルゼのかういふ亂暴な言葉に驚くよりも、みのるはそれを湧き出す泉のやうにすら／＼と述べ立てる春子の技倆に驚いてしまった。併しイルゼのお喋りは尙ほそれでは終らなかつた。

「ハインリツヒが私の腕に躓いたのよ。私は生氣もなく往來の雪の上に寢倒れてゐたんだもの。——それからハインリツヒの所へ引張られて行つて、十四日も私あの人の下宿にゐたわ。——いやな事つてありやしなかつた！——朝になると、毎日ハインリツヒのベルシャ寢巻を引つけてさ、夜はお稚兒さん見たいな黒い着物で部屋の中を歩き廻らされるし、頸にも膝にも袖口にも白い飾をめちや／＼に附けられた。ハインリツヒは毎日／＼手を替へ品をかへて私の寫眞を取つた。——私をゾーフアに寄つか／＼らして、アリアードネに見たり、レダに見たり、ガニメツドに見たり、今度はまた女のネブカドネザールだと言つて、人を四つん這にさせて見せたり、さうかと思ふと、それ人殺した、銃殺だ、自殺だ、石炭瓦斯だと騒ぎ廻つて、朝つばらから寢床の中へピスト

ルを持ち込んで、彈丸を一ぱい詰めて、私の胸へ差しつけて、さ、動いて見ろ、一と打ちだぞ！——冗談ぢやない、どうかしたら私打たれたかも知れないんだわ！……」

長い／＼白を、春子は一息に、そして如何にも自由に、易々とこなして行つた。みのるはほつと溜息をついた。その溜息は彼女の腹の底から湧いて出たものであつた。彼女は自分の及びもつかぬものから壓迫されたやうな重苦しさを覺えた。その重苦しさは彼女がまさ子の音楽を聞いた時と同じやうな感じであつた。

(どうしようか知ら……)みのるはいつの間にかこんな事を思つてゐた。而も彼女は自分の心の中にそんな考へが浮んだとは意識しなかつたが。

一年中の最も寒い季節に這入つてから、毎日よく晴れた日がつゞいた。朝夕の寒さは近年に珍しい程で、新聞には毎日のやうにそれに關する記事が掲げられたが、晝間の暖かさも亦近年に珍しい程であつた。

空は毎日かつきり晴れてゐた。その青い澄みきつた圓天井を、地球から最も遠く離れきつた太陽が、毎日、靜かに、弛やかに廻つてゐた。風も亦餘り吹かなかつた。すべての家、すべての藁、すべての道、すべての大地、あらゆる生ける物が、靜かな透明な空氣に包まれて、一しきり平和な呼吸をついてゐるかのやうであつた。郊外は霜どけがひどかつた。それが晝間の暖かい太陽に照らされて蒸發すると見えて、到る處の大氣が幾らか烟つてゐるやうに見えた。裸かの樹や、青い麥や、日當りのよい土手の凹みなどに枯れ残つた草などは、その光に包まれて、これから來る春の生長を夢みつゝ、靜かに、暖かに、眠つてゐるかのやうであつた。

まさ子はさういふ郊外の景色を窓の外に見ながら、或る日上野から山の手線の電車に乗つてゐた。彼女の電車は田端の斷崖をめぐつてから、武藏野の丘を切り割つた土手の間を駛つてゐた。そ

れらの土手が次第に少くなると、そこに緩い傾斜面をもつた麥畑や、背の低い雜木林や、小さな箱を置き並べたやうな家などが現はれて來た。それらのものゝ上には一樣に明るい日光が降り注いでゐた。併しまさ子はさういふ景色にあまり氣を留めてゐなかつた。彼女は足を揃へて眞直にキュシヨンに腰をかけたまゝ、その眼はじつと正面を見つめてゐた。

速力の早い電車は、やがて駒込や大塚の停車場を越えて、急に平原らしくあたりの打ち開けた池袋についた。まさ子はそこで電車を降りた。それから彼女は澤山の降車客のあとについて、間もなくその出口から停車場の構外へ出た。

まさ子はそこで人でも探すやうに暫らくあたりを見廻してゐた。それから靜かにその道を右の方へ歩き出した。やがてまさ子が停車場の入口の前へさしかゝると、急に一人の男がその待合室から彼女の方へ近寄つて來た。まさ子は豫期してゐた事であるが、思はず顔を赧くした。それは本多享造であつた。

「餘程お待ちになりました？」

享造は赧い顔に興奮の色を漲らしながら言つた。

「えゝ随分待ちました。あなたはどつちからおいでになつたんです。」

「私は上野から電車で来ましたわ。田端の方をまはつて。」

「矢張さう来たんですか。僕はまた市内電車で大塚の方からでも来るのかと思つた。それで幾度もそちらの方へ行つて見ようかと思ひました。」

「私この邊は本當に久しぶりですわ。まあいつのまにこんなに開けたんでせう？」まさ子はさう言ひながら、珍らしさうにあたりの家並を眺めやつた。

その邊の家造りは、まさ子のいふやうに、如何にも新開地らしい様子を示してゐた。狭い田舎めいた、うね／＼した道の兩側には、新らしく土手を築いたり、植ゑ付けたばかりのやうな生籐をめぐらしたりした家が立ち並んでゐた。そしてさういふ家の間に挟まつて、さゝやかな荒物を並べたり、少しばかりの蜜柑や青物を並べたりしたやうな家などがあつた。内科、外科、小兒科一般などと記した醫者の看板なども、如何にも郊外らしく、まさ子の眼に映つた。

まさ子は子供の頃その邊へ摘草に來た事を覚えてゐた。その頃はその邊一帶は麥畑に過ぎなかつた。一方には——その麥畑の向ふには、巢鴨監獄の赤い煉瓦塀が連つてゐた。また他の一方には學習院の森がこんもり繁つてゐた。池袋の停車場は、それらの間の麥畑の中に、小さく、さゝやかに置かれてあつた。停車場の彼方には、東京府の師範學校が、野の中に寂しく突つ立つてゐた。その邊

は殊に空が圓く野の端から端に被ひかゝつてゐるやうであつた。停車場の前には小さな茶店のやうな物が一軒か二軒あつたに過ぎなかつた。まさ子が今通つてゐる細い道は、青麥畑の間をうね／＼と走つてゐたのであつた。

まさ子はその後そこが小さな二つの鐵道の起點になつた事を知つてゐる。その頃から野の中の小さな停車場は次第に發達の機運に向つた。まさ子は女學校へ行つてゐる頃、その停車場から武藏野の奥のH——といふ小さな町へ遠足に行つた事があつた。その頃はもう池袋はまさ子が摘草に來た頃よりも遙かに成長してゐた。併しまさ子はその遠足の頃に較べて、池袋附近が一層急に發達し、變化してゐるのに驚いた。その細道からは、もう巢鴨監獄の赤煉瓦を望む事は出来なかつた。學習院の森も、もう小さな家の蔭に隠れてゐた。まさ子が土筆や嫁菜を摘んだ畑の畔——そこにはどこに源を發したのか、さゝやかな美しい流れが流れてゐた。その流れもどこへ行つたものかも、もう見えなかつた。(あの流れはどの邊だつかしら)さう思ひながら、まさ子はあたりを見廻した。すると思ひがけない方向に、杉の林の高い梢の一群が見えた。それは眼の前の新しい家並の屋根の上に抜け出して、青い空にはつきりと黒い輪廓を描いてゐた。その上に明るい日光が白い玉をなして降り注いでゐた。

「あすこは雑司ヶ谷の奥ですわね。」まさ子はさう言つて享造に話しかけた。
「え？」

と享造はきゝ耳をたてゝまさ子の方を顧みた。それまで彼はひどく興奮したものゝやうに、先に立つて急ぎ足に歩いてゐた。そして折々足をとめてはまさ子を待つてゐた。まさ子が近づくとき彼はまた忙しさをせか／＼と歩き出した。

「ね。あれは鬼子母神の森でせう。」とまさ子は再び言つた。

「あゝさうです。あれは鬼子母神の奥の森です。」さう言つて享造は立ち留まつた。そして再びまさ子と肩を並べて歩き出した。

雑司ヶ谷の森はだん／＼二人の前に近づいた。細い道は緩いだら／＼坂になつて、それから又幾らか上りになつてゐた。そのだら／＼坂をおりきつたところに小さな石橋がかゝつてゐて、其下を濁つた汚ない水が流れてゐた。(まあ、これがきつとあの時の綺麗な流れだわ)とまさ子は思つた。併しその邊にはまさ子が摘草をした頃の面影は少しも残つてゐなかつた。土筆の生えてゐたらしい畑の畔は、もう一面に地ならしが施されて、多くは平家の小さな家が建て連ねられ、まだ家の建たない處も、いづれは家の敷地になるべく、背の低い生牆などで取り圍んであつた。

「福井さん。」とその時享造は不意にまさ子を呼びかけた。「あなたはこの邊の地理をよく御存知な
んですか。」

「いゝえ、私よく知りませんわ。子供の頃一遍か二度摘草に來た事はありますけど。」

「摘草に……。それは矢張りあのみるさんと云ふ人と一緒にですか。」

「いゝえ、みるさんはまだその頃は家へ來ませんでしたわ。」

「ぢやあの人はあなたの御姉妹ぢやないんですね。」

「えゝ／＼、あれは私のいとこですわ。」さう答へながら、まさ子は享造がなぜそんな事をきくのかと不思議に思つた。

「みるるさんていふ人はなか／＼面白い人ですね。」享造は努めて靜かに歩きながら言つた。

「えゝそりや面白い人ですわ。」

とまさ子は答へたが、相手がどういふつもりでそんな事を言ひ出したのかと思つて、そつと享造の顔に眼をやつた。享造は微かな笑ひを其顔に浮べてゐたが、

「あゝいふ人は、新らしい事と言へば大抵な事に興味を持つものですね。」

「本當にさうですわ。あの人、ひところは家庭のエフィエンシーで大騒ぎをしましたが、その次

には女流文學者が希望で、それから今度は女優志願よ。」

「そりやいゝ。そりやどうもあの人らしくつて面白い。」享造はさう言つて、大きな聲を出して笑つた。

「あなたはみのるさんが女優になれると思つて？」

「さあ、どうですかね。見たところ、體格や其他の様子には其素質が無いとは言へませんね。併し女優だつて本物になるにはいろんな条件が必要だらうから、いゝ加減な考へでかゝつたんぢや怪しいもんですね。」

その「本物」といふ言葉が何となく耳だつてまさ子にはをかしく聴こえた。併し享造のみのるに對する批評には間違ひは無かつた。そしてまさ子自身それまでみのるの態度を餘り重く見てゐなかつた。併しまさはその時ふと自分がこれまで何もしてゐなかつた事を思ひ出した。否、殆ど何も考へてさへゐなかつた事を思ひ出した。(かうして生きてゐれば、私だつて世間の普通の人と同じく、たゞ時の過ぎるのを待つてゐるだけの事ぢやないかしら。)さう思ふと同時に、まさ子は急に自分の今まで何もしてゐないのが腑甲斐なく思はれて來た。そしていろ／＼に思ひ惑うてゐるとは言へ、みのるが絶えず自分自身の主になつて行かうとするのが——其努力が尊く思はれて來た。

「でも、みのるさんは偉いわ。」とまさ子は言つた。「私のやうにかう何もしないぢやせうが無いけど、あの人はいつても何かしよう、しようと思へてるわ。あゝいふ心持をもつてなきや人間は矢張り駄目ですわね。」

「併しあなたは音楽をやつてゐぢやありませんか。」と享造は言つた。

「私の音楽なんか何にもなりませんわ。琴でも習つて置いたら、今頃はもう立派なお師匠さんになれたでせうに。」

「琴の先生ですか。琴の先生はどうも餘り感心しませんね。」

「私の言つたのは、まあ例へて見ればといふ意味なんですわ。けれど琴のお師匠さんだつていゝぢやありませんか。さういふ技術を自分の手に持つてゐれば、女でも生きて行く上にどんなに自信がつくか知れませんか。」さう言つてまさ子は靜かに享造の顔を見た。

「さう、その點には僕も反對しませんね。」と享造は言つた。

其時二人の足はいつか鬼子母神の横手の岐れ道まで行つてゐた。そこから右の方へ斜めに登ると鬼子母神の境内であつた。それから左の方へ折れると、稍々遠く某といふ稻荷神社の赤い門を望む事が出來た。その邊には軒の低い一二軒の掛茶屋などがあつた。その店先には雜司ヶ谷名物の芒の

穂で造つた木兎や、紙で張つた蝶々などが、麥藁製の大きな苞に刺して並べてあつた。紺の暖簾の低くかゝつてゐる下には、幾つかの縁臺などが並べてあつて、其横の料理臺には鶏卵の茹でたのや、粗末な握り鮓などが飾つてあつた。

「入らつしやい、入らつしやい。」店の奥からは、女が氣の無さうな聲で呼んでゐた。

享造はまさ子と二人でそこから左へ折れて、平な石を敷きつめた長い道を進んで行つた。その道の兩側には櫻や梅の若い木などが植ゑてあつた。右手には水の少ない池があつて、其向ふには眞黒に濕つてゐる黒土の空地があつた。その空地にも何本かの梅の木が立つてゐた。それ等の梅の蕾はいつの間にか眼に立つほどにふくらんでゐた。さう言へば池の水や、池の向ふの空地に生えてゐる枯草なども、何となく青めいて、どことなしに其邊一帶に早春の色が漂うてゐた。

「もう春ですわね。」さうまさ子は言はうと思つた。若しも彼女と一緒に歩いてゐるのが彼女と同じ位の友達であるなら、彼女はきつとさう言つたに違ひなかつた。併し彼女はとう／＼それを口に出しては言はなかつた。

明るい日光はすべての物の上に鮮やかに降り注いでゐた。その日光は秋の日光のやうに明るく鮮やかであつた。併し秋のそののやうに冷たく澄んではゐなかつた。その日光は何となく烟つたやう

な色を帯びてゐた。それは冷たい風から木の芽をほぐれさせ、まだ氷つてゐる土の中へ軟らかい草の根を伸びさせる日光であつた。黒い濕つた土も、底の見える池の水も、若い櫻や梅の枝も、その邊の小さな家の瓦も、すべてその日光にふうわりと包まれてゐた。

長い石疊の盡きるところに小さな石橋があつた。その石橋の下を細い流れが通つてゐるが、その薄濁つた水がそこで微かな音をたてゝゐた。それはまさしく春の音であつた。

「まあ、あの音！」さう言つて、まさ子はそこで一寸立留つた。

「何の音ですつて？」

「あの水の音よ。」さうまさ子は言つて、じつとその濁つた水の行くへを見つめてゐた。

「はゝあ……。」

と享造は言つた。併しそれぎりでは彼は又歩き出した。そしてその赤い門をくゞつた。その赤い門を越えると、そこは某といふ稻荷の境内であつた。その境内には杉の落葉などが散らばつてゐて庭一面に霜どけの泥濘になつてゐた。併し享造はすん／＼其中を歩いて行つた。そしてそこから左の方へ折れて、その境内まで被ひ迫つてゐる杉林の方へ進んで言つた。それは背の高い杉林であつた。さういふ杉林が東京の近郊にあるのは珍らしい事であつた。併しその杉林の中には人の通る道

がついてゐた。その上その少し先きへ行くと、その杉林の中に幾つかの墓地などがあつた。(まあをかきな處。)とまさ子は思った。併しその杉林は彼女が少し前に池袋の方から眺めて、雑司ヶ谷の森であると思つたそれであつた。

その杉林を越えると、そこにまた日光のよく當つてゐる細道があつた。享造とまさ子は再び暖い日光の降り注ぐ中へ歩み入つた。二人は今通つて來た森の中の空気を痛いやうに冷たく感じた。けに、軟らかく且つ暖かに、頬や襟元に溶ける日光を殊に氣持よく感じた。二人は枯芝の左右に踏み分けられた細い道を、その道の導くまゝに奥の方へ進んで行つた。

「チ、チ、チ、チ。」と、何處かで小鳥の鳴く聲がした。

その聲はだん／＼二人の方へ近づいて來た。そしてやがて、二人の眼の前の灌木の小枝へその小な姿をあらはした。それは鶯に似てゐる小さな鳥であつた。その羽根は薄い黒味を帯びた綠色であつた。

「チ、チ、チ、チ。」

小鳥は枝から枝へこさかしく飛び移つて、やがてまた灌木の林の奥の方へ消えて行つた。靜かな日光はその灌木の林の上にも降り注いでゐた。

「福井さん。」やがて享造はまさ子呼びかけた。「あなたはさつき琴の先生にでもなつてゐればよかつたやうな事を言はれましたね。」

「え？ 私。」まさ子は何物かに驚いたやうな顔をして享造を見あげた。「いゝえ、私はさう意味で言つたのではございませんの。たゞ私この頃、今まで習つて來た事が皆つまらない事ばかりのやうな氣がしてゐるものですから、若しか琴でも習つてゐたのなら、今少し何かの役に立つやうな氣が致しますたの。」

「といふ意味は？」

「別に意味も何もございませぬわ。たゞ今少し人間として生き甲斐のある人間になれるかと思ひましたの。」

「それで何ですか。あなたは矢張經濟上の獨立といふやうな事を考へてゐるんですか。」

「いゝえ、私はまだそこまでは考へてゐませんの。みるさんはこの頃頻りにそんな事を言つてゐますけど、私のはまださういふのぢやなくて……何と言つたらいゝでせうね……今までの學校の教育が、いゝえ私自身の習つて來た事が、如何にも無意味な事のやうな氣が致しますの。それで私はこの頃自分をどうにかしなきゃならぬと考へてゐますわ。」

「それちや僕がどうかしてあげませう。」

と享造は不意に力をこめて言った。彼女はびっくりとした。その瞬間に彼女はそれを冗談だらうと思つた。そして靜かに享造の顔を見た。併し享造の顔は極めて眞面目であつた。その廣い、黄色い、そして四角な顔には、どこにもふざけてゐるやうな色は浮んでゐなかつた。まさ子はその時ふと植物園で一緒に歩いた時の享造の顔を思ひ出した。それは確かにその温室で見た享造の顔であつた。

「あまり出しぬけで、僕の言つた意味がよくお解りにならないでせう。」と享造は言つた。そして唾を飲み込むやうにして、それからまたつゞけた。「僕から見ればあなたは素材です。如何にもすなほない、素材です。あなたは大理石です。僕はそれを刻むビグマリオンにならうといふのです。」

「ビグマリオン？」とまさ子は軽く言つた。併し其次の瞬間に彼女の顔は見る／＼赧くなつた。

「あなたは先日僕の差し上げた紙片を御覽下さいましたか。あのスケッチ・ブックを引き裂いたものを。」

享造は堅く決心したやうな顔をしてかうまさ子に言つた。その黄色い顔は幾分か蒼褪めて、意地悪さうに角張つた頬や、廣い凸凹した頬のあたりは、平生よりも一層引きしまつて見えた。

「え、拜見致しました。」まさ子は落ちついた聲ではつきり答へた。

「それからをとゝひ差しあげた手紙も。」

「え、拜見致しましたわ。」

「さうして、今日こゝへ出て来て下さつたわけですね。」

「え。」まさ子は、前よりも稍々低い聲で答へた。

享造は暫らく考へるやうな顔をしてゐたが、やがて咽喉の奥から押出すやうな強い聲で、

「それではもう何もかもお解りませう。……餘りだしぬけのやうですが、どうか、こゝで御返事をきかせて下さい。」

「……………」まさ子は黙つて大地の上に眼を落とした。

暖かい日の光は二人の肩の上に降り注いだ。その光はまたあたりの枯草や、灌木の枝や、黒く濕つてゐる細い道の上にも降り注いだ。……十秒……二十秒……三十秒、……長い間日の光に照らされた爲でもあらうか、どこやらで乾いた草の莖のはぜるやうな音がした。

やがてまさ子は靜かに顔をあげた。

「お心持はよく解りましたが、私はまだ何の準備も出来てゐませんから……………」

「準備と仰有るとどういふ意味ですか。」

「私はまだ何も知りませんから。人間として生きて行く事に就て何の準備も出来てゐませんから。そしてこれからどうしたらよいかといふ事に就て、まだ何の決心もついてゐませんから……」

「それはどういふ意味か僕にはよく解りませんが、兎に角、僕はあなたのビグマリオンになります。ビグマリオンと言つて言ひ過ぎなら、僕はこれからあなたと二人で新しいものに生ひ育つて行きます。僕は今あなたが無くては生きてゐられない氣持です。」

「でも私は……」

「僕は初めてあなたを見た時からさう思ひました。あなたは僕にとつて無くてならぬ人であるといふ事を……。その心持はあなたにお目にかゝる度に深くなつて來ました。僕の心持は今非常に急いでゐます。」

「でも私はまだ本當に何の準備も出来てゐませんから。」

「あなたはさう言つて拒絶なさるつもりですか。」と享造は急に力のある聲で言つた。「そんならなぜ今日こゝへ出て入らしたんです。」

「私はどうしても出てこなければならぬやうな氣持がしましたから……。」

「そんなら、あなたは……。」

享造はつと一足まさ子のそばへ近寄つた。さうして行きなり其の小さな手を執つた。

まさ子は急に空がくる／＼と廻り始めたやうな氣持がした。心の底のどこかでは豫て期待してゐた事であるが、それでも餘りに急に足許から大地が搖ぎ出したやうな感じがした。事實その時、目白の方から池袋の方へでも行くのであらう、山の手線を走る貨物列車の音が、轟々とその邊の森にまでこだまして聽こえて來た。

その日、まさ子が自分の家へ歸りついた時には、もう日はとつぷりと暮れてゐた。彼女は自分の家の玄関の前に立つて見て、その障子へ映る電燈の光の何となく明るく晴れがましいのにはつとした。

それまで彼女は不思議な心持で公園を歩いて來た。彼女の心の中のどこかには快いリズムを打つてゐるものがあつた。併し彼女の心の中にはまた重く沈み込まうとするやうな何物かどあつた。そして彼女のからだはひどく草臥れてゐた。そして彼女の頭の上には深い、廣い、じつと考へ込んでゐるやうな空があつた。その空には無数の星があらはれてゐた。明るく輝かしいオリオン星座が丁度東照宮の森の上にはあらはれたところであつた。その少し下の方に青白いシリウスがきら／＼と輝いてゐた。まさ子はそれ等の星を見た時に心の踊るやうな氣持がした。それ等の星が彼女の心の中へ入り込んでくるやうな氣持さへ感じた。併し彼女の心はそのあとからすぐまた重くなつた。彼女はじつと考へ込みたいやうな、さうかと思ふと何處かへ走り出したいやうな氣持を抱いて、いつの間にか自分の家の前へ辿りついたのであつた。

併し自分の家の玄関が餘りに明るくなつてゐるので、彼女は急に夢から現實の世界へ歸つたやうな氣持がした。そして何となくそこから内へ入り憎いやうな壓迫を感じた。

家の中には何か取り込みでもあるらしい氣合があつた。奥の方からは何の物音も聴こえてこないが、それでも、彼女は其内部に何事かの起つてゐる事を感じた。その脊脱には新らしい深ゴムの靴が一足脱ぎすてゝあつた。

(お客様かしら、それとも病人でも出來たのかしら。)さう思ひながらまさ子は玄関へ上つた。その三疊の壁際には黒つぼい厚い外套がかゝつてゐた。それと並んで黒の中山の帽子が一つかゝつてゐた。それ等の物はまさ子の見覚えのある物であつた。(矢張お醫者さまだ。)さう思ふと同時に、まさ子は何となく困つた處へ歸つて來たやうな氣持がした。自分の家でありながら、そして平生は何の氣兼ねないのであるが、彼女は急にそれから奥へ這入つて行く事が出來ないやうな氣持がした。その病人の誰であるかゞ氣にかゝりながらも。(こんなに遅く歸つてこなければよかつた。)まさ子は今更のやうにさう思つた。併し彼女はいつまでもそこに立つてゐるわけには行かなかつた。彼女は靜かに玄関の次の控へ室へ這入つた。

まさ子はその部屋に這入つてから、自分の手に雜司ヶ谷土産を——芒の穂で造つた木兎を——持

つてゐる事に気がついた。そこで彼女はそれを部屋の隅の壁際に寄せかけた。それから彼女はコートを脱いだ。

「まあ、今頃まで何處を歩いてゐたの？」さう言ひながら、突然その部屋へみのるが這入つて来た。

「只今、おそくなつてどうもすみません。」まさ子は丁寧にお辭儀をした。

「コートへ枯草なんかつけてー」

さう言つてみのるはまさ子のコートの裾から二三本の枯草をつまみ上げた。「本當に今頃までどこを歩いてゐたの？」

まさ子はぎよつとしてみのるの手の方へ眼をやつた。成程彼女の言ふやうにそれは小さな枯草であつた。みのるは疑はしさうな眼つきをして、額で睨めるやうにじつとまさ子を見つめてゐた。

まさ子はそれまでどんな場合に於ても、滅多にみのるから壓迫を感じた事は無かつた。反對に、多くの場合に於て彼女は無意識的にみのるに壓迫を加へて来た。併し其の時に限つて、彼女はみのるから強い威迫を加へられるやうな氣持を覺えた。彼女は眼をあげて眞直にみのるの顔を見る事が出来なかつた。彼女は自分のさし俯向いてゐる髪の毛の上へ、絶えずみのるの眼から射出される矢

が重く降りかゝつてくるやうな氣持を覺えた。併しまさ子はいつまでもさうしてみのるに射すくめられてゐるわけには行かなかつた。彼女は靜かに顔をあげた。そしてみのるに言つた。

「私の留守に何かあつて？」

みのるは、まさ子が先程からの彼女の問ひには答へないで、あべこべにかう自分に問ひかけたので、一寸それまでの意氣込を折られたやうな顔をしたが、すぐまた眞面目らしい様子をして言つた。

「そりや大變だつたのよ。」

まさ子はそれを聴くと同時にどきんとした。彼女の心臓は急に早鐘を撞くやうに躍つて来た。彼女はみのるの物事を誇張していふ癖を知つてゐるが、それでも其時ばかりは其言葉が言葉通りであるに相違ないと思つた。

「誰かどうかして？」とまさ子は言つた。

「お婆さんが大變悪くなつたのよ。晝間縁側で卒倒して。」

「まあ、さう。」まさ子は心から驚いてさう言つた。それと同時に、自分が長い間家をあげたといふ事が、それも音楽教師の許へでも行つたのなら兎も角も、さうでもないことで歩き廻つてゐた事だ

何となく心に咎められて来た。併し一方に、(お父さんで無くてまあよかつた。)と思つた。なぜさう思つたのか彼女にはよく解らなかつたが。

「それからどうして？」まさ子は再びみのるに訊ねた。

「それから大騒ぎよ。何しろ家には女中と私と二人ぎりかゝるないんですもの……電話をかけてお醫者を喚ぶやら、蒲團を敷いてお婆さんを其の上へ運ぶやら……お婆さんはまるで死んだやうになつてゐるんですもの。私本當にどうしやうかと思つた。」

「大變だつたわねえ、本當に濟みませんでしたわ。」とまさ子は心からさう言つた。「それでお醫者様はすぐ来てくれて？」

「えゝ折よくすぐ来てくれたからまあよかつたわ。でも注射をするまで私どんなに心配したでせう。」

さう言つて、みのるはそれから老祖母の病症をあらまし語り出した。それによると老祖母は一本の注射ではすぐに意識を恢復しなかつた。二本目の注射が濟んでから、暫らくして呼吸をふきかへして来た。それを見てお醫者も非常に喜んだ。それからお醫者はずつと今まで病床につきどりにしてゐてくれるのであつた。

「お父さんはどうして？」とその時まさ子はみのるに問うた。

「すぐ社の方へ電話をかけて見たのよ。けれどももうどこかへ出てしまつた後だつたわ。それから心當りへあちこちきゝ合せて見たけれども、今日に限つてどこへ行つたのか少しも分らないのよ。」

「それぎりまだ歸つて來ないの。」

「えゝ、それぎりまだ歸つてゐらつしやらないわ。」

「まあどうしたんでせう。」まさ子はさう言つて一寸考へ込むやうに首を傾げた。

「そこへ持つてきて、まあちやんまで歸つて來ないんですもの。私今日は本當にひどい目にあつちやつた。」

とみのるは怨めしさうに言つた。

やがてまさ子はみのると一緒に祖母の病室になつてゐる奥の八疊へ遣入つて行つた。その部屋は茶の間の次になつてゐて、ふだんは福井家の主人の寢室に使はれてゐた。福井は、家にある時は、二階の書齋にゐなければいつもその部屋にゐた。福井はその部屋で彼の所謂正座を行ふのを常とした。また内輪の來客などがあると、わざと其の部屋に通す事があつた。其部屋の床の間には一臺の刀懸けが置いてあつて、その刀懸にはいつも一腰の刀を飾つてあつた。祖母のまぢ子は、その部屋

の真中に、二枚の蒲團を重ねた上へ、小さく縮こまつて横になつてゐた。其の上には明るい電燈がぶらさがつてゐるが、醫者の注意でもあつたものか、其の球には薄青い紗の被ひをかぶせてあつた。それが爲に部屋全體がぼんやりと陰氣にぼやけて、そこにゐる醫者の顔も、醫者のそばに坐つてゐる見舞の客の顔も——それは隣の家の夫人であつた——蒼白く、そして如何にも一大事に際會してゐるやうに、眞面目らしく見えた。まさ子は靜かにそこに坐つて、先づ見知りごしの醫者に挨拶した。

「や、とんだ事でございましたな。」と、醫者は、低い、そして打ちとけた調子で言つた。

「病人の具合はどんなでございませう。」と、まさ子も低い聲で醫者に訊ねた。

「今眠つておいでのやうでございませうがね。どうも心臓が大分弱つてる模様ですな。ことによると暮からことしへかけての寒さに祟られたかも知れません。」

「さうしますと、先年もかうした事がありましたか、つまりあれでございませうか。」

「さう／＼さういふ事がございましたな。まああれの再發と言つてもよろしいでございますね。何しろお婆さんは平生から心臓の方が少しお弱い方ですから。」

「餘程氣をつけないといけませんまいか。」まさ子は本當の容態を讀まうとするかのやうに、じつと

醫者の顔を見ながら言つた。

「さあ、さうたいして御心配なさる程の事もあるまいと思ひますが、併しこの前の時よりもお氣をおつけなさる方が安全でございませう。何しろ心臓の事ですから、安靜の上にも安靜にして置く事が必要です。それから心配させたり、びつくりさせたり、するやうな事があつてはいけません。」

まさ子は醫者の説明をきゝながら、そつと祖母の方へ近寄つてのぞいて見た。祖母は電燈の光りの當らぬ方へ顔を向けて、小さくちよこまつて、すや／＼と、寧ろ樂さうに眠つてゐた。その髪の毛はもう眞白になつてゐた。人生の役目を済ました人、さまざま／＼な悲しみにもあひ、喜びにもあひ、それから苦しみにもあひ、そして今は何もする事が無くなつて、一寸した病氣にも抵抗する力が少なくなつて、かうして黙つてその邪惡な力に服従してゐる人——さういふ感じがしみ／＼とまさ子の心に湧き起つて來た。彼女はいぢらしさうにじつと祖母の鬚の毛を見つめてゐた。その時祖母は蒲團の中でむくむくと動いた。そして今まで眠つてゐたらしい眼をぱつちりと見開いた。

「まさ子、今お歸りかえ。」祖母は低い聲でさう言つた。

まさ子はびつくりしながら、幾らかあわてゝ。

「えゝ、只今。」

併し祖母はそれぎりでもまた静かに眠りつゞけようとした。

「それでは、私はこれで失禮致しますから。」

暫らくしてから醫者はさう言つた。そして二三の注意をまさ子とみのるに言ひ含めてから、靜かにその部屋の外へ出た。

まさ子はその翌朝、いつもより稍々おくれて、深い、重くるしい眠りから醒めた。別に頭痛がするといふ程でもないが、顔を洗つてからも容易に頭がはつきりしなかつた。縁側に出て見ると、朝の新らしい光が塀ごしにさし込んでゐて、光澤のある、濃い緑色の八つ手の葉が、いつものやうに如何にも生々とひろがつてゐた。併しまさ子はそれを見ても何の感じも起らなかつた。彼女はぼんやりと庭の土を見つめてゐた。それから彼女は其眼を板塀に移した。彼女の頭の中には、昨日から今日へかけて、長い長い「時」が過ぎ去つたやうな氣持があつた。

實際まさ子は僅の間に長い時を経験した。雑司ヶ谷の森——日の光が洪水のやうに降り注いで、寒い冷たい空氣が温室の中のそのやうに蒸れてきて、小鳥がチ、チ、と鳴いて、枯れた草の葉がはじけて、そして遠雷のやうな貨物列車が轟き去つた雑司ヶ谷の森——その森に彼女が享造と並んで立つたのは、それは彼女の頭には遠い昔の事のやうに感じられた。併しその記憶はその前の晩までは新らしかつた。彼女の頭は、その森から自分の家へ歸るまで、その事で一ぱいになつてゐた。彼女の胸は何となく充實してゐた。彼女の心臓は高いリズムを打つてゐた。彼女の心の中には新ら

しく生きねばならぬといふ考へが湧いてゐた。併しそれらの考へは、自分の家へ入ると同時に亂れざるを得なかつた。まさ子は先づ祖母の病氣に驚かされた。それからみゆるの眼に壓迫された。その上父の歸宅の遅いのが氣にかゝつた。——その父は、兎に角その夜が更けてから歸つて來たので、一家の者はほつと溜息をついたほど安心したけれども、まさ子はそれらの爲めにいつものやうに安眠する事が出来なかつた。彼女は久しぶりに眠れない夜を経験した。そしていつまでもあれからこれへといろ／＼な事を考へてゐた。

一晚中、まさ子の頭の中には、享造の事と、祖母の病氣の事と、父の事とが、三つ巴のやうになつて渦をまいてゐた。その渦が時によると崩れて伸びて行つた。その伸びた先きには、享造を中心とした——といふよりも、自分を中心とした新しい生活が、さまざまな色彩を帯びて織り出された。し併しその崩れて伸びた渦は、やがてまた元の三つ巴に返るのを常とした。その三つ巴の渦の中に、折玉蟲の顔が浮んで來た。さうかと思ふとそこにちらりと鳥羽の顔が見える事もあつた。まさ子はそれ等の考へに草臥れて、うと／＼して、深い底の方へ引き入れられるやうな眠りに落ちたと思つたら、やがてそこへ新しい朝が來たのであつた。まさ子の頭は燻し銀のやうに軽く曇つてゐた。彼女の頭はもう前の晩のやうにその事を考へるべく働かなかつた。それらの事は寧ろ遠い昔の事の

やうにさへ感じられた。祖母の病氣がさして心配するほどの變化を示さないことと、父の歸つて來たといふことゝが、彼女の心の底に一種の軽い安心を覚えさせた。彼女は何となく疲れて、それでゐて落ちついて、たゞぼんやりと庭の黒土や、隣の家の屋根の瓦や、その屋根の尖から少しばかり見える高い木の梢などを眺めてゐた。

父はもう二階の書齋へ上つてゐた。みゆるは祖母の病室へ這入つたまゝ出てこなかつた。それがためにまさ子は暫らくの間たゞ一人の時を楽しむ事が出來た。彼女は長い間そこに立つてゐた。空は前の日にも劣らぬほどによく晴れてゐて、朝の空氣は寢不足の眼に痛いほど冷たく澄んでゐた。併しまさ子の草臥れたからだは、その冷たい空氣をさして冷たいとも感じなかつた。

やがて彼女は縁側から茶の間へ這入つた。そして靜かにその長火鉢のそばへ行つて坐つた。それから彼女はそこに擴げてある新聞の上に眼を注いだ。ふと、まさ子の眼は、そこに擴げられた新聞の或る見出しの上へ行つてびつたりと止つた。それと同時に彼女の眼はくらく／＼とするやうな氣持がした。彼女の心臓は内部から湧き起つてくる強い衝激を感じた。

彼女の眼の前には、初號活字で二段抜の大きな見出しがあつた。其見出しは「首相に爆彈を投ず」と讀まれた。まさ子は大急ぎでその記事を読み初めた。併し十二三行ほど讀んで見たが、彼女

にはそこに何が書いてあるのか少しも分らなかつた。それほど彼女の頭は混乱してゐた。そこでまさ子は少しく氣を落ちつけて、やがてまた初めから読みなほした。そこには其前の前の晩に起つた驚くべき出来事が書いてあつた。〇——伯——總理大臣の〇——伯が、その晩何者にか暗殺されようとしたのであつた。新聞記事は大體次のやうであつた。——

その晩は、宮中に或る外國の貴賓の爲の記念夜會の催しがあつた。總理大臣はその夜會に列席して午後十時四十五分頃宮中から退出した。それから彼は自動車によつて、いつものやうに牛込の奥の自邸へ歸らうとした。その自動車が牛込の××といふ町へさしかゝると——丁度それは午後十時五十五分の頃であつた。突然その百十四番地の路次から一人の——或は二人の兇漢が飛び出した。そして總理大臣の自動車を目掛けて二個の爆弾を投げつけた。その一つは自動車のカヴァに當つてそして大きな音響を發して、併し爆發する事なく、泥除を傳つてころ／＼と地上にころげ落ちた。他の一つは自動車の扉の近くに當つた。それも爆發する事なく地の上に落ちた。運轉手は何事が起つたかと思つて、自動車を止めようとした。併し同乗の護衛警部某が其まゝ運轉しろと言つたので運轉手は其命令に従つた。

やがてその事が〇——邸から所轄の某署と警視廳とへ通告された。それから大騒ぎになつた。某

署の署長は自ら十数名の部下を率ひて直に現場へ出張した。警視廳からもまた幾人かの有力な警視や警部がそこへ急行した。兇行の行はれた場所は××町の百十四番地先きで、元乾物商の某といふ者がゐた空家の前であつた。そこに二つの茶筒に似たブリキ製の罐が落ちてゐた。それは某署長が直に證據品として押収したが、その内部には幾らかの火薬と、多くの石塊とがみつめてあつた。犯人は兇行が失敗に終ると同時に、何處へか逃走してしまつた。警察官吏がその邊の者を案内として調べたところによると、その空家には犯人の潜んでゐた模様は無かつた。併しそのすぐ横に細い路次があるから、恐らく犯人はそこに隠れて首相の通行を待つてゐたに相違ないといふ事であつた。次ぎの日になつてから警視廳では大活動を開始した。山の手の四五の警察署長は皆某警察に集まつた。そして警視廳から出張して來た人達と捜査方法に就て會議を開いた。警保局長は自ら總理大臣の私邸へ行つて其晩の事情を聴取した。それと同時に、その朝になると、首相邸へは續々として遭難見舞の客が押しかけた。佛蘭西大使、白耳義公使、海軍大臣、農商務大臣、某といふ元老の一人、某といふ政黨の總理、……其數は一々擧げる事が出来ぬ程であつた。

新聞記事は大體以上の如くであつた。それから更にそれに付け加へて、いつも〇——伯に付き添つてゐる某といふ家従と、兇行のあつた附近の一人人と、警視廳の一警部と、その外二三の人の短

かい談話が載せてあつた。或る人はその兇行の背後に有力なる中心人物が潜んでゐるに相違ないと言つた。或る人は政黨の關係者が其後ろに働いてゐるらしく思はれると言つた。或る人は單に恫喝の行爲に過ぎぬと觀察した。警視廳の一警部はそれを極めて軽く見て、恐らく不良少年の惡戯に過ぎぬだらうと言明した。

まさ子は新聞を読み終つてほつと溜息をついた。彼女にはそれがどうも只だの事件のやうに思はれなかつた。長い間彼女の豫期してゐた事が、突然彼女の眼の前へあらはれた氣持がした。首相の暗殺事件——まさ子はこの驚くべき出來事と、自分の父とを結びつけて考へないではゐられなかつた。勿論彼女はそれに就て何等の確實なる證據を持つてゐるわけではなかつた。併し彼女の頭は、彼女の心臓が頻に反對するにもかゝはらず、何となくそれを間違ひの無い事實として認めようとした。さう思つた瞬間に冷たい戰慄のやうなものが、彼女の脊髄を後頭部の方へ向つて走つた。

(若しも本當にさうであつたら)とまさ子は考へた。(いつまでも露顯しないといふ筈は無いから、さうしたら……)彼女はそれから先を考へる氣になれなかつた。(投げつけた爆弾はまるで玩具のやうな物であつたさうだから。)とまさ子は別の方へ考へをやらうとした。

それは矢張其場を視察した一警察官の談話であつた。一見したところ其爆彈の構造は極めて不完

全なものであつて、到底完全なる爆發作用を起し得る物ではなく、それを首相に向つて投げつけたのは、反對派の者が單に首相を驚かすだけの目的で行つたものであらう、といふのであつた。(若しもそれが事實であるとすれば、その中心になつた者は父では無いに相違ない。)とまさ子は考へた。彼女は自分の父を、さういふへまな事をする人と考へたく無かつた。さう思ふと、彼女の考へはまたその方へ傾いて行つた。不良少年の仕事であると或る警察官は言つた。不良少年といふものがさういふ惡戯をするものかどうか知らないが、さう言へば、折角投げつけた物が二つとも爆發しないところを見ると、或はさういふ事であつたかも知れない——さうもまさ子には考へられた。

「ピクリン酸。」ふと彼女はその言葉を思ひ出した。そして其意味を訊ねる爲にわざ／＼玉蟲を訪問した事を思ひ出した。さうすると彼女の心持はまた重苦しく、且つ考へたくないと思ふ方へ傾いて行つた。

まさ子は兇行のあつた晩に父が何處にゐたかを考へて見た。その晩の十時五十分前後——その頃彼女の父は確かに家にゐた。その晩彼女の父はいつものやうに午後六時頃歸つて來た。それから家族の者と一緒に晚餐をとつた。そして二階の書齋で遅くまで書見をしてゐた。若し彼女の父がさういふ事件の中心人物になつてゐるとすれば、その兇行の實行されるといふ夜、その中心人物が自分

の家にしつとしてゐられる筈は無かつた——少くもまさ子にはさう考へられた。(さうすると父はこの事件には何の關係をも持つてゐないかも知れぬ。)まさ子はさう考へてほつと溜息をついた。

併しまさ子はそれだけでは安心出来なかつた。もつと其事件に就て精しい知識を得たいと思つた。そこで彼女は幾つかの新聞を擴げて熱心にそれに關する記事を漁つた。どの新聞にもその事件は極めて大袈裟に取扱つてあつた。そしていろ／＼な人のいろ／＼な憶説が掲げてあつた。併し其内容はいづれも大同小異で、どれもこれも結局同じやうに取りとめの無いものであつた。

その時みしり／＼と足音をたて、二階から父の英之輔が降りて來た。その足音をきくと、まさ子はあわて、そこに取り擴げた新聞を疊みにかゝつた。

「どうだ、お婆さんの様子はよさうか。」英之輔はいつもの柔和な顔をしてまさ子に言つた。

「え、」とまさ子は赧い顔をして、「今朝はすつかり落ちつきなすつた様子でございますよ。」

英之輔はその答へを待つてゐる風も無く、すん／＼奥の病室の方へ歩いて行つたが、やがて又そこから出て來て、いつものやうに外套を着ると、そのまゝ玄關へ出て行つた。まさ子はその後ろ姿を見送つてから、また胸の底から湧き出したやうな深い溜息をついた。

一九

「ねえ、みのるさん、あなたはあの事をどう思つて？」

或る日——それはまさ子の心の上に、いろ／＼な新らしい驚きの起つた日から數へて、丁度四日目の事であつた。まさ子は久しぶりに茶の間で落ちあつた(彼女にはさう感ぜられた)みのるに、かう言つて問ひかけた。

まさ子にとつてはそれは本當に長い四日間であつた。彼女はその間絶えず何かしら恐ろしい事でも起りさうな豫想に脅かされてゐた。一大運命の轉換——さういふものが彼女の周圍に、否、福井家の周圍にひし／＼と迫つてゐるやうな氣持がした。思ひもよらぬ時に郵便屋が門をあけて這入つてくる、さういふ時にまさ子はぎよつとした。また勝手口から御用きゝが屢々訪づれる、さうすると、まさ子はそれを御用きゝであると知りながらも、その度にびつくりした。彼女の心はさういふ時には必ず二階の父の書齋へ飛んで行つた。そして父がもうそこにゐない——もう外出してしまつたと知ると——彼女は初めてそれで安心した。

彼女は毎朝熱心に新聞を漁る事を忘れなかつた。そして其記事から爆彈事件の内容を究めたいと

思つた。丁度その記事が初めて新聞に出た日の次の朝の事であつた。その朝の新聞に、二つの爆弾を砲兵工廠及び板橋の火薬製造所へ送つて分析したと云ふ記事が載つてゐた。それによると、その二つの爆弾は精巧を極めたものであつて、十分に理化學の素養のある者の手に成つた事を語つてゐた。爆弾は罐の中央に強力な火薬を装填し、その兩側に鐵片及び小石をつめ、雷管は二箇所装設してあつた。それらの火薬及び雷管は吾が陸軍にて使用するものに酷似してゐた。——まさ子はかういふ記事を読んだ時に、これは大變な事になつたと思つた。それまで彼女の心に幾分の望みをつながせてゐた記事——その前の日の或る警察官の話にある、その爆弾が極めて幼稚な構造であつて従つてそんな物を投げたのは單純なる不良少年の徒か、さうでなければ反對派の者が首相を一寸驚かさうとしたに過ぎぬといふ意見、さういふ見解は全然それで破れてしまつたのであつた。従つてまさ子の心配はそれによつて一步を進めたのであつた。その朝の新聞記事には、更にそれに附け加へて、近頃屢々陸軍の火薬庫へ忍び入らうとしたものがあるが、それと今回の爆弾事件に何等かの聯絡があるかも知れないから、當局はその方面へも搜索の手を延ばさうとしてゐる、と書いてあつた。併しまさはさういふ記事で安心する事は出来なかつた。それよりも彼女には、その記事の終りの方に、當局には既に犯人の目星がついた様子であると書いてあつた——その記事の方が氣にかつた。

併し爆弾事件に關する記事は、その朝限りで新聞に出なくなつた。その次の朝も、その次の朝もまさ子は眼を皿のやうにして新聞を探し讀んだ。併しどの新聞にも、どここの隅にも、それに関する記事は一行も見出す事が出来なかつた。その揚句の事であつた。まさ子が突然茶の間でみのるに話しかけたのは。

「ねえ、みのるさん、あなたはあの事をどう思つて？」

みのるにはまさ子が何を言ひ出したのか分らなかつた。彼女はげんさんさうな顔をして相手の顔を見た。

「あの事つて何？」みのるは反問した。

「あの事——あの〇——さんに爆弾を投げつけた事よ。」

「〇——さんに爆弾……」みのるはさう言つて、自分の耳を疑ふやうに、暫らくまさ子の顔を見つめてゐた。

「さう、あの事よ、あの事をあなたはどう思つて？」とまさ子は再び言つた。

「どう思つて？ どう思ひやうもないわ、あんな事。」みのるは冷淡にさう言つて、そこに落ちてゐ

る新聞の上に眼をやつた。

みのるの冷淡な調子に、まさ子は幾らか腹だしいやうな氣持を覺えた。併しみのるの立場に立つて考へて見ると、さして其事件に興味を起す筈も無いやうに思はれるので、彼女はそれ以上その事に就てみのるを責める氣にはなれなかつた。その代りに、まさ子はそれがために、久しぶりにみのるに對していろ／＼話して見たいと思つた其心持を棄てなければならなかつた。そこでまさ子もみのるのやうに黙りこんで、其日の新聞を——もう大方一度眼を通してしまつた新聞を、再び手に取り上げた。

併しまさ子の心持は新聞の方へ行かなかつた。彼女の眼はそこに印刷された黒いインキの點々の上に落ちてゐるが、彼女の心は四日前にそこに印刷された事件の方へ走つてゐた。〇——伯——まさ子はその名前を子供の頃からきいてゐた。彼女はもの心のついた頃からもうその名前を耳にしてゐた。それは彼女にとつてはもう歴史上の人物であつた。それにもかゝはらず、まさ子はその名前を絶えず耳にした。まさ子はその人がどういふ功業をなしたかをはつきり知らないが、兎も角も、その人は偉大なる人として彼女の頭に映つてゐた。まさ子は同じ東京に住んでゐても、まだその人の顔を見た事は無かつた。併し彼女の視覚の記憶には、もうその人を見た事がある程よくその人の面

影が残つてゐた。稍長味を帯びた、髪の毛の薄い、髻の無い、大きな顔、上眼瞼のところが一寸眼だつほど凹んで、頬骨が出てゐて、大きな口をいつもへんの字なりに結んでゐる——その傲岸さうな、樂天的な、そしてひどく明るい顔を、まさ子は子供の頃から記憶してゐた。その顔は何かと云ふと新聞や雑誌の上にはあらはれた。併しその顔よりも、その名前の方がより多く新聞や雑誌の上にはあらはれた。某大學の總裁、某研究所の顧問、某協會の會頭、さういふ場合に於ける。〇——伯の名前は數へて見れば十や十五では無かつた。それよりもその人の談話といふのが、絶えず新聞や雑誌を賑してゐた。外國から有名な學者が來たと言つては、その人を牛込の奥に訪問した。亞米利加から有名な女流飛行家が來たと言つては、その人を訪問した。その人はまた新しい會でも組織されると、きつとそこへ出て演説した。その人はまた人間は誰でも百歳以上まで生きられるものであるといふやうな説を發表した。まさ子はその人がどうしてそれ程高名になつたのか知らなかつたが、併しだんだん大きくなるに従つて、その人の言ふ事が全然根も葉も無い事では無いやうな氣持がして來た。〇——伯——或る人は、その人を日本の名物であるやうに評價した。また或る人はその人を根も無い大法螺を吹く人のやうに批評した。まさ子はその人の眞價に就てはよく知らなかつた。またそれを知らうとする興味も持つてはゐなかつた。併しまさ子はその人を嫌ひではなかつた。本當の政治

家といふものはあゝいふものであらう……といふやうな考へが、いつとはなしにまさ子の頭の中に出来てゐた。

その〇——伯と自分の父とを對照して見る時に、まさ子はそのに著しい異ひのある事を發見した。多辯な、明るい、呑氣な、そして開放的なその人に比して、彼女の父は、どちらかと言へば、寡黙な、鈍重な、そして沈鬱な、言葉よりも寧ろ實行を貴ぶといふ風の人であつた。さういふ風の人——殊に彼女の父は平生から日本と支那の問題に就て深い心配を持つてゐた——その人が、いつも大勢の向ふところにはばかり注意して、事もなげに思ひきつた事を斷行する〇——伯のやうな人を、心の中から日本の爲に危険な人と思ひ込んでゐる事は、考へて見ると或はあり得る事のやうな氣持がした。さう思ふとまさ子の心は益々不安になつて來た。彼女はもう新聞を手にしてゐる事が出来なくなつた。彼女は靜かにそれを疊の上に置いた。そしてひそかに溜息をついた。

それまで熱心に新聞に読み耽つてゐるかのやうに見えたみのは、その時急に顔をあげてまさ子の方を見た。そして微かな笑ひをその唇の端に浮べた。

「まあちゃんはいつからそんな事に興味を持つやうになつて？」

この不意打ちに、まさ子の黙想はすつかり破れてしまつた。彼女は顔をあげた。そしてそこに彼

女の顔を見入つてゐるみのるの顔を見出した。同時にその唇の邊に浮んでゐる冷やかな笑ひをも見遁さなかつた。併し彼女の心はその笑ひによつて少しも傷つけられはしなかつた。

「別に興味を持つてゐるわけぢやないわ。」とまさ子は靜かに言つた。「けれども私にはあの事が何だか恐ろしい事のやうに考へられて仕方がありませんわ。」

「そりや恐ろしい事にきまつてゐるわ。何しろだしぬけに人の生命を取らうてんですもの。けれどもあんな事が今の私達にどれだけの關係があるでせう？」

「あなたの云ふ事は何んだか大袈裟ね。」

とまさ子は言はうと思つた。併し彼女はそれを口に出さないで、其かはりに微笑した。

「私の恐ろしいといふ意味はさうぢや無いのよ。私にはあの事件が何んだかもつと私達の近い處にあるやうな氣持がするのよ。」

「つまり私達にもつと密接な關係があるといふ意味でせう。」

「關係と言へば言へない事も無いわ。併し私の今言つてゐるのは、あなたの考へてるやうなさういふ意味ぢやないのよ。」とまさ子は言つた。そして稍々もどかしさうに首を振つたが、やがてまた附け加へて言つた。「私ね……何んだか私達の知つてゐる人があの事件に關係してやしないかと思ふの

よ。」

さう言ふと、みのは「まさか」と言ふやうにその眼を大きく見はつた。

「これは私だけの想像ですけど、先のうちよく宅へ来たでせう、あの松田さんとか、上村さんとか言ふやうな人が、今度のやうな事をしたのぢやないかと思ふのよ。」

「まさか。」とみのは、その「まさか」をはつきり口に出して言つた。「あんな人達にそんな事が出来るもんですか。あんな野卑な、あんな下劣な、あんな酒飲みの人達にそんな事が出来るもんですか。」

「でもあの人達はいつでも恐ろしい顔をして、政治だとか、外交だとか、そんな事ばかり言つてゐたやうだわ。」

「あゝいふのが鬼面人を脅すといふものよ。」

とみのは言つたが、自分でもその言葉がをかしかつたと見えて、ほゝほゝと笑ひ出した。それから彼女はまた言葉をつゞけて云つた。

「だが、まあちゃんはなか／＼小説を作るのがお上手ね。兎も角もあゝいふ事件を自分のそばまで引き寄せたんですもの。」

その冷笑は、併しまさ子に何の損傷をも與へなかつた。さう言はれる事によつて、彼女の心證はますます／＼確かめられて行くやうな氣持がした。勿論それは彼女にとつて苦しい事であつた。出来るならば彼女は其の苦しさを、みのはの冷笑でなりと取除いてしまひたいと思つた。併しそれは望んでも得られない事であつた。如何にそれが苦しい事であつても、まさ子はそれを黙つて胸に疊んでゐるより外に仕方がなかつた。その苦しさを取り去るには「時」よりほかに適當なものではなかつた。恐ろしい事の豫想せらるゝ「時」、平和な笑顔を湛へてゐる「時」、あらゆる祕密をも困難をも解決してくれる「時」、まさ子は其の「時」の経過するのをじつと待つ事に決心した。

まさ子が黙つてじつと考へ込んでゐるので、みのは暫らくその顔を面白さうに眺めてゐた。彼女の唇のあたりは折々びく／＼と動いた。そこから今にも皮肉な、意地の悪い言葉が漏れさうであつた。併しさうして暫らくまさ子の顔を眺めてゐるうちに、その眞面目な顔に釣り込まれたものかみのはの顔もいつの間にかだん／＼眞面目になつて行つた。みのは珍らしい氣持でまさ子の顔を眺めやつた。そこには子供らしい皮膚と、筋肉のうちに、大人らしい表情を加へた極めて眞面目な顔があつた。みのはまさ子のさういふ顔に初めて氣がついたやうな氣持がした。それまでの彼女の眼に映つた——といふよりも頭に映つたまさは、呑氣な、鷹揚な、さうして何の考へも無いや

うな人であつた。勿論彼女はまさ子を心の中に入れてゐなかつた。そのまさ子がいつの間にかこんな顔をするやうになつたらうか、さうみのは考へて見た。さう考へてゐるうちに、みのはまさ子のさういふ顔が今に初まつたので無い事を思ひ出した。それと同時に彼女の顔にはまた皮肉な色が浮んで來た。

「まあちやんはこの頃何だか心配さうな顔をしてるのね。」みのはさう言つて、改めてまさ子の顔を見た。

「私が？」と言つてまさ子は顔をあげた。

「矢張さつきの事が氣にかゝつてゐるの？」

「さうねえ、氣にかゝるといふほどの事も無いけど、若し、そんな風に見えるとしたら、矢張りその事が心配になつてるのかも知れないわ。」

「どうしてあん事が氣にかゝつて？ 本當に。」

「そりやさつきも言つた通りよ。私にはあの事が、何だか私達に密接な關係があるやうな氣持がするんですもの。」

「まるつきり空想だわ。若しそれが本當なら。」

「もしそれが本當つて何のこと？」

「まあちやんの言ふ事がよ。」

「みのはさんは私の言ふことを嘘だと思つて？」

「さういふわけぢやないわ。けれども私には、あゝいふ事はごくつまらない事のやうに考へられるんですもの。それから……」

「でもみのはさんはあゝいふ事にも深い興味を持つてる筈ぢやないの。いつだつたか婦人參政運動の事を言つてたでせう。」

「そんな事を言つた事があるかも知れないわね。併し今ぢや私はそんなこと考へてもみないわ。私達には今もつと大切な事がありますもの。」

「その大切な事つてどんな事？」とまさ子は訊ねた。

「澤山あるぢやありませんか。けれどもまあそんな事、いつかゆつくり話すことにするわ。何しろこの頃のやうに忙しくぢや、私全くやりきれやしない。」

さう言つて、みのはは軽い溜息をついた。それから彼女は福井家に於ける自分の地位や、自分の思ふ事を勉強しようと思つてもその暇のない事や、それからまさ子がいつまでも呑氣に、そして自

由にしてゐるのが美ましいといふ事や、さう云ふ事をそれからそれへと述べて行つた。まさ子はみのるの心持をよく諒解する事が出来た。その言ふ事が可なり烈しい言葉で表白され、その烈しい言葉の中には、また彼女に對する可なりの敵意が含まれてゐるにもかゝはらず、まさ子はみのるのさうした心持の行き方を無理の無い事だと思ふことが出来た。

彼女は自分の心持がどうしてさう變つて来たかを不思議に思はざるを得なかつた。まさ子はそれまで、みのるの言ふ事といへば一から十まで同情をもつて聴く事が出来なかつた。彼女はみのるの言葉に不思議な反感をもつてゐた。みのるの言ふ事は、すべてが彼女に輕薄な言葉にきこえた。彼女はその心持を折々あからさまに言葉にあらはして言つた。そしてみのると幾度か感情上の衝突をづけて来た。それにもかゝはらず、その日のみのるの言葉は、まさ子の心にいつものやうに反感を起させなかつた。併し、さうかと言つて、まさ子はみのるの言葉を一々是認して、それに同情の相槌を打つ事は出来なかつた。みのるの獨立しようとする心持——その根柢にどういふ信念があるか明かでないが——その心持をまさ子は十分に理解する事が出来た。またみのるの新らしい女優になりたいといふ希望、その心持をまさ子はよく理解する事が出来た。「そんなに、ハウスキーピングがいやなら、いつそ私が引きうけませうか。」さうまさ子は言はうとさへ思つた。併しその時のまさ子

の心持はもつと別の事で一ぱいになつてゐた。彼女の心は、みのるに説明する事の出来ない父に對する心配で満たされてゐた。それから彼女の心の中には本多享造が入り込んでゐた。

まさ子はその日までに享造から手紙を三つ受取つた。それらの手紙はいづれも力と昂奮とに満ちてゐた。そこには享造その人を見るやうな、自信に富んだ、思ひあがつた、せき込んだ、内から外へ強い力の溢れ出すやうな調子があつた。「僕は黙つてじつとしてゐる事が出来ない」とその一つに書いてあつた。「僕の心持は今高く飛躍してゐる。僕は製作に没頭する。僕はブラツシュでもつて畫布を突き破る勢ひで製作に耽る」とその一つに書いてあつた。「僕は繪を書く事が出来ない。僕の心持は今製作以上に強く昂奮してゐる。僕は黙つてあなたからのたよりを待つてゐる事が出来ない。僕は明日あなたの家へ行つて、あなたのお父さんにお目にかゝつて、直接にあなたに關する交渉を開くつもりだ。」と別の一つに書いてあつた。まさ子はそれらの手紙から強い昂奮を覺えさせられた。また脅迫される場合に似た一種の感じをも受け取つた。従つて彼女は父の事を心配する合間には、その事を考へざるを得なかつた。

新らしい日、自分で生きなければならぬ日——さういふ日が次第に彼女の方へ近づくやうに、まさ子には感じられた。まさ子は心の中にその用意をしなければならぬと思つた。併し彼女はまた父

の方の解決がつくまで、それをどうする事も出来ないと思つた。父の方の事——それは全く彼女の杞憂に過ぎぬかも知れないが、彼女はどうしてもそれを空想であるとして放棄する事は出来なかつた。彼女の心の上には、その事が享造の事よりも大きな事として、重く、心苦しく、被ひかゝつてゐた。

それが爲にみのるの言葉はまさ子の心に深く觸れなかつた。彼女は半ばうはのそらでみのるの言ふことを聴いた。(矢張今少し時のたつのを待つより外に仕方がない。)さうまさ子は改めて心の中で思つた。

忌はしいまさ子の豫想は、幸にも實現せらるゝ事がなくて、更に二日過ぎた。性急な享造の手紙に對して、少し家庭のうちに心配の事があるから、今二三日訪問するのを待つて欲しいと答へた——その日限も過ぎた。まさ子は享造に對して、改めて何とか手紙を出さなければならぬと思つた。自分の混亂した生活をも整頓しなければならなかつた。何となく興味を失つてしまつた音楽、新しく自ら引き受けようかと思つた自分の家の家政、それらのものは彼女の心の中に、そのまゝの姿で投げ出してあつた。彼女は兎も角もそれらのものを整理しなければならぬと思つた。

併し彼女の心持は尙ほそれに着手する事が出来なかつた。彼女の家にはまだ祖母のまち子が病んで寝てゐた。彼女の心の中には尙ほ十分に拭ひ去る事の出来ない不安があつた。祖母の病氣はさして悪い方へは向かなかつた。否、寧ろ一日一日と幾分かづゝ良い方へ向つてゐた。併し苟且の病氣だと思つたものが案外に長びいた。いつもなら一日か二日で起きられるものと思つたのが、一週間を過ぎてもまだはかゞしく快方へ向はなかつた。醫者は、心臓に痼疾がある上に、動脈硬化症らしい症状を呈してゐるから、絶対に安靜にしてゐなければならぬと言つた。看護婦を雇ふ必要もある

と言つた。其結果まさ子の家には一人の看護婦が起臥するやうになつた。それらのためにまさ子もみのるも一層忙しくなつた。

その間に某國の貴賓は東京を去つた。そしてその人を歓迎する爲めに開かれたいろ／＼な會合、いろ／＼な宴會、いろ／＼な催しなどに關する記事も、最早新聞に見られなくなつた。その人を歓迎する爲に催された夜會をきつかけとして起つた爆彈事件だけをあとに残して。

「政治季節來る。——」と或る新聞の二面に書いてあつた。〇——伯は毎日のやうにその自動車を或は議會へ、或は總理大臣官邸へ、或は宮内省へ、乗りつけてゐる様子であつた。口の大きな政治家の漫畫が多くの新聞を賑はし初めた。さういふ記事や漫畫を見て、まさ子はまた彼女の不安の新らしくなるのを感じざるを得なかつた。

朝飯を済まして、みのるとまさ子の二人が、暫らく休息の時を茶の間に過ぎてゐる時であつた。父の英之輔はもう二階の書齋へ上つてゐた。それまで勝手の方で洗ひものでもしてゐたらしい女中が、急にあわたゞしい様子をしてその部屋へ這入つて來た。

「お嬢様。」と女中は聲をひそめて言つた。「何だか變な奴が勝手の外へ來てゐますが、何でございませう？」

それを聞くとまさ子はびくりとした。

「御用きゝぢやないの？」とみのるは新聞から眼を離さないで言つた。

「いゝえ、見た事のない人でございますよ。」女中は濡れた赤い手を前垂で拭きながら言つた。「それ一人ぢや無いのでございますよ。」

「押し賣か何かぢやないの。大きな聲を出しておつばらつてしまひなさいよ。」

「初め私が仕事をしてゐますと、ひよいと勝手をのぞく人があるのでせう。いつもの御用きゝかと思つて振返つて見ると、その人は黙つて元の方へ歸つて行くぢやございませんか。私は何の氣なしに外を見ますと、すぐそこるところに、三人の男が黙つて立つてゐるのですよ。一人は洋服をきて、一人は和服に外套をきて、一人は煙草を吸つてゐました。何だか氣味が悪いから、私はすぐ首を引つこめて、障子をしめてしまひました。」

女中は低い聲で、ひそ／＼と、さも一大事でも發見したやうに語り續けた。

「何でせう？」みのるは急に氣味悪るさうに言つた。

「御免なさい、御免なさい。」その時玄關の方から大きな聲で案内を乞ふ者があつた。

玄關への案内の聲をきいて、まさ子は何といふ事もなく再びびくりとした。併し彼女は自ら立つ

てその取次に出て行きたかつた。そこで彼女は立ち上らうとした。その時みのるはまさ子よりも早く立ち上つて、女中の言葉などはそつちのけにして、さつさと玄關の方へ出て行つた。(いよゝそその時が来た!)とまさ子は咄嗟のうちにさう思つた。彼女はこの早朝の訪問者をそれ以外のものとして考へる事は出来なかつた。彼女の心臓は早鐘のやうに動悸を打ち初めた。彼女は自分の脊髄を冷たい電氣のやうなものが走るのを覺えた。

暫らくすると、みのるがそこへ一枚の名刺を持つて再び這入つて來た。

「何でせう、これ。」

さう言つて、みのるはその名刺をまさ子の前に出して見せた。それは幅の狭い、細長い、粗末な名刺であつた。その表面には「××警察署勤務、警視廳警部補、××××」と印刷してあつた。まさ子はその名刺を見ると、さつと自分の顔の蒼く變るのを覺えた。併し不思議な事には、彼女の心持はそれを見る前よりも寧ろ落ちついてゐた。

「この人が何を言つて來て？」とまさ子は低い聲で訊ねた。

「叔父さんにお目にかゝりたいと言ふのよ。」とみのるは不審さうに眼を見はつて言つた。

「あなたは父がゐるつて言つて？」

「もうちやんとゐる事を知つてるのよ。」

「さう、そんなら私が一寸取次いで見ませう。」

さう言つて、まさ子はみのるから細長い名刺を受け取つた。それから彼女はその名刺を持つて再び玄關の方へ出て行つた。彼女の家の二階へ上るにはどうしてもそこへ出て行かねばならなかつた。

玄關の障子はみのるがあげたまゝになつてゐた。そしてそこには二人の嚴めしい人が立つてゐた。その一人は黒い脊廣の洋服をきて、其上に普通のオーバリーを羽織つてゐた。他の一人は和服に二重廻しを着て、縁の上に薄くほこりのたまつた中折帽子をかぶつてゐた。二人とも、まさ子がそこへあらはれたのを見て、疑はしさうな様子をして彼女の顔を見た。それを見るとまさ子は急に自分の顔の熱くなるのを覺えた。彼女は半ば無意識に、二階へ昇る階段をとん／＼と踏んだ。併し彼女は二階へ昇りきらぬうちに、ふと或る恐ろしい想像に襲はれて戦慄した。

(若しかすると、父はこの名刺を見て自殺しやしないかしら。)

さう思ふと、まさ子の足はそのまゝそこへ釘づけのやうになつてしまつた。それと同時に、その瞬間に彼女の頭の中へ恐ろしい光景が展げられた。——凄まじい短銃の音、投げ残した爆彈の破裂、濛々と立ちのぼる煙、血……

よろ／＼とよろめきさうになる足を踏みこたへて、まさ子はやがて二階へ上りきつた。そこで彼女はなるべく心を落ちつけようと努力した。そして靜かに父の机の方へ歩いて行つた。父の英之輔は、いつものやうにその机の前に坐つてゐた。そして眞直に胸を張り出して、眼を閉ぢてゐた。その机の上には四角な文字の印刷された小形の唐本が開いてあつた。

「お父さん。」とまさ子ははつきりした低い聲で言つた。「かういふ人がお目にかゝりたいと言つて訪ねて來ました。」

そして彼女は持つて來た名刺を父の机の上に載せた。英之輔は眼を開いた。そして其名刺を見た。それから靜かにうなづいた。

「よし。」と英之輔は言つた。「今すぐ下へ行くから。」さう言つて、彼は再び眼を閉ぢた。

まさ子は一方に胸の鼓動が烈しい運動の後のやうに昂まり、他方からだ全體が一本の棒のやうに硬くなるのを覺えたが、それでも其の瞬間に父の顔色がどう變るかに注意する事を忘れなかつた。然るに父の顔色は少しも變らなかつた。彼は恰もさういふ事を豫期してゐたかのやうに、或はまた全然さういふ事を……まさ子の心配してゐるやうな事を……考へても見ないかのやうに、泰然と落ちついて、眉の毛一筋すら動かさなかつた。彼の思索は、それまで讀んでゐた唐本の文句へ、或は

思想から思想へ、暫らくそのまゝつゞく様子であつた。まさ子は全く父の心持を付度する事が出来なかつた。彼女の持つて行つた名刺に對して父はどういふ考へを抱いてゐるのか、この有難からぬ訪問者を、父はどういふ風に待遇しようとしてゐるのか。

「それでは上げて置きますか。」まさ子は父の顔色を窺ひながら言つた。

「いや上げなくもいゝ。今すぐ私が行くから。」

英之輔は眼を見開いた。そして机の上の唐本を靜かに閉ぢた。

まさ子は父を一人そこへ殘して置くのが不安であつた。併しいつまでもそこに立つてゐるわけには行かなかつた。その上、下に待つてゐる人達に、二階で何かしてゐるかのやうに疑はれるのも……彼等が當然さういふ疑ひを抱くといふ事は、彼女にも想像する事が出來た——不快であつた。そこで彼女は一足さきに、父をそこへ殘して置いて、下へ降りた。

「只今父が参りますから。」彼女はさう玄關の人に挨拶した。そして次の部屋へ退いた。

高いピストルの音か、さうでなければ重苦しい呻き聲。——まさ子は全身を耳にして、二階の方で起る物音をきき漏らすまいとした。何秒か、何分か、何時間か……兎に角長い時が過ぎた。

突然二階の方からみしり／＼といふ足音がきこえてきた。まさ子の想像は實現されなかつた。そ

して彼女がほつと溜息をついた次の瞬間には、英之輔の大きなからだは玄關の座敷にあらはれた。

「あなたは福井英之輔さんですね。」

その入口に立つてゐた洋服の男は、英之輔の顔を見るや否や、先づ物馴れた調子でかう訊ねた。

「さうです。」英之輔は、低い併し持ち前の太い聲で答へた。

「それでは、これから直ぐ警視廳へ御同行を願ひます。」

と洋服の男は言つた。そして内ポケットを探つて、そこから細長く疊んである紙を取り出して、それを英之輔の方へむけてひろげて見せた。

「茲に検事の令狀がございます。」

英之輔はちらりとその方へ眼をやつた。そしてそれを瞥見すると、そのまゝ再び洋服男の顔を真直ぐに見た。

「承知しました。」と英之輔は言つた。

まさ子は玄關と次の部屋との境に立つてゐたが、父のこの言葉をきいてはつとした。それは音のない雷に撃たれた感じであつた。ゐても立つてもゐられないやうな氣持、夢で大きな蛇に追ひか

けられた時の感じ、それらの言葉では言ひあらはす事の出来ない感じであつた。何ものかの大きな力、どこかにひそんでゐる奇蹟の手、さういふものが突然そこへあらはれて、そこにゐる人達を傷つける事なく、あつといふ間に父を雲の中へでも引き入れて、どこかしら、安全の處へ連れて行つてくれよばよい……さういふ頼みにもならない頼みが、瞬間に彼女の頭の中を駆け廻つた。

「外套と帽子をお召しになつてもかまひません。」

その時洋服の男は親切らしくかう言つた。それをきくとまさ子は再びはつとした。そしていきなり次の部屋へかけ込んで、そこから父の外套と帽子を持ち出した。

英之輔はまさ子の差し出した外套と帽子を、黙つて受けとつて、黙つて身につけた。そして玄關の脊脱の上に揃へてある下駄——それは毎朝出社の時刻になると、女中がそこへ揃へて置くのであつた——その下駄を黙つて穿いた。

「さあ参りませう。」さう言つて、英之輔はそこに待つてゐる人達を促した。

まさ子はそこで父が何か言ふだらうと待つてゐた。彼女にとつては、否、福井家にとつては、英之輔の拘引は非常に重大なる事件であるから、殊に其拘引の原因が首相の暗殺といふやうな國事犯であるのだから……それは容易に且つ無事に済む筈は無いのであるから、一家の家長たる英之輔は

其家庭の事に就て何かしらあとに残る者に言ひ残さない筈はなかつた。まさ子はそれを待つてゐた。よしまたさういふ家庭の事に關する指示が無いにしても、ことによると、其儘一生會へないやうになるかも知れぬ場合であるから——まさ子には、其場合殊に強くさう感ぜられた——何かしらそこで言ひ残すべき筈のやうに思はれた。

併し英之輔は何も言はなかつた。その様子は毎朝社に出る時と少しも變つてゐなかつた。そこに立つてゐる警視廳の人達は、恰も年來の彼の友達のやうであつた。英之輔はそれらの人達と連れだつて、今通信社かどこかへ行く爲に外出しようとしてゐるかのやうであつた。たゞそこに……まさ子にとつては、いつもと違つた一種の嚴肅な空氣があつた。その冷たい嚴かな氣分を別にすれば、英之輔の様子は、いつもの外出の時と少しも違つてゐなかつた。まさ子にとつてはそれが物足らなかつた。もの足らぬといふよりも困つた事であつた。彼女は一家の事に就て、何かしら父から訊いて置かねばならぬ事があるやうな氣持がした。彼女はそれを訊きたいと思つた。併し彼女は何をきいてよいのか知らなかつた。その上彼女の言葉は、彼女の喉頭に於て死んでゐた。

「お嬢さん。」その時、洋服をきてゐる男がまさ子の顔を見て言つた。「いづれ面會を許される時がありますから、決して御心配には及びませんよ。」

その男はさう言つて、すぐさまそこから歩き出さうとしなかつた。その様子は、心の中で英之輔に對して、何かしら家族の者に言ひ残す事があるなら、今のうちにそれを果せと言つてゐる様子であつた。英之輔はその意味を諒解したのかどうか、そこで一寸ふり返つてまさ子の顔を見た。

「まさ——みのある、お婆さんの事を頼んだぞ。」さう言つて、英之輔は門の方へ向つて歩き出した。「はゞ。」

とまさ子は言つた。併しその返辭が聞えたか、きこえぬか分らぬ中に、英之輔を初めとして、そこに立てゐた三人の姿は門の外へ消えた。

そこには、初めから、用意して置いたものと見えて、三臺の人力車が待つてゐた。その最初の物に一人の和服の男が乗つた。英之輔は二番目の車に乗せられた。洋服を着てゐる男——警視廳警部補と名乗る男は、最後の車に乗つた。そしてやがて三臺の人力車は走り出した。三臺の車が馳せ去つてしまうと、そのあとから幾人かの大男が、ぞろ／＼と福井家の門前を横ぎつて、その車の行つた方へつゞいて行つた。まさ子とみのあるは——みのあるもいつの間にかそこへ出て來てゐた——玄關に立つたまゝ、いつまでも其あとを見送つてゐた。そこにはもう人の影も無かつた。餘り廣からぬ門は、ぼかんと其口を開いたまゝ、明るい日の光りの中に立つてゐた。併しみのあるとまさ子は長い

間、言葉もなく、その門の方を見送つてゐた。

「まあちゃん！」暫らくたつてから、みのるはまさ子を見て云つた。

「みのるさん！」とまさ子も云つた。

二人はそれぎり、顔を見合せたまゝ暫らく黙つてゐた。黙つてゐる二人の眼から、急にはら／＼と涙が流れ出した。

みのるの涙と、まさ子の涙が同じ性質の涙であるか、同じ内容の涙であるか、それは別問題として、兎も角も二人が同じやうな驚きとも悲しみともつかない、不思議な心持から、同じやうな冷たい涙を流してゐる時、今の先、三臺の車が馳せ去つた門前から、見馴れない三人の紳士が這入つて來た。その三人の紳士は、明かに今の先までそこにゐた人達とは違つてゐた。その二人は羽織袴であつた。他の一人は洋服であつた。洋服の紳士は立派な口髯を生やしてゐた。その人は手に黒革の、稍や手すれのした、書類でも入れるやうな大鞆を持つてゐた。三人の紳士は、まさ子とみのるの立つてゐる前へ、——福井家の玄關口へ進んで來た。

「一寸お訊ねしますが」その中の年若な一人が言つた。

「福井さんの御不在には、どなたがこちらの代表者ですか。」

まさ子とみのるは、襲撃して來た敵に對する獸のやうに、急に二人のからだを寄せた。併し二人とも——殊にまさ子は、割合に落ち着いてゐた。

「代表者と申しますと？」まさ子は言つた。

「つまり福井さんの代りになる人ですね。例へば奥さんとか、息子さんとか、いふ人です。」

「祖母が居りますが、只今病氣で臥せつて居ります。」とまさ子は答へた。

「病氣？ それでは、外には？」

「外には私どもだけでございます。」

「あゝさうですか、それではあなた方は福井さんのお嬢さんですね。それではあなた方に申しますが、私達は東京地方裁判所の豫審判事です。少し取り調べる必要がありますから、お氣の毒ですがこれから福井家の家宅搜索を致します。」

若い紳士はさう言つて、洋服の紳士から一枚の書きつけを受けとり、それをみのるとまさ子の方へ出して見せた。

「まあ……。」

とまさ子は言つた。併しそれぎりではまさ子は何も言ふ事が出来なかつた。また何と言つてよいか

も知らなかつた。

三人の紳士はずん／＼まさ子の家の玄関へ上つた。併し三人の様子には少しも粗暴なところは無かつた。まさ子はさういふ風な種類の人を、たゞ何となくこはらしい、無暗に威張り散らす、恐ろしい鬼のやうな人であると思つてゐた。然るにまさ子の眼の前にあらはれた三人の人は、その見かけが如何にも立派な紳士であるやうに、その態度も如何にも柔和な紳士であつた。

「御主人の居間はどちらですか。」洋服の紳士は、勞はるやうな口調で、まさ子とみのるの方を向いて言つた。

「あの、主人の居間には只今祖母が寝てゐますが。」
とまさ子は答へた。

「さうですか、それでは其方はあと廻しにして、先づその部屋から調べますから。」

さう言つて、その紳士が先に立つて、三人は玄関の次の控へ室へ這入つて行つた。

三人の紳士が優しいからと云つて、まさ子はその人達を、好意を以て歓迎する事は出来なかつた。

その人達は、彼女にとつては、矢張恐ろしい闖入者であつた。まさ子は烈しい緊張の心持を以て、その人達の動作を眺めてゐた。

三人の家宅搜索の方法は極めて物馴れたものであつた。彼等は順序よく、秩序正しく、そして精細にその部屋の隅から隅まで、調べて行つた。戸棚の奥の本棚の隅、その上に載せてある寫眞ばさみの間、壁にかけられた油繪の後、すべての物は、手早く、すらく／＼と調べられて行つた。

豫審判事の一行は、病人の寝てゐる部屋を除いて、階下の部屋を悉く捜査し終つてから、やがて二階の英之輔の書齋へのぼつて行つた。その時、和服をきてゐる一人の若い男だけが、階下の部屋に残つて、祖母の病室に近い茶の間の隅に立つてゐた。其様子は如何にも物軟らかであつて、少しも威張つたやうな口をきかないから、一寸見ると何の爲にそこに残つてゐるのか解らなかつた。併しみのるはその人がそこに立つてゐるのを見て、みのるや、まさ子や、それから女中など、それまでこちらの部屋にゐた人達を、一行が捜査を終るまで、祖母の病室に——英之輔の居間であつた部屋に入れまいとする爲であらうと想像した。そこで、みのるは黙つて、その部屋の火鉢のそばに坐つてゐた。

「一寸お火を。」

さう言つて、若い紳士は袂から巻煙草を一本抜き出した。そしてみのるの前の火鉢の處へ来てそれに火をつけて、それからまた元の處へ戻つて、靜かに、快さうに、青い煙を吹き出した。

まさ子は他の二人の紳士のあとについて、二階の書齋へのぼつてゐた。

「念のために、どなたか一緒に二階へのぼつて下さる。」

さう其なかの一人が、二階へのぼる時に、みのもとまさ子の方を向いて言つた。そこでまさ子はその人達の後に従つて、二階へ上つたのであつた。

洋服を着てゐる男は、それまで主として二人の若い男の搜索の差圖に當つてゐた。併し二階へ上つてからは、その男もまた今ひとりの人と一緒になつて、その邊の捜査に着手した。

その部屋の搜索は、他のどこの部屋での搜索よりも手間どつた。そこには大きな机があつた。澤山の洋装の書物や和書を入れた本箱があつた。その後ろには奥の深い袋戸棚があつた。横手の押入には英之輔の文庫や、昔よく行はれたけんどんや、澤山抽斗の付いてゐる小箆笥などがあつた。二人の男は、それらの物を一々丁寧に、且つ注意して、精細に調査した。本箱の書物は、一冊一冊抜き出して、ばらばらと頁を繰つて見た。机の抽斗や、本箱の抽斗にあつた手紙は、一つ一つひろげて眼を通した。本箱の後ろも見つた。硯箱の下も見つた。相間に掲げてある古い日本畫の額の後ろも見つた。

まさ子はそれらの様子を、一種の驚きの心をもつて眺めてゐた。その早さ、その手際よさ、その

水も洩らさない調べぶり、それらのものは、まさ子にとつて初めて見る大きな驚きであつた。併しまさ子はそれよりも、さういふ調査によつて、何かしら父に不利益な證據品のあらはれる事も恐れてゐた。ピクリン酸といふ文字、コロヂウム液といふ文字、もしかして、そんな文字を記した手紙でもあらはれたならどうだらう、それよりも若しかして、戸棚の隅からでも、さういふ危険な物を容れた小さな罐でもあらはれたらどうだらう、まさ子はさういふ事ばかり心配してゐた。併しさういふ種類の物は、その部屋から一つも現はれなかつた。何かしら容器のやうなもので、その部屋にあつたものと言へば、本箱の上の支那焼の壺と、柱かけになつてゐる竹細工の花さしと、その二つに過ぎなかつた。併し二人は無駄骨折をしたといふやうな顔もしなかつた。結局二人は、英之輔の机の抽斗から見出した手紙を二本ほど持ち歸る事にした。

「それでは、この二つを押収しますから。」

さう洋服の人はまさ子に向つて言つた。「押収」といふ言葉が著しくまさ子に耳だつてきこえた。「どうも取散らして失禮しましたね。」

二人はさう言ひながら、本箱や机や、其上に載つてゐた物の位置などを元のやうになほした。それから、今度は階下の病室を、已むを得ない事であるから、搜索するのだと言つておりて行つた。

一同の者が、みのるやまさ子を従へて老祖母の病室へ這入つて行くと、寝てゐなければならぬ筈の病人は、その病床の上にきちんと起きなほつてゐた。白いきものを着てゐる看護婦は、そのそばに困つたやうな顔をしてすわつてゐた。

「あなた方は」と病人は低い併しはつきりした聲で言つた。「どなたでございますか。」

三人の紳士は、病人のこの問ひに、眞正面から、ぼんと一本打込まれたやうな様子であつた。「まあお婆さん、すぐあとでお話ししますから……。」

みのるは、あわてゝ祖母の傍へ寄つて、かう言つた。

「いゝえ、さうはなりません。病人の寝てゐる部屋へ、よその知らない人が、案内も無く、黙つて這入つてくるといふ法がありますか。」

「まあお婆さん……。」

みのるが尙ほもなだめようとすると、その時洋服の紳士は一足前へ進み出して言つた。

「いやお婆さん、どうも申譯無いことを致しました。實は私どもは東京地方裁判所に勤めてゐる者ですが、こちらの御主人の事について、少し取調べねばならぬ事が起りまして、已むを得ずかういふ處までお伺ひ致しました。」

「左様ですか、それはまあ御苦勞さまでございます。」と老祖母は急に静かな低い聲で言つた。「して、そのお調べになるといふのは、どういふことの爲でございますか？」

「それに就ては、まだ私の口から申しあげられません、いづれそのうちにお分りになるでございませう。」と洋服の紳士は言つた。

「何ぞ主人が悪い事でも致しましたか。」

「いや、さういふ御心配はありません。」と豫審判事は言つた。それから少し間を置いてから、それに付け加へて言つた。「今すぐおしまひにしますから、御迷惑でも一寸の間御邪魔致します。」

それと同時に、二人の若い男はすん／＼その部屋へ這入つて行つた。そして先づ床の間から、それから其隣の違ひ棚の邊から探し初めた。病人はその儘口を閉ぢてしまつた。そして眼をふさいで、じつと床の上にすわつてゐた。

「横におなりになつた方がよろしうございますよ。」

さう看護婦が言つたけれども、病人は返事もしなければ、身じろぎもしなかつた。

その部屋の搜索は、豫審判事の言つたやうに、間もなく、簡単に済んでしまつた。三人はその部屋から何物をも發見する事は出来なかつた。そこで手持ぶさたに、如何にも氣の毒さうにして挨拶

やがてぞろ／＼とそこから出て行つた。

老祖母は、三人の挨拶に返事もしなかつた。頭もさげなかつた。そしてやゝ暫らく、眼を閉ぢたままそここさうしてすわつてゐた。

「お婆さん。」みのは心配さうに祖母の顔を覗き込んで言つた。

暫らくしてから、老祖母は静かに眼を見開いた。その眼は——その瞳は、じつと一個所を見つめてゐるやうで、そして力が無くて、その虹彩膜はぼんやりひろがつてゐた。

「お婆さん、どうかなすつたのですか？」とみのは言つた。

併し老祖母は何の返事もしなかつた。その様子がをかしいので、看護婦はあわてゝ立ちあがつて後ろから老祖母に手をかけようとした。ところが看護婦の手がまだそこまで届かぬうちに、病人はころりと前へのめつてしまつた。

「お婆さん、お婆さん。——看護婦さん早くどうかして……まあちゃん……」

みのは半ば狂人のやうになつて叫んだ。

二二

歐羅巴に於て行はれてゐる夜を日についての殺戮は、たとひそこから遠く離れてゐるとは言へ、その一々の重なる現象が、殆ど残るところなく吾國に傳へられた。戦争は人類の驚くべき天分を發揮させた。曾て英吉利のある文學者が言つたやうに、農具だとか、紡織機械だとかいふ、平和の機械類の發明にかけては、さして立派な才能を示さないが、戦争の道具の發明といふ事になると、驚くべき天分を發揮する所の人類は、その文學者の言葉を事實の上に裏書して、さまざまの恐ろしい武器をこの地球の上に持ち來した。獨逸の或る學者は、曾てその著述の上で、この次ぎの戦争は、殺人の卸賣であると書いた。その豫言がまた事實の上にあらはれた。

大きな大砲——マホメツト二世が東羅馬帝國の首都を攻撃した時に用ひたやうな大きな大砲が、もつと精巧な機械装置と、もつと有力な動力装置とを以て、歐羅巴の戦場に齎らされた。五十年前佛蘭西の或る物語作者が空想の中に描き出したやうな船が、實際に歐羅巴の海の中にあはれた。それらのものが、毎日毎夜、毎時毎秒、恐ろしい殺戮を行ひつゞけた。前途の有望な、若い、そして將來どれほど人類の文明に貢献するか計り知る事の出來ぬやうな澤山の青年が、その犠牲になつ

た。

ネヴィンスキーは砲兵隊の一員として出征した。ルバートブルツクは希臘のスキロフ島で空しく死んだ。ヴァイオリンを手にしては、世界的の名手として知らるゝクライシユラーも、僅に一中尉として自國の軍隊に従軍した。ダンモンチオは飛行機に乗つて出征した。——さういふ報道は、或は電報によつて、或は通信によつて、かなりの程度まで精しく吾國に傳へられた。

人類のすべてが、滅亡に向つて急ぎつゝあるかのやうであつた。たとひ吾國が、さういふ戦ひの戦はれつゝある場所から遠いとは言へ、多くの人はさういふ報道によつて少からず神経を刺戟された。その刺戟もたびかさなつて、今ではそれにも餘り動かされないやうにさへなつてゐた。クラカトアの火山が爆發した時に、その餘勢が海の波に及んで、その西へ行つた波と東へ行つた波とが、大西洋の真中で三度衝突したさうだ。丁度それと同じやうに、歐羅巴の戦争は、西からも東からも吾國に波及して來た。すべての物の價が高くなつた。すべての人の心が險惡になつた。いろ／＼な事に驚かされ通しの心は、だん／＼いろ／＼な事に驚かぬやうになつた。

併し爆彈事件の關係者が残らず捕縛されたといふ報道は、さういふ刺戟に鈍くなつてゐる世間の人々の心を、その他の事件に於けるよりも幾らか餘計に刺戟した。それまで數日の間、その事に關す

る記事を一行も載せなかつた新聞紙は、争うてその内容を精しく傳へる事を誇りとした。久しく禁止されてゐた記事差止が解除されたから——とすべての新聞に記してあつた。それらの新聞記事によると、その事件の中心人物は矢張福井英之輔であつた。そして其實行者はしげ／＼と福井家に入入してゐた松田某及び土村某の二人であつた。その二人が〇——伯の自動車に投げつけたところの爆彈を製造した者は、上田某といふ曾て中學校の化學教師をしてゐた者であつた。それから其爆彈を製造するために用ひた藥品類は、目白某といふ藥種商が供給した。尙ほその製造した爆彈を實驗した時には——その實驗は、人目をさける爲に武藏野の奥のHといふ小驛の山中で行はれた——會津大尉も立ち會つた。

「福井といふ人はこんな事をする人か。」と世間の或る者は言つた。

「とう／＼あの男のやりさうな事をやつた。」とまた或る者は云つた。

「勿論、あの男の後には×××があるんさ。」と或る者は言つた。

併し新聞紙の記すところによると、その事件に關係する限りでは福井の檢擧を以て一先づ其搜索を打ちきるといふ事であつた。

世間の人の驚きは、併し福井家の人達の驚きにくらべて言ふに足りなかつた。一家の主人の拘引、

それについて起る家宅搜索、それから最後に病祖母の氣絶——それらの出来事は、みのるやまさ子のやうな若い娘達に對して、餘りに大きな驚きの材料であつた。餘りに負擔に堪へぬ重荷であつた。若い娘達はそれをどう處理してよいか知らないで、たゞ二人で一緒になつて顫へてゐた。併し何よりもさきに、先づ老祖母をその氣絶から呼び覺さねばならなかつた。

「お婆さん！ お婆さん！ しつかりなさいよ。」

みのるとまさ子は左右から祖母の傍によつて、そのからだを仰向けに寢床の上に寝かせて、その耳に近く口をよせて言つた。看護婦は急いでその手さげ袋の中から注射針を取り出した。そしてそれに注射液を入れようとした。併し彼女の手はぶる／＼顫へてゐた。注射液は容易に注射針の中に這入らなかつた。

「あの、どなたか早く先生にお電話をかけて下さい。」

さう看護婦は言つた。まさ子はそれをきいて、先づ何よりもさきに醫者と呼ばねばならぬといふ事に氣がついた、まさ子は大急ぎで電話室の方へかけて行つた。

電話は容易にかゝらなかつた。併し長い時間を費やしてそれをかけてゐるうちに、まさ子の心は幾分か落ちついてきた。そしてこれから後に彼女のとらねばならぬ手段が、ぼつ／＼と彼女の胸に

浮んで來た。まさ子は先づ親戚の者や、英之輔の親しく交際してゐる人達に、その朝英之輔の拘引された事を知らせねばならぬと思つた。それから祖母の病氣が萬一重大な事にでもなれば、その人達に相談して、病院へでも入れるやうにしなければならぬと思つた。その次に彼女の胸に浮んだ事は、父の留守中、如何にして一家を維持すべきか、或は如何にして一家を解散すべきかといふ事であつた。まさ子の想像は、悪い方へ、悪い方へと、向いて行つた。——祖母の死といふ事が先づ彼女の頭にちらついた。その次に一家の離散といふ事が考へられた。監獄の中へ押し込められた父の蒼黒い顔……茫々とのびた髻、落ち窪んだ眼……さういふ様子が、拂ひのけようとすればする程、執念深く彼女の想像にあらはれた。

併しまさ子が病室へ戻つた時には、幸にも、祖母は看護婦の注射によつて其息を吹き返した。そして淺い、弱い、忙しい呼吸をつゞけてゐた。

「まあよかつた。」とまさ子は深い溜息と一緒に言つた。

「本當に。」とみのるも、まさ子の顔を見ながら、強く緊張しながらも、疲れたやうな顔をして言つた。

「早く先生がおいで下さればようございませう……。」

看護婦はさう言ひながら、心配さうに眉をひそめて、病人の手の脈を計つてゐた。

病人は少しも口をきかなかつた。その朝までだん／＼快復に向ふらしい様子を示してゐたのが、僅の間に反対の徴候を示すに至つた。家宅搜索の爲に三人の官吏がそこへ這入つて來た時に示した勇氣は、今はどこにも見る事が出來なかつた。彼女は向けられた方へ向いたまゝ、依然として眼を閉ぢて、浅い短かい呼吸をつゞけてゐた。

あわたゞしく、騒がしかつた一日は過ぎて行つた。そして主人のゐなくなつた第一の朝が福井家に來た。前の日につゞけさまに心を動かされたみのもとまさ子は、この日はその反対に、つゞけさまにからだを動かさねばならなかつた。

まさ子の打つた電報によつて、英之輔の拘引された日の午後にかけて一人二人の親戚の者はそのまゝ福井家に泊り込んで、その朝まで何かとみのるやまさ子を慰めたり勵ましたりした。併しみのるやまさ子は、さういふ人達にもいろ／＼心遣ひをしなければならなかつた。祖母の病氣は前日の日から少しも變らないので、その方も看護婦にまかせきりにして置くわけに行かなかつた。その上に、その朝になると、あちらこちらから、續々として見舞の客がつかけて來た。みのるかまさ子のどちらかゞ、代るがはる、さういふ人達の處へ挨拶に出なければならなかつた。

英之輔の勤めてゐる通信社の人達は、流石に職業柄早くもその事實を知つたと見えて、その一人二人は前の日の夕方に見舞に來た。併し多くの人達はその朝になつてからやつて來た。曾て英之輔が創始した新聞社の人達、英之輔と同業の二三の代表者、英之輔から政治的感化を被つたといふ青年、××會といふ政黨に籍を持つて居る代議士、××といふ辯護士——さういふ人達が、入れ代り立ち代り福井家の玄關を訪れた。

中外通信社の社員といふ人が、二人ばかり福井家の玄關にあがり込んだ。まさ子もみのるも、その人達の顔を餘りよく知らなかつた。併しその人達はそんな事には頓着なく、ずん／＼まさ子やみのるの居間へ這入つて行つた。そして机や火鉢を取り出させた。その人達はそれらの物を玄關へ据ゑつけた。そしてそこに受附をこしらへた。

十時頃になると、昔、英之輔と同僚であつた春日貞太郎といふ政治家がやつて來た。この人は長い間××新聞を主宰してゐたのであるが、今ではそれを他人に譲り渡して、主として政治家として社會に立つてゐるのであつた。福井の名は、多くの人に、いつもその人と結びつけられて考へられてゐた。併し春日は久しく福井を訪づれなかつた。彼が新聞社を離れてからは、さうして主として政治家として働くやうになつてからは、殆ど福井家へやつて來た事は無かつた。その春日が、久

しぶりにまさ子の家を訪づれたのであつた。

春日は福井家を自分の家のやうな顔をして、黙つてすん／＼其二階へ上つて行つた。そして其處へ玄關の者から火鉢や煙草盆などを運ばせた。春日がそこへ陣取ると、それからいろ／＼な人がやつて来て、その中の或る者は矢張そこへ上つて行つた。かうして福井家の二階は次第に人の數を増して行つた。

みのるとまさ子は、幾度もそこへお茶などを持つて挨拶に行かねばならなかつた。その部屋はそれからいつも煙草の煙が濛々と立ち上つてゐた。高い聲、太い聲で、笑ふ聲や、話す聲が絶えなかつた。それらの聲は、福井家の憂ひを少しも知らぬものゝやうであつた。事實みのるやまさ子がそこへ挨拶に行つても、そこにゐる人達で彼女等に言葉をかけるものは餘りゐなかつた。彼等はみのるやまさ子に一寸頭をさげて、形式的に一言二言口をきいて、それからすぐ彼女等のゐる事などは忘れたものゝやうに、春日を中心として、福井家に關係の無い世間話——主として政治界の噂や、實業界の噂などに話し耽るのであつた。

みのるとまさ子は、さういふ人達を相手にそれまでの出來事を深く考へる暇もなく、忙しい時を過ごさねばならなかつた。それが爲に、いつまでも、その朝の新聞すら見る事が出來なかつた。二

人の心はだん／＼不愉快になつて行つた。丁度さういふところへ、いつものやうに繪の具箱を肩にした本多享造が訪れた。

主人のゐなくなつたところへ、急に平生餘り親しくしてゐない人達が入り込んで來たのであるから、まさ子やみのるは、恰も主權者を失つた一つの國へ、全く違つた人種が入りこんで來たかのやうな心持を感じてゐた。そこへ本多享造があらはれたのであつた。まさ子やみのるは、それがために、自分と同じ人種にめぐりあつたやうな氣持を感じた。自分の國のうちに全く違つた言葉をきゝ、その習慣に於ても、その感情に於ても、全く今までの自分の國の者と違つてゐるところの人種が、それまで自分の國だと思つてゐたところを自由に横行する——それがまさ子やみのるの感じてゐた感情であつた。まさ子やみのるの心は、感謝よりも不平に満ちてゐた。それだけ二人は享造を見て親しみを覺えた。二人の心持は他國に於て同國の者にめぐりあつた喜びであつた。

「大變なことになつたんですね。」

享造はまさ子の部屋へ這入るや否や、碌に挨拶もしないうちに、先づかう言つてまさ子とみのるの顔を見た。

「えゝ、本當に。」とまさ子は答へた。

「どんなにかびつくりしたでせう。僕も今朝新聞を見て驚きました。實は今日ごろこちらへお伺ひしようか、それとも寫生に行かうかと考へてゐたのでした。とうとう寫生に行く氣になつて、繪の具箱を肩に出かけようとしたが、その出がけにふと新聞を見るとあの事が出てゐるのです。本當に驚きました。」

「私本當にびつくりしましたわ。何しろあんまりだしぬけなんですもの。」

「さうでせう。併しそれまで何の前兆も無かつたんですか。」

「えゝゝ、まるつきりそんな事はございませんでしたわ。」とみのるは言つた。併しさう言つてしまつてから、彼女は急に氣がついたやうに、「それはさうとまあちゃん先達てから變な事を言つてゐてね。何かさういふ風な事に氣が付いてゐたのぢやないの？」

「氣が付いてゐたわけぢやありませんけど、何だかそんな事がありさうな氣持がしてゐましたわ、ずつと前から。」とまさ子は言つた。

「ずつと前から？」と享造は鸚鵡返しに言つた。「そしてそれはいつ頃からの事です。」

「去年の秋から。——あの大森に音楽會があつたでせう、あの少し前頃から。」

「まあ、あんな頃から！」とみのるは驚いたやうに言つた。「そしてどうしてそれを知つて？ 何か

そんな證據があつて？」

「いゝえ、證據なんてありやしませんわ。たゞそんな風に感じられたんですわ、いろんな周圍の様子から……」

「つまり直覺ですね。さういふ事はよくあるもんだ。……併しえらい事をしたものですね。兎に角非常なことですね。」

享造は感嘆したやうに、同じやうな言葉を繰返して言つた。

「私は暗殺なんて、もうこの世の中にある事ぢやないと思ひましたわ。」とみのるは言つた。

「さうですね。一寸さういふ風に考へられますね。併しかういふ事件は、非常に人間の生活を生々させますね。その善悪は別問題として。」

その時女中がそこへ這入つて来て、病人がみのるを呼んでゐるからといふ意味を傳へた。そこでみのるは其部屋を出て行つた。

「お婆さんがお呼びになつてゐるつて、それぢやお婆さんはまだ病氣がよくないんですか。」

享造は、みのるの出で行つたあとで、かうまさ子に訊ねた。

「えゝ、ひと頃ずつと良くなつたんですが、昨日父が拘引されるとそのあとで家宅搜索の人が参り

ましてね、その人達が歸るとすぐ卒倒致しました。」

「それは大變ですね。そして病氣は何だったのです。」

「醫者はまだはつきり病名を言ひませんが、兎も角も心臓がひどく弱つてゐるさうです。尤もお婆さんは以前から心臓に持病を持つてゐるのでございますよ。」

「さうですか。心臓が悪いんぢや、驚いたりなんかしちやよく無いでせう。」

「え、驚くのは一番いけないですつて。ところがその一番いけない事があつたものですから、一度癒りかけたのがぐつと悪くなつたんでございますよ。」

享造は心から氣の毒さうにまさ子の顔を眺めてゐた。享造のさういふ態度は珍らしい事であつた。彼は人にあへば、いつもその人に迫るやうな態度で話しをした。彼はさういふ事を意識してゐる事もあつた。また意識しない事もあつた。そのいづれである場合であつても、彼は人と話しをする場合に、その人と争ふやうな態度でなければ話しをする事が出来なかつた。まさ子は享造に初めてあつた時からそれに氣がついた。そして其感じはだん／＼強くなつて行つた。彼女は享造にあつて話しをすると、いつの間にか自分の胸の鼓動が昂まつてくるのを覺えた。そして全身の神経が顫へてくるやうな、脅迫されてゐるやうな、それかと言つてどこへ逃げて行く事も出来ないやうな心持を

覺えた。併しさういふ氣持は今全然どこへか行つてしまつた。そしてその代りに、そこに落ちつた、同情の深さうな、力もあり、頼みにもなりさうな享造を見た。

まさ子の心は不思議な心持に満たされてゐた。彼女の前には新らしい戀人が坐つてゐた。その幾日か前に彼女の手をとつて、彼女を新らしい藝術品に彫刻すべく、彼女の魂に新らしい生命を吹き込むべく、彼女を生きた人間に仕あげるべく約束したところの——勇ましい、熱心な、そして深い自信を持つてゐるピグマリオンが坐つてゐた。併し彼女の心の中には、それまで彼女の愛と信念とを寄せてゐたものがなくなつてゐた。それは言ふまでもなく彼女の父であつた。その父は、今は遠く彼女から取り去られてしまつた。それが爲に彼女は、晴々した顔と、軽い心と、生々とした聲を以て、彼女の新しい戀人に對することが出来なかつた。

併し享造はそんな事を少しも氣にしてゐないふうであつた。そしてそれまで長い間親しく交際してゐたやうな態度で言つた。

「そしてお父さんの方へは、もう差入物やなんかの手續きをすましたんですか。」

「いゝえ、まだ何も致しませんの。昨日から轉手古舞をしてるばかりで。」

「こんなに澤山人がゐて？」と享造はげんさうに言つた。

「ええ。」

「そりやいけませんね。それぢや僕が行きませう。これからすぐにでも。」

「あなたにそんな事をお願いしてもいゝでせうか。」

「かまひませんとも。」

さう答へて、享造はすぐにそこで仕度をした。まこ子は深い感謝の心を以て享造の顔を見た。そして享造が彼女の家を出て行くのを見送つた。

一一一

玉蟲謙介が福井家を訪づれたのは享造が福井家を見舞つたと同じ日の午後であつた。彼はそのこの玄關で、澤山の受附係りの人を見て、それから奥の方も二階の方も取込んでゐる様子を見て、そのままそこから引き返さうかと思つた。併しまさ子やみのるの事を思つて——その人達が皆女であることを思つて、せめて慰めの言葉でもかけてから歸らうと思ひなほした。

「まあ玉蟲さん、どうぞ……。」

さう言つて、そこへあらはれたのは、疲れたやうな顔をしたみのるであつた。

「お邪魔ぢやありませんか。」と玉蟲は言つた。

「いゝえ、少しも。」みのるはさう言ひながら、玉蟲を自分の居間の方へ導いた。

その部屋は玉蟲にとつては珍しい物ばかり並んでゐる部屋であつた。勿論玉蟲はそこへ導かれたのは初めてであつた。そこには黒い革で張つてあるヴァイオリン、ケースがあつた。そのわきには袋に這入つた琴があつた。小さなセツションふうの本箱、二つ並んでゐる机、その机の上の寫眞ばさみ、さういふ風なものが、すべて女ものらしく、小さく、優しく出来てゐて、さういふ物を

見た事のない玉蟲には、何となく珍らしく感ぜられた。

「こんなところで失禮いたします。」みのは座についてからさう言つて挨拶した。

「いえ、どうしまして。」と玉蟲は言つた。「何だか取り込んでるやうですが、大へんでせう。」

「えゝゝ、ごたくしてゐまして、本當にもう閉口しましたわ。」

みのは肩の間に浅い皺を寄せて言つた。

「随分だしぬけでびつくりしましたが、本當にとんだ事でしたわ。」

「本當にとんでもない事をしてくれました、世間に對して申譯がございません。」

「福井さんは何等かの信念があつてやつた事でせうからまあいゝが、あなた方はどんなにか驚いたこととせう。」

「えゝゝ、そりやびつくり致しましたわ。おかげで老婆さんは病氣をぶりかへしてしまひました。」

「老婆さんは前から病氣だったんですか。」と玉蟲は訊ねた。

「こゝ一週間ほど前から、併し近頃ずつとよくなつてゐたんでございますよ。そこへだしぬけに今度の事が起つたものですから、そりやもうびつくりして了ひまして、それから急に容態が變つてし

まひました。」

「さうですか、そりやいけませんね。それで看護婦でもついてゐるんですか。」

「看護婦は發病當時からついて居りますの。可なり熟練してゐるやうですけど。何しろ病氣が心臓の方なものですから、どうしようもなくて困つてゐますわ。」

「何にしてもそりや大變ですね。」

と玉蟲は言つた。さういふより外に別に適當な慰めの言葉を見つける事が出来なかつた。

「まあちゃんは香氣だから、かういふ時はようござんすけど。」と暫く経つてからみのは言ひ出した。「私はいろんな事が心配になつてたまりませんわ。そりや氣にかゝる事はかりなんですもの。」

玉蟲はみのはの言葉の意味を解する事が出来なかつた。そこで黙つてみのはの顔を見てゐた。

「それに叔父があゝいふ放任主義者ですから。」とみのは附け加へた。

玉蟲はみのはのこの言葉をも解する事が出来なかつた。併しみのはの顔には如何にも心配さうな色が浮んでゐた。その心配は自分の事のためであるか、一家のためであるかは別問題として、兎に角彼女の顔には、心配と疲れとが一緒になつた色が漂うてゐた。

さういふ話題に就ては、玉蟲は如何なる應答をなしてよいかを知らなかつた。彼は黙つてみのは

の言ふところをきき、黙つてみよるの様子を眺めてゐるより外に仕方が無かつた。みよるの言ふところによると、叔父の英之輔は、日常生活の上に極めて投げやりの人であつた。みよるやまさ子の生活に多くの干渉を加へないかはりに、自分の生活にもふしだらであつて、一家の主腦者としての責任を果さうといふやうな考へを持つてゐなかつた。みよるの觀察するところによれば、叔父は貯蓄といふやうな心懸けを持つてゐなかつた。それが爲にもし英之輔に萬一の事があれば、家族の者はその月から生活に困るやうになる筈であつた。それが事實の上に来た。爆弾事件といふやうな事件の善悪は別として、苟くもさういふたいそれた事を計畫する程の人は、平生からさういふ事を行つた後の家族がどうなるかを考へて置かねばならぬ筈である。然るに英之輔は全くさういふ事を考へて置かなかつた。尤もその事件が暴露して、叔父が拘引されたのはまだ昨日の事であるから、叔父が別に家族の爲にどういふ計畫をして置かないものでもないが、従來の英之輔のやり口を知つてゐるみよるとつては、到底さういふ事は豫期されないことであつた。そこで結局家族の者は、みよるの見るところによれば、遠からぬ中にちり／＼に分散しなければならなかつた。それだけでも非常な出来事である。然るに、その上に、みよるとまさ子は——殊にみよるは、折も折、さういふ重大な折に、軽からぬ病氣になつた祖母を介抱しなければならぬ。それを思ふと前途が暗くなる。

自分はどうしたらよいか途方にくれてしまふ。——これがみよるの言ふ大體の意見であつた。

「それですのに、まあちゃんはまだで平氣なもので、本當に困つたやうな顔をしたのは昨日だけなんですよ。」みよるは訴へるやうな顔をして言つた。

玉蟲はみよるの言葉を全部信する事は出来なかつた。その或る部分、例へば福井の主人の生活法に對する觀察などには、多少當つてゐる點もあるやうに思はれるが、それとても單に表面的の見解に過ぎぬやうに思はれる節もあつた。それがまさ子の事になると一層信じられなかつた。まさ子は言ふまでもなく福井の實子であつた。その唯一の實子が、みよるのいふやうに、その父の拘引にあつて、それを何とも思はないでゐられる筈はなかつた。もし假にまさ子にさういふやうに見える點があるとするれば、そこには別に何等かの原因が無ければならなかつた。何となれば、玉蟲には、まさ子がさういふみよるの言ふやうな女で無いと思はれる心證があつたから。

「併しまさ子さんは、以前からかういふ事が起りやしないかと思つて心配してたんぢやないのですか。」と玉蟲は言つた。

「どうして？」

「けれども、まさ子さんがそれらしい口吻をもらした事がありますから。」

「いつそんな事がありましたか？」

「去年の事ですね。あれは秋だったでせうね、僕の處へ見えた時に不思議な事を言つたが、今から思ふと、まさ子さんはあの頃から今度の事を心配してゐたんぢやないかと思ひますよ。」

「まあ……」とみのるは呆れたやうな聲で言つた。「まあちゃんはあの頃あなたの處へお伺ひした事があるんですか、そしてその時どんな事を言ひましたか？」

「別にこれと言つて纏つた事を言つたわけぢやありませんがね。一寸それらしい暗示が——今考へて見ての事ですが、ありました。」

「そんならさうと私にでも相談してくれればよかつたに。」みのるは半ば獨り言のやうに言つた。

「さあ、それまで明瞭にその事實を突きとめてゐたわけぢや無いだらうと思ひますがね。」

「けれども私には信ぜられませんわ。」とみのるは不意にはつきりした聲で言つた。「まあちゃんが前からさういふ事に氣が付いてゐるなんて、そりや近頃になつてから一寸そんな風な事を言ひましたけれど、それはあの事が新聞に出てからの後でございますわ。」

さう言つて、みのるは頻にまさ子がさういふ微細の事に氣の付く人で無い事を説明した。みのるによれば、まさ子はもつと自己中心主義者で、一寸見ると子供のやうであるが、一方には自分の事

ばかり思つてゐるやうなところがあつて、それが爲に自分に關係の無い事には觀察の眼を向けるやうな人では無かつた。況んや父親のさうした計畫などに疑ひを挿むやうな人では無かつた。

「現に今日だつてさうですもの。本多さんが見舞に見えてからはすつと機嫌がなほつてしまつて、お婆さんの病氣の事などまるで忘れたやうになつてしまひましたわ。」

「本多さんて、あの繪を書く本多君ですか。」と玉蟲は言つた。

「え、あの人ですわ。まあちゃんは近頃本多さんて言へばまるで夢中ですわ。」

玉蟲はみのるの言葉に少からず驚かされた。併しその言葉の中には、何かしら玉蟲に默會する事の出来るものがあつた。みのるの言葉が正しいか、正しくないかは別問題として、またみのるの言葉に必ずしも信するわけでは無くても、何となく玉蟲には、みのるのその言葉に種の暗示を含んでゐるやうな氣持がした。

「本多君は折々訪ねてくるんですか。」

「いゝえ、滅多に來やしませんわ。けれども私は何かをかしいところがあると思ひますわ、あの二人に。」とみのるは言つた。

「をかしいところといふのは變ですね。」さう言つて、玉蟲は軽く笑つた。

「そんな事はどうでもようござんすが」とやがてみるは言つた。「かういふ時に、そんな事ばかり思つてゐて、うちの事を眞面目に考へないやうぢや困りますわ。」

みるのまさ子攻撃はだん／＼烈しくなつて行つた。玉蟲にはそれがどういふわけであるか解らなかつた。併し彼はさういふ事をきく事を好まなかつた。たゞみるのいふまさ子と本多享造との關係——それがどういふ點まで行つてゐるかは不明として、少くもみるの言葉にはさういふ關係が暗示してある——その暗示が玉蟲の興味を惹いた。言ふまでもなく彼がさういふ事に興味を惹かれたのは、一つは鳥羽の事があつたからであつた。鳥羽のまさ子に對する心持——その眞面目な、生一本な、そして單純な心持を思ふにつけても、享造の臆面もない態度が眼に浮んで來て、その人がまさ子に對してどういふ態度に出てゐるかといふ事が容易に玉蟲の想像に浮ぶのであつた。

「まさ子さんは、今うちに居られないんですか。」と玉蟲は言つた。

「いゝえ居りますよ。私と交替して、さつきから仕方なしにお婆さんのところへ行つてますわ。」

とみるは答へた。その仕方なしといふ言葉が如何にも強ひて使つたやうに玉蟲の耳に聽えた。「何にしても大變ですね。まあ今のところお婆さんに氣をつけるより外に仕方が無いでせう。もし僕で出来るやうな事があれば何なりとお手傳ひ致しますよ。」

玉蟲の言葉はみるの硬くなつた、そしていら／＼した心持を和らげるに少からぬ効果があつた。彼女の態度はそれから急に變つて來た。そして彼女の言葉は幾らか靜かになつた。彼女はそれから玉蟲に祖母の病氣になつた日の事を話した。その日はまさ子が一日外出してゐて、祖母の卒倒した時には、家にはみるのと女中しかゐなかつた事や、平生家庭醫學書のやうなもので應急手當といふやうな事は讀んでゐるが、醫者のかけつけるまではどうしてよいか知らなかつたといふ事や、その日まさ子が暗くなつてから歸つて來たといふ事や、その顔が恐ろしい程蒼ざめてゐたといふ事や、何か話しかけても、言葉を左右にして、その日の彼女の行動をはつきり語らなかつたといふ事や、それから祖母はずつと寝つゞけであるといふやうな事を話した。

それから彼女は叔父の拘引された時の事を話した。その朝の不思議な來訪者に、みるがどんなに驚いたかといふ事、その來訪者を叔父は恰も友達でもあるかのやうに待遇したといふ事、併しさう云ふ嚴しい職業にあるにもかゝはらず、其の來訪者等の態度は割合に親切であつたといふ事、それからその人達が出て行くと、入れ違ひに不思議な紳士の一行が這入つて來たといふ事、その紳士等の態度を祖母が直覺したといふ事、さういふ彼女にとつて、初めての、そして驚くべき經驗をみるは一つも漏すまいとして玉蟲に話した。

玉蟲はそれを聴く事を途中で切りあげる事が出来なかつた。そこで已むを得ずにそれをきいてゐるうちに、次第にその或る部分に興味を覚えて來た。元來玉蟲はさういふ事件を、人間生活の上に起る一事象として、例へば流れて已まぬ河の上に浮ぶ一つの泡沫のやうに見てゐたかつた。彼にとつては歴史上の如何なる大事件も大事件ではなかつた。況んや歴史が詩から散文に移つてしまつた今日、彼の眼の前に生起する幾多の事件は、恰も沸騰する牛乳の一つ一つの泡のやうなものに過ぎなかつた。〇——伯の暗殺といふ事件が起つた時も、彼は何人よりも少ししかそれに動かされなかつた。それからまた其暗殺の主謀者が福井であるといふ新聞記事を見ても、玉蟲は一寸意外な感じを受けたのみで、深くはそれから動かされなかつた。

併し彼はみのろの話を書いた時に、矢張福井といふ人は違つたところのある人だと思つた。さういふ場合に處して、さういふ落ちついた態度をとるといふ事は、何と言つても一種の修養のある人でなければ出来ない事であつた。勿論玉蟲から見れば、福井はその事件に深い關係を持つてゐた。そしてその計畫が成功してもしなくても、それに關係した者がどうなるかといふ事は大體解つてゐた。その事が福井の腹のなかにはよく這入つてゐた。それが爲に、みのろの所謂不思議な訪問者が來た時は、福井の主人は十分に其用向きを知つてゐたのであつた。それがために福井は平然として

その人達に會つた。そして平然としてその人達と一緒に外出した。恰も外出したやうに行くべき處へ伴はれて行つた。その態度が玉蟲には珍らしかつた。さういふ事は例へば維新の志士の逸話といふやうなものに幾度か聴いた事ではあるが、それが彼の知つてゐる現代の人によつて行はれただけに生きた珍らしい事實として彼の眼に映つた。(兎に角變つた人だ。)と玉蟲は思つた。さう思ひながら、みのろの言ふところを聴いてゐた。

玄關と二階の方では相變らずごとくしてゐた。福井家のために何を相談してゐるのか、何を計畫してゐるのか、折々玄關から二階の方へ上つて行く人の足音、二階から下へおりてくる足音、それらのけはひが玉蟲とみのろの話してゐる部屋まできこえてきた。或る者は茶の間の方へ湯をとりに行つた。見舞の客も、玉蟲がそこに話してゐる間に一人二人見えた様子であつた。併しみのろはそれらのものと全く關係の無いやうな顔をしてゐた。そして其部屋から立たうともしなかつた(あの人達はあの人達私は私)といふやうな色が彼女の顔にあつた。それのみでなく、二階や玄關にあつてそこにゐる人達が動くやうな氣合がすると、無禮なる闖入者として、その人達を憤るやうな色が彼女の顔にあらはれた。それと同時に、一方には何となく玉蟲に頼るやうな様子があつた。

「かういふ時になると、親のないものは本當に困りますわ。」みのろは長い話しの後に、かう言つて、

玉蟲の顔を見た。

三三二

併し玉蟲はそれを何の意味とも解する事が出来なかつた。彼はそれまで福井の事を考へてゐたのであつた。福井の拘引される時の立派な態度、その少しも悪びれた所のない態度、それから家を離れる時も少しも家庭の事などを氣にかけないやうな様子——それらの物は古い傳説的道德として玉蟲の眼には映らなかつた。全く福井といふ一種の人格から出た行動として考へられた。それらの考へは、當然玉蟲に、彼が初めて知つた頃の福井その人の印象を思ひ起させた。それが爲に——さういふ考へに打ちひたつてゐたので、みのるの言葉は玉蟲には何の事かよく解らなかつた。

「……」玉蟲は黙つてみのるの顔を見た。

「若しもこの家が解散とでもいふ事になれば、私なんかさし當り行く處がございませぬわ。」

みのるは、相手が自分の言葉を解してゐるか、解して居ないかにかまはず、かう言つた。

「どうしてそんな事になるでせう。」と玉蟲は言つた。

「さうなるときまつたわけぢやありませんけど、さうならないとも限りませぬわ。何しろ叔父がああいふ人ですから、平生少しも先きの事など考へて置きませんもの……そこで若しさういふ事になるとすれば、さしあたりどうする事も出来ないのは私ですわ。」

「若しそんな事があるとすれば、併しまさ子さんも同じぢやありませんか。」

「まあちゃんはどうござんすわ、まあちゃんはちゃんと行くところがあるから。」とみのるは言つた。

「あなたどつてそこへ行つたらいゝでせう。」と玉蟲は無難作に言つた。

「ところが私には行けませんの、そこへは。」みのるはその頬に微かな笑ひを浮べながら言つた。

「はゝあ、さういふ親戚があるんですか。」

「親戚ぢやございませんの。」

「……………」

「お解りになりませんか、まあちゃんの行くところ。」みのるは同じやうな微笑をつゞけながら言つた。

「どうも解りませぬね。」

その時みのるは不意に、それまでの話と關係の無いやうなことを言つた。

「あなたの入らつしやるすこし前に、けさの事ですけど、本多さんが入らつしやいましたわ。」

玉蟲はその事を知つてゐた。併しみのるがなぜそんな事を改めて言ひ出したか、その意味を解し

三三三

得ない程玉蟲の頭は鈍くは無かつた。併し彼はいつ迄もさういふ問題にかゝはつてゐたくなかつた。そこで話をいゝ加減に切りあげて、まさ子と祖母にはみのるからよろしく傳へてくれと頼んで、そのまゝ靜かに福井家の門を出た。

二三三

驚ろきの日につゞいて來た騒がしい一日も過ぎて行つた。そのざわ／＼した潮騒のやうなものが引いて行くと、今度は何とも云へない佗しい日が福井家に來た。

何の音もしない落雷——それは福井家の主人を失つた日のまさ子やみのるの感じであつた。何んの豫告もなしに、何の前ぶれもなしに——たとひまさ子は或る程度までそれを豫想してゐたとは言へ——だしぬけに大きな雷が落ちて來たので、まさ子やみのるはそれを深く驚く暇さへなかつた。そこへぞろ／＼と澤山の人がやつて來た。さうしてまさ子やみのるの驚きをその方へ連れて行つた。それが爲にまさ子やみのるは、その一日二日は、しみ／＼と驚いてゐるひまもなかつた。さういふ一日二日の後にやつて來た靜かな日、それは氣のぬけたやうな、寂しいやうな、捕へどころの無い不思議な日であつた。

まさ子もみのるも何をしたらよいのか知らなかつた。また何事も手につかなかつた。二人は折々顔を見合せた。併し二人は口をきく氣になれなかつた。二人の間には話題がどこへか逃げてしまつた。否二人の間ばかりでは無かつた。二人は女中や看護婦ともあまり口をきかなかつた。

朝起きて見て先づ感ぜられる事は、一家の中心が無くなったといふ事であつた。顔を洗つて、齒楊子を使つて、それから髪の手入れをして、その次に朝の挨拶をすべき人は何處へか行つてしまつた。みのもとまさ子は二人でさし向かひで朝飯を食べなければならなかつた。二人は黙つて朝飲を食べた。二人には何を食べてゐるのか其味もよく分らなかつた。

これから先、これ迄と同じ生活をつゞけて行く事が出来るかどうか——多分それは出来ないだらうとは、まさ子もみのも心ひそかに考へてゐることであつた。併し二人はそれを口に出しては言はなかつた。それだけ二人の心には不安があつた。二人は落ちついて新聞を読む事も出来なかつた。二人は別々に二階へ上つて見た。二人はまたぼんやり縁側から庭を眺めてみた。二人は急に何もする事が無くなつたやうな氣持がした。

未決監にゐる英之輔への差入れは、眞先にそれに氣が付いてくれた享造が取計らつてくれた外に兎も角も春日貞太郎がそれを引きついで、いつまでか不自由はさせないといふ事になつた。あとに残つたものゝ生活に就ては、彼等はまだ何も決定してはくれなかつた。それは或は彼等によつて決定さるべき事ではなかつたかも知れなかつた。いづれにしても、まさ子とみのもるはそのまま従來の生活を繰返すより外に方法が無かつた。そして靜かに祖母の恢復を待つべきであつた。

ところが祖母の病氣はだん／＼思はしくない方へ向つて行く様子であつた。まさ子もみのも代る／＼祖母の病室へ行つた。そして何かと看護婦の手だすけをする事にした。併し祖母は驚く程靜かな病人であつた。彼女は殆ど口をきかなかつた。そしていつも眼を閉ぢて眠つてゐた。眠つてゐない時でも眼を閉ぢてゐた。それが爲にその病氣がどういふ經過をとつてゐるのか一寸見たところでは分らなかつた。併しその病症は看護婦の熱度表にあらはれてゐた。赤い鉛筆で記したその表の小さな山形は、次第々々に少しづゝ高まつて行つた。

「お嬢さま。」

まさ子が自分の部屋の窓から庭の植込みを眺めてゐる時のことであつた。看護婦がかう言ひながらそこへ這入つて來た。

「どうもお婆さんの容態が面白くないのでございますよ。」

まさ子はびつくりして振り返つた。さうしてまじ／＼と看護婦の顔を見た。

「お婆さんがどうかして？」

「いゝえ、今どうしたといふわけぢやございませんけど、何んだか今朝からの御様子が思はしくないのでございますよ。」

「何か變つた徴候でもあつて？」まさ子は幾らか急き込むやうな調子で言つた。

「少し結滞がございますの。尤もブルスは昨日あたりから餘程微弱になつて居りますんですが。看護婦は眞面目な蒼白い顔をして言つた。

「まあさう、」とまさ子は言つた。「それは危険な徴候ですか。」

「今すぐ危険といふ事もございますまいが、兎に角よい方の徴候ではございません。」

「そりや困つたわね。それでどうしたらいいでせう。何か心臓を強くするやうな薬は無いでせうか。」

「今まで差しあげてゐる薬は皆強心劑なんでございますが……。」

「そんならもう外に手當ての方法は無いでせうか。」

「兎に角先生に来て頂くやうにしたいと思ひますが。」と看護婦は言つた。

「そんならすぐ電話をかけませうよ。」さう言つてまさ子はすぐその部屋を出た。

まさ子は急に胸を引きしめられるやうな氣持がした。何かしら寒いやうな物が心臓の上へ被ひかかつて来たやうであつた。彼女は急いで電話口へかけつけた。併し手がふるへてすぐさま受話機を取る事が出来なかつた。その上、眼の前にある電話表の中に書いてある筈であるが、一目見ただけで醫者の家の電話番号を見つける事が出来なかつた。彼女はやがてそれを見つけた。

「もし〜」とまさ子は言つた。交換手のすぐそれに答へる聲ははつきり彼女の耳に響いて来た。併し彼女はすぐそこで番號を言ふ事が出来なかつた。

長い時間を費やして——さう彼女には思はれた——やがてまさ子は醫者の家に電話をかけ終つた。それから急いで祖母の病室へ行つて見た。祖母はいつものやうに靜かに蒲團の上に横になつてゐた。そこにはみのるは見えなかつた。まさ子は看護婦の顔を見て、それから靜かに祖母の方へ近よつて行つた。

「お婆さん、」とまさ子は低い聲で言つた。「お加減は如何ですか。」

病人は返辭をしなかつた。その呼吸はきよとれない程小さく、そして忙しかつた。まさ子はそつと蒲團の中へ手をさし入れて見た。そして病人の手をさぐつて、その手首に自分の指を觸れて見た。

「あゝ——」低くうめくやうに言つて、不意に病人は眼を見開いた。

「お婆さん、お加減は如何ですか。」と再びまさ子は言つた。

「あゝまさ子か。」と病人はぼんやりした眼付をして言つた。「今夢を見てゐた所だつたよ。」

「どんな夢を御覽になりました？」

病人はそれには答へなかつた。そして逃げて行つた夢のあとでも追ふやうに、ぼんやりと其眼を天井の方へ向けてゐた。

「胸がお苦しかございせんか。」とまさ子は言った。

「あゝ苦しくないよ。」さう答へて、病人はまた眼をとぢた。

「お婆さん、足でもさすりませうか。」

病人が餘りに静かにしてゐるので、まさ子は却つて壓しつけられるやうな不安を感じながら、かう言つて祖母の後の方へ廻つた。

「……………」

病人は何とも返辭をしなかつた。そしてとろ／＼と、恰も眠つたかのやうに、靜かに、微かな呼吸をつゞけてゐた。

まさ子は黙つて再び祖母の蒲團の中へ手をさし入れた。そして祖母の足をさぐりあてた。それは年老いて痩せ細つた小さな足であつた。そこには弱い、微かな、人の肌らしいぬくもりがあつた。そのぬくもりは初めにまさ子をぎよつとさせた。何となればまさ子はそれをだん／＼祖母のからだから冷えて來た爲であると思つたからである。併しその時まさ子は、祖母が折々手足が冷えると言つ

てゐた言葉を思ひ出した。その微かな弱いぬくもりも、矢張さういふ老年のせゐであらうかと思つた。それにしても、まさ子にはその微かな温かさが不思議であつた。彼女はさういふなまぬるい温かさを自分のからだだから感じたことは無かつた。どんなに寒い時でも、彼女は床の中へ這入ると間もなく、全身がぼか／＼とあた／＼まつてくるのを感じた。外には霜が降つて、庭の八つ手がぐつたり頭を垂れてゐるやうな朝でも、まさ子は自分の床の中に眼をさまして、全身があた／＼かに、寧ろ足のさきで蒲團の中の冷いところを探しあるくやうな日が常であつた。さういふ温かさに馴れてゐるので、彼女は初めて冷たい——さうまさ子には感ぜられた——祖母のからだに觸れた時に、不思議な、そして珍らしい現象でも發見したやうな驚きに撲られた。

彼女は靜かに祖母の足をなでおろした。その細い、小さな皺の多い足の肌は、彼女のつや／＼した軟らかい手に、こまかい鱗でもあるやうにさら／＼觸れた。(どうもこれはをかしい。)とまさ子は思つた。それは生きてゐる人の肌さはりでは無かつた。勿論彼女はさういふ觸感から、それが生きてゐるか、死んでゐるかといふやうな、臨床家のやうな經驗は持つてゐなかつたが、併し直覺的に、それが自然に生を主張する者の持つてゐる肌さはりでは無いと思つた。

彼女は肩ごしに、後から祖母の顔を覗いて見た。そこに見たくない苦悶の蔭を豫想しながら。祖

母の顔はよく見えなかつた。併しその頬のこけた有様と、その頬骨の著しく高くなつてゐる様子とが、眞直に正面から見た時よりも眼にたつて見えた。忌はしい豫想を消さうと思つても、まさ子はそれを消す事が出来なかつた。

「そこにゐるのは、誰だい。」

その時、病人は不意にかう言ひ出した。相變らずその顔は初めに向いた方へ向けたまゝ。

「私ですよ、まさ子ですよ。」とまさ子は答へた。

「あゝ、まさ子かい。そしてみのはどうしました。」

「みのは多分お二階でせう。呼びませうか。」

「二階で何をしてゐるのだね、またあの家宅搜索の奴どもでも来たのかね。」

「家宅搜索？」まさ子はぎよつとして、祖母の足をさすつてゐる手を留めた。

「何だえ。まだあの時から歸らないのだつて？」祖母はぼつかりと眼を見開いて言つた。

「お婆さん、」とまさ子は少しくあわてゝ言つた。「お婆さんはみのはを呼んでるんでせう。」

「何、みのはがどうかしましたか。」

祖母はまじ／＼として言つた。その顔はいつものしつかりした祖母の顔であつた。

祖母が突然妙なことを言ひ出したので、まさ子は祖母の頭の働きが狂つて来たのでは無いかと思つた。さう思つて彼女はびつくりした。併し祖母はやがてはつきりした顔つきをして、却つてまさ子のあわてゝゐる様子をいぶかるかのやうなので、まさ子は自分の考へを思ひ過ぎではあるまいかと思つた。(お婆さんは今まで眠つてゐたのだ。それが急に眼をさましたので、その醒めきらない頭へ何かしら幻影が映つたに相違ない。家宅搜索だなんて、矢張あの時の事が強く頭に印象されてゐるに相違ない。それが爲にだしぬけにあんな事を言ひ出したのだ。)さうまさ子は考へて見た。併しそれだけでは彼女は不安であつた。もつと間違の無いところを——祖母が果して正氣であるか否かをはつきり知りたかつた。

「お婆さん。」とまさ子は言つた。そして其顔をじつと覗いて見た。「どこかお苦しいところはございませんか。胸の氷をとりかへてさし上げませうか。」

病人は黙つてしげ／＼とまさ子の顔を見つめてゐた。その様子はどこかで見た事はあるが、その人が誰であるかを思ひ出せない時に人のする表情であつた。

「はて、お前さんはどなたでしたかね。」

かう祖母の顔は言ひさうであつた。併し彼女はさうは言はなかつた。その代りに極めて空虚な聲

で次のやうに言つた。

「胸のところが少し苦しいから、暫らくそこの氷嚢を取つてみておくれ。」

まさ子は先刻から同じ部屋にゐる看護婦の顔を顧みた。そして低い聲で言つた。

「そんなことを仕てもいゝでせうか。」

「よくはございませんが……」

若しそれをお取りになれば、心臓が急に弱つて参りますよ、と言ひさうな顔をして、看護婦はまさ子の顔に眼で答へた。

「いゝえ、かまはないから、少しの間取つてみておくれ。どうもこれでは苦しくてたまらない。」

病人はさう言つて、夜具の中でその手をもがく動かした。まさ子はどうしようかと思つて再び看護婦の顔を見た。

「さあ〜早く取つておくれ。」と病人はまた言ひ出した。「さうしないと警察へ連れて行かれるからね。」

「おや！」とまさ子は思つた。「お婆さん、どうかありませんか。」

「どうかありませんかかつて、英之輔はまだ帰りませんか、こんなに遅くなつて、毎晩々々何の相談があるでせうね。」

「お婆さん、お婆さん。」まさ子は稍々高い聲で呼んだ。

「そんなに呼んだつてすぐ歸れやしませんよ。今向ふの方からあんな奇麗な自動車が迎へにくるんですものね……夜會があるつてことだが、矢張西洋音楽ばかりかねえ……」

病人はその眼をあげて、じつと天井板を見つめたまゝ、美しい幻影でも見てゐるやうな事を言つた。

「お婆さん、しつかりなさいよお婆さん、まさ子がこゝにゐますよ。」

さう言ひながら、まさ子は祖母の鼻さきに自分の顔を持つて行つた。

「お前はまさ子。」祖母はげんさんさうな顔をして言つた。「さうして英之輔は？」

「お父さんはこなひだからお留守ぢやありませんか。」

とまさ子は困つたやうな顔をして言つた。

「ではまたあの女の處へ行つてゐるのかえ。」

まさ子は苦い笑ひが自分の頬にのぼるのを覺えた。併しそれと同時に一大事が自分の眼の前に迫つて來た事を感じた。

まさ子はそれまで人間の臨終といふものを見た事が無かつた。彼女が母を失つたのはごく幼い時であつたので、母が死んだといふ事は知つてゐたが、それが悲痛を極めた人生の事實として彼女の眼に映らなかつた。まして彼女は母の臨終を見てゐなかつた。母の遺骸は彼女の眼には安らかに眠つてゐる人と見えた。その静かな眠りに入つてゐる人を、多くの人が来て、厳やかな儀式と、しかつめらしい讀經とで以て、四角な細長い木の箱の中に入れて、そして何處へか彼女の知らないところへ運んで行つてしまつた。それぎり彼女の母は彼女の前へ歸つてこなかつた。併しまさはそれを悲しい事とは思はなかつた。それほど彼女は幼かつた。それから後の彼女はたゞ生のみを見て來た。若い生命の生長のみを見て來た。彼女は自分自身にそれを見た、また彼女の周圍にそれを見た。すべてのものが彼女にとつては生々としてゐた。すべてのものが大きくなり、生ひ育つて行つた。それがために、まさ子は祖母の病氣の急に變化して來たらしい様子を見て、それまでに経験したことの無い狼狽を覺えた。その狼狽と、驚きと、そしてそれに伴ふ恐れとは、急にそれを押し鎮める事が出来なかつた。

さういふ事に經驗のあるらしい看護婦は、靜かに病人のそばへ進み寄つて、その白い看護服の胸から小さな袂時計を取り出し、そして一方の手で病人の瘦せ細つた手首を握つて見た。

「少し結滞がひどくなつたやうでございますよ。」

看護婦はさう言つてまさ子の顔を見た。その顔には、まさ子の眼から見ると、もう臨終も間もなくでございますよ、と書いてあつた。

「注射か何かしなくてもよろしいでせうか。」まさ子は看護婦の顔を見返しながら言つた。

「左様でございますね。私が致してもよろしいございますが、もう先生がお見えになつてよろしい頃でございますね。」

まさ子は看護婦のその言葉で、急にそれまで忘れてゐた醫者の事を思ひ出した。さう言へばもうその醫者は彼女の家を訪づれてよい頃であつた。そこで彼女はまた電話室の方へ驅けて行つた。

受話機のマイクロオンがまさ子に傳へた言葉は、醫者はもうずつと前に彼女の家を見舞ふべくその家を出たといふ事であつた。そこでまさ子は、それまで二階にゐたみのるを呼びおろし、再び以前の病室へとつて返した。

病人はもうその眼を見開かなかつた。そして昏々と深い眠りに落ちてゐた。その落ち窪んだ眼窩の中の球は、氣味の悪いやうにそこだけ眼瞼の上に高くなつてゐた。

「あら、どうしたんでせう。」みのるは不意に頓狂な聲を出して、病人の方へ進み寄つた。

「お婆さん、みのるさんが見えましたよ。」とまさ子は言った。

併し年寄はもう何とも返辭をしなかつた。そればかりではなく、その呼吸はいつの間にかぜいぜいと鳴つて來た。そして吸ふ息よりも吐く息の方が多いやうに見えた。

「肺水腫をお起しになつた様子でございますよ。」

看護婦は落ちついた態度でかう言ひながら、注射でもするつもりと見えて、其手籠の中からアルコールの瓶や、脱脂綿や、それからカンフォールの瓶などを取出した。

まさ子とみのるは法廷で裁判官の前へ立つた人であつた。もう辯護士の辯論はすんでしまつた。その最後の宣告をきくより外にどうする事も出来なかつた。大きな鎌をかついだ「デツス」は悠々と二人の前へ迫つて來た。

二四

退屈な、もの憂い、暗い夜が、長い間この世を被うてゐた。果はその夜のなかに烈しい暴風雨さへ起つた。併しその夜もいつの間にか明け方に近づいてゐた。そしてその暴風雨も、まだ全然已んだといふわけではないが、次第にその烈しい勢ひを失つて來た。そこにやがてあらはるべき明るい光りの影が醸されてゐた。それが僅の間に、父を失ひ、祖母を失つた後のまさ子の心の状態であつた。

長い夜——それはまさ子のそれまで生きて來た生活そのものをさして言つてもよかつた。それまでの彼女の生活はたゞ漫然と生きて來たに過ぎなかつた。意識的に彼女の生活を生命あるものとする何物もなかつた。彼女はたゞ生きて來た。彼女は比較的わがまゝに生きて來た。併しそれは彼女自身が彼女を導いて生きて來たのではなかつた。彼女の生活の上には薄い霞を曳いてあつた。彼女の心の上には、彼女自身それと氣が付かなかつたが、たゞ一色の夜の色が被ひかゝつてゐた。

併し夜のなかにはあらゆる物の種が含まれてゐた。そこには星の光がきらめいてゐた。そこには朝の光が貯へてあつた。たゞ一色の黒い張の底には、あらゆる生物が包まれ、あらゆる生命の芽が

隠されてあつた。その黒い張はやがて静かに引きしぼられて、自然に朝の光が導かれねばならぬ管であつた。

三五〇

戀と、別離と、死と、この三つの烈しい嵐に一時に攻め寄せられたまさ子は、或はその嵐のために打碎かれたかも知れなかつた。もしもその嵐が後の二つものゝみであつたなら、彼女は或はそれに押しつぶされてゐた筈であつた。併し自然はそこからばかり彼女に向つて働かなかつた。自然の力はまた彼女のうちにも忍び込んでゐた。彼女は僅の間にそれらの嵐にあつて、その烈しい力に押し伏せられるかほりに、その烈しい力を靜かに押しかへして、そして初めて眞に自分から生きねばならぬと感じ出した。

(自分の主人になつて生きて行かねばならぬ。)

とまさ子は思つた。さう思ふと同時に、彼女には、彼女の父のした事が非常に立派な事のやうに思はれて來た。さういふ仕事に對する倫理的の價值判断は別問題として、彼女の父はそれを絶対に必要の事として計畫した様子であつた。そしてそれが爲めには自分の生命はどうなつてもよいと思つてかゝつてゐたふうであつた。それが爲には彼女の父は家族の事などは考へてゐないふうであつた。

(野原の木を見る、あらしがくると倒れる木もあるし、立つてゐる木もある)

さう父は考へてゐるふうであつた。それを思ふと彼女は父の入獄を歎くのが無意味のやうに感じられて來た。(父は父の信念に向つて進んで行つたのだから)とまさ子はひとりで考へた。(私は私の信ずるところへ向つて進んで行くのが、寧ろ父のひそかに喜ぶところであるに相違ない。)さうまさ子は思ひながら、この世の中にたゞひとりとなつてしまつた自分自身の生活態度を定めなければならぬと思つた。

長い間、たゞひとり、父の計畫してゐた事を心配してゐたのが、彼女には今更のやうに莫迦莫迦しく感ぜられた。そんな事を心配して日を暮してゐるよりも、彼女はもつと自分自身の生活内容を豊富にし、人間の生活といふ事に對する意義を探究して置いた方がよかつたと思つた。

まさ子の眼の前には今や新しい地平線があらはれて來た。さうしてそこに夜あけの新しい日の光りがあらはれやうとしてゐた。彼女はその方へ向つて、ある強い力に導かれながら、そろ／＼と歩いて行かうとした。まさ子の眼にはあらゆる物が新らしく映つて來た。今まではたゞぼんやりと見過ごして來たものが——それが自然であり、人事であるを問はず、すべて彼女の眼に新らしく映り、また彼女の心に生々とその影を醗すやうになつた。

三五二

彼女は人間の營んでゐる生活といふものを心から不思議に思ふやうになつた。それと同時にそこに限りなき意味があると思ふやうになつた。彼女の隣にも人間が住んでゐた。そのまた隣りにも人間が住んでゐた。そこには男があり、そこには女があつた。そこにはまた子供があり、そこには年寄があつた。彼等は互ひに相愛した。彼等はまた互に相憎んだ。彼等は呪ひ、妬み、羨み、争ひ、そしてまた戀ひ、援け、勞り、恵んでゐた。彼等は全くひとり居る事が出来ないにもかゝらず、屢一人ですべてから離れてゐようとした。さうかと思ふと、彼等はお互ひに何の理解も無いにもかかはらず、たゞ無意味に一緒にならうとした。

併し何よりもまさ子にはつきりと氣のついた事は、人間の生活を三つに切り離して、そこに年寄の世界と、若い人の世界と、子供の世界と三つあるうちに、その真中に住む者が人間生活の中軸となつて、それが人間の生活をよくもし、悪くもして行くといふ事であつた。それは最も意味のある世界であつた。そこでは人間が最も生々としてゐた。そこでは男が本當に男であり、女が本當に女であつた。そこには戀があつた。そこには男があり女があつて、すべての人が目かくしをかけられてゐても、どんな手綱をつけられてゐても、いつの間にか他の性を目ざして進んでゐた。まさ子はさういふ世界に、さういふ人間生活の中軸を形ちづくるところの世界に、自分がその足を踏入れや

うとしてゐる事に氣がついた。そこに於て行はれてゐる現象は生きるといふ事であつた。何等かの形で、幾分でも自分をよくしようといふ事であつた。自分をそれまでよりも良く表現しようとする事であつた。そして何物かを、何等かの形ちで、自分のあとへ残さうといふ事であつた。

さういふ人間の生活が、まさ子の眼に限りなき興味をもつて映つて來た。新たに生れた者の眼には、あらゆる物が生々と新らしく思はれた。そこには生を求めて死ぬ者があつた。生を求めんが爲に死ぬものがあつた。そこには學校で教へられた單純な實踐道德では解釋する事の出来ないさまざまな現象があつた。そこには火のやうな戀の世界、破倫を破倫として責めないやうな世界があつた。そこには戀の爲に大學教授の職を抛つた人があつた。そこには新しい戀人の爲に古い愛人を捨て、顧みないやうな人があつた。まさ子はそれらのすべての現象を自分の倫理的批判の上から是認しようとは思はなかつた。併しそこに生きたさまざまな生活があるといふ事を否む事は出来なかつた。

あらゆる自然が、また彼女の眼には新らしく映つて來た。自分の家のまはりの森、その森の上を流れる雲、隣の屋根を越え、自分の家の垣根をめぐつて入り込んでくる風、それらの物がすべて今更のやうに生々と彼女の眼に、彼女の皮膚に感じられて來た。氣が付いて見ると、彼女の家の庭にも本當に新らしい生命がめぐつて來た。長い間のこた／＼で氣が付かなかつたうちに、いつの間にか

そこへ春が廻つて来てゐた。そして今まで八つ手のそばに黒く枯れてゐた海棠に、またその隣の小さな木瓜に、青い美しい若芽が萌えてゐた。まさ子はそれらの物を見て、そこへ廻つて来た春に眼のさめるやうな氣持がした。あらゆる物の芽ぐまうとする力がまさ子の周囲に満ちてゐた。青い芽を出してゐるのは、木瓜や海棠ばかりではなかつた。その庭には、それらの植木の外に、名も無い小さな草や、多年生の草花や、菊科に屬する蓬のやうな葉の草などが、もう青々とその芽や葉などを出してゐた。まさ子は短かい「時」の間に起つた多くの傷ましい變化に心を疲らした後に、突然その眼に映つて来たそれ等の青い物から、何とも言へない落ちついた慰めを覺えた。

彼女の家の周囲に多い幾つかの寺——いづれも上野寛永寺の末寺で、××院とか△△院とか、すべて院號を名乗る小さな寺々の庭では、いつの間にか白い木蓮の花が散つてしまつて、牡丹色の八重椿ももう盛りを過ぎようとしてゐた。さういふ寺の垣根に、またその横手の土手に、春はその軟らかな横顔を見せてゐた。

八つ手や椋のやうに年を越えて尙ほその葉の青さを保つてゐるものも、いつの間にか次第にその青さを黒い色にかへて、時さへくればいつでも其位置を次のものに譲らうと準備してゐた。一冬を霜と雪とに責められて、或る朝はその頭をぐつたりと垂れ、或る朝はその柄をしやつきりとさし延

べて、忍耐深く、しかも、従順に、長い時を送つて来た八つ手の葉は、これから春にあつて本當の喜びを享けたらよささうなものだと思はれるに、その春も夏も自分には關係が無いといふやうな様子をして、新たに自分のからだから芽ぐまうとするものにその位置を譲らうとしてゐた。

父の拘引に、祖母の死に、まさ子が忙しく行つたり來たりした上野公園の道ばたには、殊に動物園の裏門の附近には、高い黒い幹の梢から椋の老いた葉がひら／＼と落ちて來た。それらの葉は重くから／＼と鳴つて、春らしく乾いた道の上に散つてゐた。老いたるものは次第に散つて、新しいものにそのあとを譲らうとするかのやうに……。

まさ子は僅の間に父と祖母とを失つて、今では世の中に全く自分一人となつた。否、彼女の家には彼女のほかにいま一人みのるがあつた。彼女はみのもと二人で靜かにあとの事を處理しようと思つた。そこには勿論遠いながらも親戚の者があらはれた。また英之輔の友人であるところの二三の人々もあらはれた。さうしてまさ子や、みのるの身のふりかたをつけてくれさうな事を言つた。併しまさ子は出来るならさういふ人達にたよらずに、みのもと二人でいろ／＼相談して、それまで住んでゐた家をも片づけ、また自分達の身をもどうにか處置したいと思つた。ところがそれはさうはならなかつた。最後の瞬間に於ては、せめて二人でいろ／＼相談して、どうなりとこれからの態度

をきめたいと思つてゐたのであるが、みのはまさ子のさういふ心持を諒解しなかつた。みのは祖母が死ぬと同時に、それまでよりも一層自分自身の處置にあせり出した様子であつた。

「まあちやんは行くところがあるからいゝわ。たとひお父さんはゐないたつて。」

それはみのはが祖母の亡くなつた暫く後に言つた言葉であつた。その時まさ子は魂を失なつた祖母の蒲團の横に泣き伏してゐたのであつた。

祖母の葬式、看護婦の解雇、一週間目の墓参、東京監獄にゐる父への面會、それらの間に日と時とは飛ぶやうに去つた。みのはその間ひとり何事か奔走してゐる様子であつた。毎日着物を着かへては外出した。

まさ子は家の外に——世間に春の來たのを感じると同時に、家の内には、反對に、秋の來たことを感じた。そこに今まで繁つてゐた大きな幹は、それからその幹のそばに立つてゐた老いたる幹はいつの間にか、何處へか運び去られてしまつた。そしてそこに残つたのは、それらの幹から岐れたばかりの、まだ枝の張りかたも知らない、根の深さもあまり深くない、若い稚い樹ばかりであつた。廣い園はがらんとして空虚になつた。そしてそこには落葉ばかりがうづ高く積つてゐた。

實際、まさ子は、自分の家にゐて、さういふ落葉の園に立つてゐるやうな氣持がした。そこには

もう彼女に、無言の、そして無限の愛を注いでゐた父はゐなかつた。そこにはもう、口やかましい、みのはの最負の、それでゐてまさ子を愛さない事もない、形式ばつた事の好きな祖母はゐなかつた。家のうちは、大きな古い寺の本堂のやうに、がらんとしてしまつた、女中はぼんやりしてしまつて、仕事が手につかぬものゝやうに、一日立つたり坐つたり、家の外に出たり、往來を眺めたりして暮してゐた。何となくその邊にほこりが溜つて來た。あらゆる器具や調度は、その處を得ないやうに、或は部屋の隅に押しつけられ、或は戸棚の中に投げ入れてあつた。それらのものは、父の拘引された時と、それによつて起つた祖母の死——その葬式の時とに、澤山の人がごたごた集まつて來た、その人達によつて押しかたづけられたのであつた。それらの人達は彼女の家を自分の家のやうに取扱つた。自分の家といふよりも、寧ろ公共の建物でもあるやうに取扱つた。そして勝手な事をして、勝手にごたごたして、やがて潮の引いて行くやうに引いて行つた。それがためにそのあとはまるで嵐の後の濱邊のやうであつた。併し氣をつけて見ると、さういふ人達に荒されたのはただ彼女の家の内の見かけだけであつた。その内部の装置は、言ふまでもなく元のまゝであつた。父の居間には依然として父の愛してゐる刀がかゝつてゐた。その横の遠ひ棚には錆びた青い焼物の香爐が載つてゐた。父の好んで用ひた散歩帽子、父のいつもついてゐたステツキ、父の折々着て出

た長いマント、さういふ物は、前と同じやうに、或は控へ室の帽子かけに、或は玄關の傘立に、いつものやうにちやんと揃つてゐた。祖母の坐りつけた座蒲團や、始終そばを放さなかつた手あぶりや、さういふ物を見ても、そこにいつも手をかけてゐた事が思ひ出されて、何とも言ふ事の出来ない愛着の念が湧くのを感じた。

いつかその家を解散しなければならぬ。しかもそれは遠い事ではない——といふ事は、絶えずまさ子の頭にあつた。併しまさ子はその日のくるまで、静かにその家に残る父や祖母の愛着の記念物をそのまゝにして置きたいと思つた。祖母の葬式の世話をした人達は、せめては死んだ人達の七週間の忌日までは、その家をそのまゝにして置いた方がよいと言つた。まさ子は元よりそれに異議は無かつた。長かつたやうにも考へられ、短かつたやうにも感じられる七週間は次第に過ぎて行つた。そして家のうちは日に日に寂しく秋めいて來た。毎日餘りものを言はない人達が茶の間に集まつて、めいめい別の事を考へて、そしてうまさうにもなく朝飯や夕飯を食べた。食事が済むとみるのは毎朝忙しさに外出の仕度くをした。併しまさ子はその行く先を聴かうとも思はなかつた。彼女は折々二階の父の書齋へ上つて、そのの搖椅子に身を凭せた。そして静かに自分の行く道を考へた。

まさ子の前には長い一本の道が開けてゐた。それは明るい、緑の蔭の多い、そして日の光りのよく當つてゐる道であつた。まさ子は今ではどうしても其道を歩いて行かねばならぬと思つた。新しい人生の道——それは世間の人の言ふやうに、また學校の教師などが教へるやうに、さう凸凹してゐるやうには思はれなかつた。そこには坂があるだらう、そこには懸崖があるであらう、併しその道はたゞ長いだけであつて、眞直に、鷹揚に、たゞすん／＼歩いて行きさへすれば、別にそこに躓くものがあるらしくは考へられなかつた。またよしそこに躓くものがあるにしても、それは少しもまさ子には恐ろしいものとして考へられなかつた。(あらゆる人の通つて行く道だから。)とまさ子は考へた。(私にだつて通つて行けない筈は無。)。

まさ子の眼の前には本多享造がゐた。享造は強い戰士のやうな態度をして、何人とも闘ふ事を辭さないといふやうな様子をして、その若々しい、太い、逞しい手を彼女の方へさし出してゐた。彼女はその手を取つた。彼女はその方へ行かねばならなかつた。

まさ子はその少し前まで、まだ自分には人の戀人として、或は人の妻として、さういふ事を申し出る人の言葉を享け容れる資格は無いと思つてゐた。もつとしつかりした修養をつんで、もつと間違ひのない人生觀を定めて、それからでなければ、自分には戀をする資格も、他人の戀を受け容れ

る資格も無いと思つた。併しさういふ考へは、要するに彼女の頭で考へた考へであつた。まさ子は今ではさういふ頭で考へた理窟に従ふ必要は無いと思つた。事實彼女はもう享造の申し出を受け容れてゐた。今はたゞそれを實現する事に向つて進めばよいのであつた。

背の低い、顔の四角な、ものを言ふ時に人を壓しつけるやうな癖のある享造——初めて會つた時には、武骨な、野鄙な、田舎出の書生のやうに思つた享造——その享造が、急になつかしく、力強く、まさ子の心を惹きつけて來た。自分からビダマリオンを氣どつてゐる享造——享造が本當にビダマリオンのつもりなら、私はそれに刻まれる大理石になつてもいゝとさへまさ子は思ふやうになつた。さう思ふと同時に、享造のからだは急に大きくなつて、その腕はアトラスのやうに逞しくなつて、大きな鑿と槌とを持つて自分に迫つてくるやうにさへ感じられた。

不圖、その時まさ子の眼のまへへ、玉蟲の顔があらはれた。その靜かな、氣高いやうに見える顔、その澄んで、深い思想をたゞえてゐるやうな眼——その眼は暫くじつと彼女を見てゐる様子であつた。併しやがてその眼は、そしてその顔は霞の彼方へ消えて行つた。すると今度はそこへ思ひも寄らぬ鳥羽の顔があらはれた。そのあとへ何年か前に見た醫科大學の學生、小石川の學校の附近で見た中學生などが、つき／＼とあらはれて來た。それらの人が煙のやうに淡い行列をなして過ぎ去つ

てしまふと、今度はそこへはつきりとした享造の姿が再びあらはれて來た。

「みのるさんは、みのるさんの行く處へ行くがいゝわ、私は……」

まさ子はひとりで心の中に言つた。
彼女の頭の中には、その家を解散する日の事と、父に面會する日の事と、新らしい人生の道に上る日の事とがはつきり考へられた。彼女はそれより前に一度享造に會はねばならぬと思つた。まさ子はすぐそれを實行することに心をきめた。

地中海、M——島にて。

鳥羽健一郎様。

再三の御たより有難く拜見しました。相變らず元氣にて御勤務の由、何よりのことゝ存じます。私も例の通りの調子で、例の寺に、いつまでたつても變化の無い朝夕を送つてゐます。そして勝手な思索と、勝手な空想と、さうして勝手なブラウンスターデーに耽つてゐるから、他事ながら御放棄下さるやう願ひあげます。

M——島の風光と、S——島の港町と、それらのものを中心とする地中海の航海記とは、私に何とも言へない愉快な空想を起させました。地中海……それは私にとつて深い親愛な響を持つてゐる名前です。フェニキヤ人が初めてそこに船を浮べて航海を始めてから、歐羅巴の文明の波は初めてそこに打ちはじめました。紫の染料や、その染料にて染めた織物を持つたフェニキヤの商船が、クリートや、シチリヤの嶋人にどれ程歓迎された事だらうとは、私が初めて西洋史を習ひはじめた頃の空想です。歐羅巴の文明が地中海の波濤に端を發したといふ事は、今更言ふまでも無い事である

か、その南にはトレミー王朝の文化を造り出したエジプトを控へ、その北にはヘレーネの文明や、ローマの文明を描き出したギリシヤやイタリーを控へてゐる海に、吾々と同種族の人達が働いてゐるといふ事は、何となく肩身が広いやうに思はれます。

地中海の實景に就ては、吾々は——私は、モネの油繪の複製や、「即興詩人」の叙述などで知つてゐるばかりであるが、明るい、青い——濃藍の浪の湧き返つてゐる海とばかり思つてゐたが、矢張多にはさういふ陰鬱な天候になる事もあるのですか。それにしても、その廣い海を、母國から遠く離れて、極めて緊張した心持をもつて、何ものにか奉仕する心持をもつて、縦横に馳驅するのは愉快でせう。少しの弛みも無い態度で人生を見てゐるといふ事は、吾々の絶えず心懸けたく思ふ事であるが、實際には兎角それを實行する事が出来ない。それを君が、そこに君を攻撃してくる對者のある事を常に痛感し實現してゐることは幸福です。

君の方の司令官の言葉は大變面白いと思ひます。勿論それは確實なる根據があつての意見では無いでせう。従つてそれが當るにしても當らないにしても、全く想像から出た臆説に過ぎぬでせうが、多くの専門家——殊に軍人のなかにさういふ見方をするものゝ少い中にあつて、君の方の司令官がよし一時の感想であるにしても、さういふ見解を持つてゐるのは感心です。恐らくそれは卓見でせ

う。どれ程獨逸が強いにしても、さういふ方面から崩れるだらうとは、成程それはありさうなことです。私のやうに、戦争といふものに對して殆ど何のセンチションをも起さない生活をしてゐる者でも、その點は背かれます。

君達の艦隊に對する各國民の態度も面白く讀みました。成程フランス人が一番感謝してゐる事だせうね。こちらから見ても如何にもさうらしく思はれます。あの自由の叫びを眞先にあげた國民、あのナポレオンに従つて歐洲全土を踏みにじつて歩いた國民、世界最高の繪畫と詩とを持つてゐると信じてゐる——その國民が戦争の始まる少し前までは、その存在すらも等閑に附してゐた國の軍艦に對して、心から感謝の念を寄せるとは、何といふ悲惨な事だせう。僕はフランスを思ふ毎に、カナリヤや鶯のやうな、上品な、美しい、さうして弱々しい鳴禽を思ひ出します。さういふ上品な國民の、その誇りを棄て、一所懸命になつた様子は、何といふいぢらしい、そして何といふ氣の毒な態度だせう。

それはそれとして、人間社會に生きて行くといふこと、また世界に於て生きて行くといふことは本當にむづかしいものゝやうに見えますね。

君はイギリスに範をとつた海軍に席を置きながら、イギリスの態度を餘り好まぬといふのですか。

併しイギリスは實にうまいぢやありませんか。あれは官僚政治家の態度です。大資本を擁する商人のやり口です。一方には手なづけようとするやうな様子を示し、他方には絶大な權力を控へ、温顔の後に冷嚴の相貌を示し、じわりじわりと約束の履行を迫るところなどは、如何にもものゝわかつた官吏のやりさうな事ではありませんか。あゝいふ灰色の態度が世界にうまく生きる所以です。あゝいふ國からユーチリタリアニズムの哲學が生れるのです。あゝいふ國から神であつた人間の祖先を猿にまで引きさげる男があらはれるのです。

私は君の手紙を見て、國といふものが——一つの國と云ふものが世界に於て生きる方法といふ事を發見しました。勿論その方法といふのは、それが眞理であるといふ意味ではなくて、全く方便であるといふ意味に於てです。

私の生活に就ては、別に改めてお知らせする何ものもありません。私の思索は相變らず一つところをぐる／＼と廻つてゐます。新しい筋道を見つけたと思つて、そのあとを熱心に趁つて行くと、それは次第にくる／＼と廻轉して行つて、果はいつもの渦卷の中に陥るのが常です。私にとつては今千九百十×年が千九百十×年に變つたといふまでです。

私は相變らず例の寺の例の部屋に住んでゐます。未だに職業を求めて一人で食つて行くといふ迄

に至りません。これは併し近頃少しく私の心を責めて來ました。私は今何の職業が本當の職業かなどは思つてゐません。ペンを執つて紙にもを書いて食ふ生活でも、横文字を讀んで、その意味を若い人達の間に吹聴して、それで生きて行く生活でも、決してそれを嘘の生活であるとは思つてゐません。それは矢張り鉄をとつて土を耕し、額に汗してそこから食べる物を掘り取る生活と同じであると思ひます。百姓にも未熟な者があるやうに、ペンを執る者にも未熟な者があるのは已むを得ない事です。私は以前の頑くな心持を改めて、自分の未熟な點を餘り氣にかけず、これから機會があつたなら、自分の口を自分で養ふ生活に入らうかと思ひます。

近頃屢々吾々の耳を撲つあの×——といふ叫び聲。あれに就て何か私に意見は無いかといふのですか。あると言へばあると言つてよく、無いと言へば無いと言つてもよいと思ひます。私にとつてはあれは極めて簡単な問題です。あゝいふ叫び聲は、あれは古代ギリシヤ時代に一度解決された問題であつて、今日改めてそのよしあしを論議する程の事は無いと思ひます。言葉をかへて言へば、あゝいふ叫び聲の出る事は到底避け得る事では無いと同時に、あゝいふ叫び聲によつて人間の生活が左右されて行つてはたまらぬと思ひます。併しこの問題に就ては私は今のところ深くそれに這入つて行きたいと思ひません。

それよりも、私は、今、君に少しく吾々の周圍に起つたニウスをお知らせせしませう。この事は、君の方へ何等かの方法で日本の新聞が行つてるとすれば、多分もう知れてることと思ふが、併しその知れてる事のほかに、幾分か尙ほニウスの性質を持つてゐる部分もあると思ふから、そのことを少しく書いて見ませう。但しこの事に關する私の知識は極めて貧弱であるから、その内容がこの通りであるか否かは十分に保證する限りではありません。

すべての社會的事象に深い注意を拂つてゐる君の事だから、勿論君がそれを見通してゐる筈は無いが、昨一年間に、三つほどの稍々大きな政治的及び道德的問題がこちらに起りました。例の支那に對する日本の要求と、××大將の後嗣問題と、某といふ政治家の道德上及び法律上の責任問題です。この三つの事件は、或る一部の人々に大なる憤慨を與へたらしい。

福井家の主人の頭に、〇——伯を仆さなければならぬといふ考へがいつ頃から起つたか、それは今私の想像し得ぬところであるが、兎も角も福井の主人は、日本のために（恐らく）危険なる政治家として、〇——伯を除く決心をなし、祕かにその畫策をめぐらしてゐました。それは君がまだこちらにゐた頃からの事です。計畫は次第に熟して來たと見えて、とうとうこの一月中旬の或る夜にそれが勃發しました。多分君がもう印度洋を過ぎてゐた頃でせう。併し幸運なる〇——伯は、その

大きな口が表示してゐるやうに、さういふ計畫に遭つて生命を墮すべく、あまりに運命から祝福されてゐます。福井等が細心の注意と研究とを拂つて製造した、ピクリン酸とコロヂウム液を主劑とした二つの爆弾は、たゞ空しくころ／＼と地の上に落ちて〇——伯の自動車は何の故障も無くその邸へと駛せ去りました。

一週間の後に福井の主人が逮捕されたといふことは、君ももう御承知の事です。その逮捕された時の福井の態度はなか／＼立派なものであつたさうで、私もそれを其家人からきいて感心しました。併し今それをこゝに書くほどの事も無いでせう。

丁度福井の主人が逮捕された時、福井家のあの年寄は病氣だつたさうです。その病氣がさういふ事のために重つて行つたのは、これは何人にも想像される事です。それから三日か四日の後にとうとうあの人も亡くなりました。

一時に父親と年寄とを失つた福井家のあとがどうなつたかといふ事は、君も遙かに心配された事です。併し自然は適當に人の赴くところを拵へて置いてくれるものです。この一月の初めに、私は福井家へ年始に行つて見ました。その時そこでひとりの珍らしい畫家にあひました。その畫家は君も知つてゐるあの路上社の同人の一人です。路上社——去年の秋、君と二人で銀座の三笠の二階に見

たあの小さな展覽會です。あの集まりの中に築地邊のスケッチや、妙な顔の男の肖像を澤山に出してゐた人がありました。私が福井家で會つたのはそれらの繪の作者です。私とその男から受けた印象は、素朴と、稚氣と、不思議な自信と、大膽といふ事です。近頃折々世間に見る一種の變つたタイプの男です。私は今この手紙を書きながら、不思議にあの男の顔と、あの男の書いた繪を結びつけて考へてゐます。あの畫家の繪と、あの畫家の顔と、私は今まであれほどその作者の人物と作品と一致してゐるものを見た事がありません。かう言つても勿論私があゝの畫家の作品を尊重してゐるといふ意味ではありません。その畫家はまさ子さんの友人であるといふことです。どこで、どうして、いつから友人になつた事か私は知らない。近頃ふとした事から杜田といふ人に——君もこの人を知つてゐる筈です——會つた時に、その人はまさ子さんがその畫家と結婚した事を傳へてくれました。杜田は今一つの珍らしい消息を私に傳へてくれた。それは福井のみゐるさんが、T——某といふ慶應かどこかを出た青年と結婚したといふ事です。勿論それに就ては精しい消息をお知らせする必要も無いでせう。

吾々の周圍に起つた小さな事件はこれで終りです。私は君が之等の事件を人生の面に起る小さな泡の一つ二つの生滅と見て、悠々と地中海の空と海とを眺めながら、その職務に勤められん事を祈

ります。大正×年×月×日。東京巢鴨にて、玉蟲謙介。

男の技、女、過、ぬ、草紙の便所、いし

大正十年五月二日印刷
大正十年五月十日發行

(定價金壹圓八拾錢)



■明 黎■

著 作 者

佐 藤 綠 葉

發 行 者

東京市牛込區矢來町三番地
佐 藤 義 亮

發 行 所

東京市牛込區矢來町三番地

新 潮 社

電話番町 (長) 八〇九九番
九三九〇番
振替東京 壹七四貳番

印 刷 所

東京市小石川區西江戶川町
電話(小石川)五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

中澤臨川氏 生田長江氏共著 (上製)

近代思想十六講

定價金貳圓五拾錢、送料拾貳錢

生田長江氏 本間久雄氏共著

社會問題十一講

布表紙上製 定價貳圓、送料拾貳錢

昇 曙夢氏著

トルストイ十一講

布表紙上製 定價貳圓、送料拾貳錢

中澤生田の兩氏が、其の蘊蓄を傾けたる名著也。大版六百頁の雄卷、近代思想の種々相を擧げ、具さに其の眞意義を説く。而して説述飽くまで詳密、此の種の書の道弊たる難解晦澁の憂あること斷じて無し。以て何人も、最も系統的に、最も速成的に、而も、最も完全に近代思想の眞髓に通ずるを得む。

産業革命、労働階級の發生。マルクスの唯物史觀。デモクラシー。ギルド社會主義。サンザカリズム。資本主義的經濟組織。空想的社會主義。科學的社會主義。労働組合主義と同盟罷工。性的道德の革命。婦人參政權問題。婦人職業問題——その他何人も知らざる可からざる社會問題の一切を擧げて詳説す。

トルストイの人と、思想と、藝術と、其の他の一切を擧げ、精叙し、詳説し、細論して刺すところなし。原稿紙九百枚に亘れる大著にして、「トルストイ全集」と稱すべきもの也。トルストイを知るは、近代思想の眞髓に徹し新藝術の根本に觸るゝ所以。此の書即ち刻下何人も必讀すべきものたる也。

著名八の版出近最

■は創作集 □は長篇小説也

■生きんとする者

武者小路實篤氏著

價貳圓 送料拾錢

■夜來の花

芥川龍之介氏著

價貳圓五拾錢 送料拾六錢

■微風

島崎藤村氏著

價壹圓六拾錢 送料拾錢

□運命の影

江馬修氏著

價壹圓 送料六錢

■友情

中戸川吉二氏著

價壹圓七拾錢 送料六錢

■處女の死

加藤武雄氏著

價壹圓拾錢 送料六錢

■秋聲傑作集(2)

徳田秋聲氏著

價貳圓參拾錢 送料拾錢

□戀愛摸索者

谷崎精二氏著

價壹圓拾錢 送料六錢

■ 集 作 創 ■

□ 人 間 集 「人間」同人 二〇	□ 大地の涯 吉田絃二郎 一〇	□ 妻 田中 純 二〇	□ 悩める破婚者 細田 民樹 二〇	□ 學生時代 同 一〇	□ 痴人の愛 久米 正雄 二〇	□ 心の王国 菊池 寛 二〇	□ 羅 生 門 同 一〇	□ 傀儡師 芥川龍之介 一〇	□ 夜の光 志賀 直哉 二〇	□ 一本の枝 同 一〇	□ 小さな世界 武者小路實篤 一〇	□ 傑作選集 鳥 夏目 漱石 一〇
□ 青白き夢 素木 しづ 二〇	□ 樂園の外 舟木 重信 二〇	□ 夢みる日 同 一〇	□ 郷 愁 加藤 武雄 一〇	□ 世の中へ 加能作次郎 一〇	□ 憧 憬 相馬 泰三 一〇	□ 寂しき道 江馬 修 一〇	□ 明るみへ 廣津 和郎 一〇	□ 新しい地 藤森 成吉 一〇	□ 我 (傑作選集) 里 見 淳 一〇	□ 蘇 生 豊島 與志雄 一〇	□ 近代情痴集 谷崎潤一郎 一〇	□ 生活の花 長與 善郎 一〇

□ 送料は凡そ壹圓以上は拾錢、以下は六錢

□ 説 小 篇 長 □

□ 人 間 苦 同 一〇	□ 無 限 吉田絃二郎 三〇	□ 結 婚 期 谷崎 精二 二〇	□ 性格破産者 江口 渙 一〇	□ 煩 惱 同 一〇	□ 若き日の悩み 藤森 成吉 一〇	□ 若 日 加能作次郎 三〇	□ 不滅の像 (1)あこがれ (2)彷徨 (3)新しき旅 江馬 修 三〇	□ 暗 礁 同 一〇	□ 受 難 者 江馬 修 三〇	□ 地 上 (2)地に叛くもの (3)静かなる暴風 同 二〇	□ 地 上 (1)地むの潜 島田清次郎 二〇	□ 地 上 同 一〇	□ 環 境 生田 長江 一〇	□ 嘘 の 果 有島 生馬 一〇	□ 反射する心 中戸川吉二 二〇	□ 性に眼覚める頃 室生 犀星 一〇	□ 雀の生活 北原 白秋 一〇	□ 荊棘の路 相馬 泰三 一〇	□ 二人の不幸者 廣津 和郎 一〇	□ 田園の憂鬱 佐藤 春夫 一〇	□ 時は過ぎゆく 田山 花袋 一〇	□ 生・妻・縁 同 一〇	□ 家 同 一〇	□ 破 戒 同 一〇	□ 泡鳴 (1)放浪 (2)断橋 (3)憑き物 (4)發展 (5)毒藥女 一冊壹圓廿錢つゝ
--------------	----------------	------------------	-----------------	------------	-------------------	----------------	--------------------------------------	------------	-----------------	--------------------------------	------------------------	------------	----------------	------------------	------------------	--------------------	-----------------	-----------------	-------------------	------------------	-------------------	--------------	----------	------------	---

明治大正に亘る傑作の中眞傑作

代表的名作選集

第一	牛肉と馬鈴薯	國木田獨歩
第二	坊っちゃん	夏目漱石
第三	蒲團	田山花袋
第四	透谷選集	北村透谷
第五	春	島崎藤村
第六	(全二冊)	高橋藤村
第七	わが袖の記	高橋藤村
第八	たけくらの記	高橋藤村
第九	爛	徳田秋聲
第十	平	二葉亭四迷
第十一	高野	泉鏡花
第十二	何處へ	正宗白鳥
第十三	今戸心中	廣津柳浪
第十四	耽溺	岩野泡鳴
第十五	明治詩歌選	詩壇六名家
第十六	戀ざめ	小栗風葉
第十七	別れた妻	近松秋江
第十八	はつ姿	小杉天外
第十九	お艶殺し	谷崎潤一郎
十九	俳諧	高濱虛子
二十	煤煙(全二冊)	森田草平
廿一	花枕	正岡子規
廿二	そ	武者小路實篤
廿三	旅役者	長田幹彦
廿四	物言はぬ顔	小川未明
廿五	ふところ日記	川上眉山
廿六	鱧の皮	川上眉山
廿七	女作者	田村俊子
廿八	南小泉村	眞山青果
廿九	少年行	中村星湖
三十	啄木選集	石川啄木
卅一	運命の丘	島村抱月
卅二	和	志賀直哉
卅三	末	久保田万太郎
卅四	善心悪心	里見淳
卅五	里見淳	里見淳
卅六	里見淳	里見淳

羽二重表紙最上製 ■ 中版百六十六頁内外
 定價一冊五拾五錢 ■ 送料六錢

Fig



501

47

終